に命じていはく、汝等速かに今武松を引いて、彼が房間の内を搜し見よ。若し贓物あらば、今宵の賊は果して武松に必すべし。下官等則ち命を奉り、頓て武松を擁て房間の内に入り、先づ櫃を取出だしてこれを開き見るに、上には衣類有りて、下は都て金盞銀盃等約莫一二百兩の賍物ありしかば、武松是を見て大いに驚き、只呆れはてたる許りなり。諸の下官共、彼櫃を搴きて廳前に至りしかば、張都監これを見て、大いに武松を罵つて云く、汝賊配軍かくのごとく不忠不義をなし財を貪るや。賍物既に露はるゝ上は、汝必ず抵賴ことなかれ。諺にも人は貌を以て相すべからずと云ふこと有りけるに、果して此言虛しからず。汝が貌は豪傑とも云ふべき人品にて、我深く汝を信じ腹心と思ひなしけるに、誰かしらんかくのごとき賊心賊骨賊肝あることを。既に今汝が櫃の内より贓物を搜し求めぬる上は、今宵の盜賊いよ〳〵汝たらんこと是を以て明らけし。我尙明日詳にこれを正すべしとて、遂に下官に命じ、其夜は武松を機密房（用部屋といふ如し）の内に入れ置きしかば、武松無實の罪に陷されたるを怨み、甚心腑を惱し思ひ續居ける。張都監は其夜早速人を州裡に馳せて、府尹に賄賂を送り斯くと訴ぬ。又押司孔目以下の役人等にも金銀を送り、翌日早々下官等に命じ、武松を州裡に引かせける處に、府尹まさに廳上に出でければ、緝捕觀察等武松を擁て廳前に至り、又彼贓物を櫃と共に廳下に擡出さしむ。此時かの張都監が使者謹で張都監が文書を取出し、府尹に呈しければ、府尹これを披覽し、忽ち左右に命じ武松を高手小手に縛めさせ、頓て牢守以下の下職共を呼び集め、武松を入牢さすべきよし命じける處に、武松まさに言を發いて分說せしめん氣色現れしかば、府尹其意を悟り、忽ち大いに怒つて云く、彼賊武松は是れ遠流の配軍なれば、本仁義の輩にあらず、いかんぞ賊をなさざらんや。古語にも小人は常の產なければ恒の心なしと云ふこと有り。彼今配所に在つて盤纏をつかひ盡せしゆゑ、忽ち恒の心を失うて賊をなしつらん。既に賍物露はれぬる上は、賊情明白なり。必ずしも彼れが詐の言を聞くことなかれ。只宜しく彼を拷問せよとて已に左右に命じければ、下官共棒搶取て武松を拷問せんと立騷ぎけり。武松此體を見て心中に想ひけるは、我假令幾ばくの分說すとも必定我言を容ゆまじ、しかじ曲て我賊をなしたりと白狀し、且此場の拷問を脫れなば、他日又よき主意あらんと、暗に思案を定め、乃ち呼ばはつて云ひけるは、某あへて實情を白狀すべし。且棒を行ひ給ふことなかれとて、遂に白狀しけるは、當月十五日の夜張都監の宴上に於て、許多の金盞銀盃あるを見て忽ち是を偸んと欲ふ意生じ、乃ち其夜の闌なるに乘じ、遂に忍び入つて偸み取れり。此外に一點も僞る所なし。願はくは拷問を免し給へ。府尹が云く、汝財を見て意を起しぬるは、是則ち小人の所爲なり。且汝を入牢させんとて、則ち牢守に命じ頸枷をかけ、卽時に死罪人の牢中に遣はしけり。武松此日より牢獄の内に在つて暗に想ひけるは、張都監我にいかなる怨有つてか、這等の陷穽を設けて我を陷しけるや。我もし一命を脫れ出牢することあらば、再び事を正さんものをとて、牙を咬齒を切て憤りぬ。扨牢子は手下の下職と商議して、武松が手足に枷を入れ晝夜緊く守つて片時も怠ることなし。

斯かる處に施恩は武松が已に入牢したると聞き及び大きに驚き、慌て忙き城下に來つて父老管營と商議しけるに、老管營が云く、這回張團練蔣門神がために仇を報ぜんと欲し、則ち張都監と共に、詐の計を設けて、武松を陷しぬ。張都監殊更彼の府尹以下諸役人等賄賂を送りける故、府尹を始めとして役人等武松が分説を容ひず、只顧武松を殺害せんとのみ謀ることなり。然れ共我又是を熟々思ふに、武松を救はん計は唯獨り兩院の押牢節級を頼みなば、方によく武松が一命を脱れしめて、何方にも逃し置き、他日又別に商議して此恨を雪ぐべし。施恩が云く、當牢の節級姓は康にして某と交り厚ければ、某自ら節級が家に赴て宜しく頼み申さんこと可ならんや。老管營が云く、武松が禍に遭たるは、素是汝が事に因てなれば、汝今行きて彼れを救はずんば、さらにいづれの時をか期すべき。よろしく早々に馳せて節級を頼み、いかんとも能き計を用ひて、武松が災禍を救ふべし。施恩父の命を受け、大いに悅び、乃ち二百兩の銀を以て、直ちに康節級が宿所に至りける處に、康節級は猶牢中の役所に在つて、未だ回らざる間なれば、施恩乃ち節級が家人を牢中に遣し斯くと告げければ、康節級頓て家に回り、遂に施恩と相見座已に定りし處に、施恩先づ忙はしく武松がことを一々詳に語りしかば、節級これを聞いて云ひけるは、這回武松がことは都て張團練が爲せし所なり。張團練本張都監と同姓なるゆゑ、義を結びて兄弟の盟を誓ひけるが、頃日かの蔣門神を己が家に躲し置きぬ。抑且蔣門神が爲に仇を報せんと圖つて、計を張都監に求め、遂に武松を無實の罪に陷し、又多くの賄賂を諸役人に送り、彌武松を害せんと欲す。某らがごとき役人等も都て皆彼が賄賂を受けぬ。此ゆゑに府尹相公も、武松を死罪に行はんと圖り給へども、唯獨り葉孔目同心せざるに依つて、未だ武松を殺さゞるなり。這葉孔目は人となり尤も廉直にして、辜なき者を殺さず、況んや一毫も金銀を貪ることなし。已に這回も張都監が賄賂を受けざりぬ。此故に武松猶一命を保つて恙なし。今日某足下の頼みを請けし上は、我自ら武松を憐み、向後彼に半點の苦しみを懸ることあるまじければ、足下は早く緣ある人を求めて、葉孔目の力を頼み給へ。然らば武松が命は必定恙有るまじ。施恩此ことを聞いて大いに悅び、則ち彼二百兩の銀の内一百兩を取出して、康節級に送りければ、康節級再三辭して還しけれ共、施恩又再四詞を盡して送りけるゆゑ、康節級遂に辭すること能はずして收めけり。施恩此時營裡に回り、又葉孔目と親しき人を尋ね求め、一百兩の銀を葉孔目に送つて、武松が塲宜しかるべき決斷のことを頼みければ、葉孔目も、素より武松が眞の豪傑たることを知れば、いかんともして助けたく思ふ時節なれば、いよ〳〵武松を憐んで再三府尹に告げけるは、武松が賊情のこと全く分明ならず、縱ひ金盞等の物を偸み取りたりとも、いかんぞよく死罪に行はんや。只よろしく公に決斷し給へ。府尹は曾て張都監より賄賂を請けしゆゑ、何とぞ武松を害せんと欲すれ共、葉孔目に固く理りの當然を説れて、妄りに殺すこと能はず。只牢中にて武松を害すべしと暗に謀を轉しぬる所に、康節級又施恩が頼みを受け、一百兩の銀を得たりしかば、武松を懇に憫み、少しも餘儀なかりける間、

武松想はず府尹が毒手を脱れて、一命を恙なく保ちけり。

此處は、原本三十回にて標目に施恩三入二死囚牢一とあつて、大いに傳文と齟齬す。支那にて編者の輕忽なり。岡島氏の譯本通俗忠義水滸傳も誤たるまゝにて改ず。今般標目を更新に掲出す故、こゝに其ことを述。

武松大に飛雲浦を鬧す

施恩は翌日多く酒食を具へ、康節級を頼みてこれを牢中に送らんと欲しければ、康節級これを許し、遂に施恩を引いて大牢の邊に來りけり。此時武松は康節級が憐みを被りて、手足の枷をも除かれ、頗る寛ぎしかば、暗にこれを感悅せし處に、施恩は武松に對面して大いに悅び、乃ち酒食を牢の内に饋りて武松に食しめ、又若干の銀子を取出して、牢子以下の者共に送つて武松がことを頼みしかば、衆皆悅んで領掌せり。施恩又武松が耳に附いて低言けるは、這次禍ひ明らかに是張都監、張團練二人の輩が蔣門神が爲に仇を報せんと欲し、長兄敬ふこを計に陷し、かくのごとき無實の難を受けしめぬ。然れ共先づ心を寛げて憂愁し給ふことなかれ。我已に一人の友を頼みて、葉孔目が方へ長兄のことを通達しける處に、葉孔目甚だ長兄を敬ふの心有つて、内外宜しく力を用ひ、長兄を助けんと圖り已に今死罪を改て流罪に決斷すべき由なれば、在牢の日限滿なば、長兄再び牢を出て、配所に赴き給ふべし。然らは又別に商議をなして事を全うすべき間、必ず能く寸志を安んじ日限の滿るを待給へ。

武松は此頃手足の枷を除れ身體寛ぎけるゆゑ、もし宜しき便機を得なば、牢を越て逃出でんと圖りしかども、施恩が言を聞き先づ此念を休にけり。施恩此日は牢門の外に在つて、終日武松を慰め、已に黄昏に至つて營中に歸り、翌日又酒食錢財を調へ、康節級と共に牢中に來り、乃ち武松に遇うて酒食を欵待、又錢財を分ち、牢子以下の者共に送つて酒錢となさしめ、其日も又暮に及び營中に歸り、又有縁の人を頼んで大小の役人等に賄賂を送り、武松が身の上恙なく急に決斷あらんことを求め、又兩日を經て、酒食ならびに兩三套の衣服を調へ、再び康節級を頼み、これを牢中に送つて武松に與へ、其の外別に多く酒食ならびに肉果諸物を牢子以下の者共に送り、欵待ぬ。此より後は施恩毎日牢中に出入りして、武松を訪ひける處に、張團練が家人等是を見て張團練に斯くと告げければ、張團練これを聞いて、大きに驚き忙はしく張都監が館に至つて詳かに是を語りければ、又多く金帛を府尹に送つてこのことを告げしらせし處に、府尹は原來賄賂を貪る賊官なれば、また金帛を得て大いに悅び、これより常に下官らを牢中に馳しめ、動靜を伺はしめ、もし人の來るを見ば立處にこれを捉へよと、嚴しく命じければ、是を奉り下官ら毎日牢獄の邊に來つて緊く窺ひけるゆゑ、施恩再たび牢中に來つて武松を訊ふこと能はず。唯康節級幷に牢子以下の者共を頼みて、武松を介抱なさしむるのみなり。此より施恩は毎度康節級が家に至つて、武松が消息を求め、尚且多く金銀を用ひて武松が一命を免がれしめんとぞ圖りける。既にして前後兩月あまり過しぬる所に、葉孔目再三再四府尹につげて武松實に

罪なく張都監等が詐の計に陷しいれ、其上張都監は蔣門神が莫大の賄賂をうけて、非法のことを巧成したるよし、細々と語り聞かせければ、府尹も始めて武松には一點の罪なきことを知り、暗に恚り張都監已に蔣門神が若干の賄賂を得て、武松を我が手に送つて殺さんとするは、却つて是我を欺くに似たり。我向後此事を疎んずべしとて、此より府尹も武松を害せんとする計を休て、牢中のことも制せざりしかば、施恩が父老管營再び酒食を牢中に送りて武松に與へ、益金銀を費し、武松が爲に諸役人の方へ賄賂を送り、いかんともして武松を救はんことを計りける。斯かる所に、はや二ヶ月の日限已に滿ければ、府尹は武松を牢中より呼出して、罪を決斷しけるに、葉孔目武松がために力を用ひて愈流罪に定め、即日武松を二十杖を策て面に金印を刺黥して乃ち恩州を配所とし、文書を兩人の下官に與へて武松を送らせければ、兩人の下官ら命を承つて、武松に頸枷を枷、即日武松を引いて孟州を離れ打出でけり。扨張都監等は、武松が死罪を免れて流罪に決斷したることを聞いて、心中甚だ悅ばず、只一人の家僕を官府に馳せて、贓物、金盞、銀盃等を請取けり。武松は先に二十杖を受けし時、老管營葉孔目を賴んで諸役人に賄賂を送りけるゆゑ、其杖ことに輕くして痛むことあらざりけり。武松は深く張都監等を怨みしかども、先づ是を忍びて心中に收め、遂に兩人の下官に引かれて孟州城を一里計り馳せ出でし處に、施恩其邊の酒店に在りて、内より走り出で武松を迎へければ、武松悅んで施恩を見けるに、顏色頗る衰へ頭を包み臂を卷てありしかば、武松心中に其形を怪み、乃ち問うて云ひけるは、小管營は何故かくのごとき模樣になり給ひしぞ。且先日は毎度老管營の方より酒食を饋り給ひて、消息ありしかども、汝は却つて久しく音耗も寄せ給はざりしは、是いかなることぞや。施恩答へて云く、某向に數度長兄を訪うてよりの後、府尹是を知り、下官らを牢中に遣はして堅く人の出入りを許さずして、專ら某が來るを待ちて捉へんと圖りけるゆゑ、某此より牢中に至つて長兄を訪ふこと能はず、只康節級が方に赴て長兄の消息を求むるのみ。某半月以前快活林に回り、店の内に坐して居ける處に、彼蔣門神又大勢を引來り、某が店の内に打つて入り某を散々に打倒し再び店を奪ひ取り、若干の家財等こと〴〵く彼に有れぬ。某是に因て身を惱し久しく床に臥して在りしか共、今日長兄配所に赴き給ふと聞きしゆゑ、兩套の綿衣を長兄に送らんが爲、こゝ迄馳せ出でたり。抑且別れの盃をも勸めん間、此處の酒店に入り給ひ、暫く歇み給へとて、同じく兩人の下官を請うて酒屋に邀へ入れんとせしか共、兩人の下官あへて入らずして、忽ち聲を勵して云ひけるは、武松は是賊漢なるに、我輩もし汝らが酒食を食することあらば、他日いかなる累か我が身に及ばん。唯よく急に馳せ行くべきに、汝かならず路を攔ることなかれとて、再三武松を催促し急ざければ、施恩此體を見て心中に苦しみ、即ち一錠十兩の銀を取出し、兩人の下官に與へける處に、兩人却つて大いに怒り、我輩何ぞ汝が銀を受けんやとて、武松を催し路を急ぎしかば、施恩今は力に及ばず、只兩碗の酒を斟で、武松に飲ましめ、また一つの包袱蘊を武松に與へて私に云ひけるは、此内に

は二重の綿衣と一包の銀子あり。長兄宜しく途中に於てこれを使ひ給へ、我熟彼兩人の下官を見るに、もと好意を懷ざる輩なれば、路次の間隨分心を用ひ怠り給ふことなかれ。武松が云く、我はやく、此意を曉して已に所存ある間、汝は只心を安んじ、養生專一たるべし。我必ず再會の期をはかるべし。此時施恩繼々として泪を洒ぎ、袖を霑して別れけり。扨武松は兩人の下官に引かれ、十里ばかり馳せける處に、兩人の下官私に商議して云ひけるは、彼二人の輩は何ゆゑ來らざるや、老早來るべきことなるにと低言しかば、武松隱々に是を聞いて心中に想ひけるに、此兩人の下官必ず我をいかんとも圖るらん。遮莫、なんぞこれを恐れんやとて、又八九里ばかり行きけるに、前面に二人の漢子刀を帶して待居けるが、兩人の下官と一所に成りて共に武松を監押して往きければ、武松怪みてこれをみるに、兩人の下官只顧かの漢子等に向ひ眼弄し、暗に相圖を通ずる模樣なりしかば、武松はや是を七八分猜して唯自ら心中に收め詐て見ぬ體にもてなし、又三四里ばかり馳て、前面を見るに浩々蕩蕩たる一つの浦あり。橋の傍に一座の牌樓あり。上に一片の額を掲、三大字あり。是卽ち飛雲浦と書けり。武松は是をもしらざる體にして問ひけるは、此邊の地名は何と云ふ所ぞや。兩人の下官答へて云ひけるは、汝も人と同じく眼明かにして、いかんぞ牌樓の上の額を見ざるや、分明に飛雲浦と云ふ三字を寫せり。武松又浦の邊に立住て云ひけるは、我こゝにて淨手せんに暫く待ち給へと、未だ云ひも終らざるに、一人の下官進み寄りし處に、武松大いに聲を放つて雷のごとく吼り、只一脚を飛ばして彼下官が小腹を蹋たりしかば、彼下官大力に蹋られて眞倒に水中に落ち入りけり。彼一人の下官これを見て、急に逃んとせし處に、武松大いに怒り、引捉へ猛勢を振ひしかば、頸枷は自ら颯と二つに劈たり。武松是を取り上げ、下官と共に水中に投げ入れ、尙勢ひに乘じ橋の下に赶來りし處に、かの兩人の漢子先づ一人は眼を眩して地上に倒れぬ。武松頓て趕着て、彼一人が後心を拳も碎るばかり打ちしかば、只一聲阿と叫んで倒れたり。武松卽ち此男が帶せし處の刀を奪取、遂に胸の上を一衝刺て推伏、又立ち回つて彼倒れたる漢子を殺さんとせし處に、彼漢子漸々扒起て逃走らんとしけれども、武松電のごとく跑來り、急に頭を揪へて大いに罵りけるは、汝は何奴なれば敢て來つて虎の鬚を撚らんとするや、もし實情をいはゝ、我肯て汝が一命を饒さん。もし然らずんば彼三人の者を例として忽ち殺すべきぞ。這漢子大いに怕れて云ひけるは、我輩兩人は實に是蔣門神が武藝の弟子なり。今蔣門神張團練が計を設け、某兩人を此處に馳せて則はち兩人の下官と力を併せ、豪傑を殺さんと計りぬ。もと是某らがなす所にあらざれば、豪傑明らかにこれを察して一命を饒し給へ。武松が云く、汝が師蔣門神は今何れの所にありや。那漢子答へて云く、某ら彼地を出でし時は蔣門神は張團練と共に張都監が後堂の鴛鴦樓にあつて酒を酌み樂み、專ら我が輩が消息を待つとなり。武松が云く、既に此のごとくんば、汝を饒がたしとて、遂に頭を刎にけり。武松此時渠らが帶したる刀の中其一腰を撰み出して是を帶し、彼の兩人の下官死せざることもやあらんとて各胸の上を刺通し、再

び橋の上に休息しながら熟々思ひけるは、只此四人の者を殺したりとも、若し彼張都監、張團練、蔣門神此三人を殺さずんば、いかんぞ能く我此度の怨を雪ぐならんとて、良久しく躊躇して在りけるが、遂に意を決し、再び孟州へこそは引歸しけり。張團練蔣門神兩人の輩は武松を害せんと欲して、張都監に賄賂を送つて計を設け、竟に武松を陷阱に隕して官府に送りしかども、武松幸ひに葉孔目に助けられ、此日流罪に決斷して配所に赴くよし聞こえければ、蔣門神等後々患あらんことを恐れ、監押の下官兩人に多く金銀を與へ、武松を害せんことを云含め、又二人の弟子を遣し下官らと共に、力を併さしめける所に、豈しらんや、四人の者共却つて飛雲浦に於て、一人も殘らず武松に殺されぬ。武松は孟州城に回り來れば、紅日已に落ちて家々戸を閉、處々門を關しけり。武松は直ちに張都監が後園の外に至つて、此處をみるに、後門の内に一軒の番所あり。武松門外に伏して内の動靜を伺ひけるに、門を守る者は衙門の内に在つていまだ歸らざるにや、人音更になかりしかば、武松心中に忖りけるは、もし門を守る者回りなば、我必ず計を以て門内に入らんものをと、頸を伸して待居ける處に、一人の漢子燈籠を提て出來り、乃ち後門の四方を看廻して、番所の戸を開き直ちに床の上に登りて睡りけり。武松門外に在つて鐘の聲を聞くに一更の鐘なり。武松故意後門を推て響せければ、彼漢子此響を聞きて呼ばはりて云ひけるは、門外に在つて門を開かんとするは何奴ならんや、我纔に今睡らんとするに、汝何んぞはや來るや、若し速かに逃去らずんば、我再び起て汝を捉ふべきぞ。

武松これを聞いて、却つて心中に悅び、彼刀を拔て右の手に提げ、左の手を以て頻りに門を推響せければ、彼漢子大いに怒り、暗に床を下て短棒を搶取、直ちに門邊に來つて忙はしく門を開き、武松を捉へんとせし處に、武松猿臂を伸して彼漢子が頸の骨を緊と捉へしかば、骨も碎くる計りに覺て禁難かりけるゆゑ、再三喊ばんとせしかども、第一は大力に頸の骨を揪へられて聲出でず。第二は武松が手に月晃々刀を持ちたるを見て大いに肝を消し、唯一聲命をゆるし給へとのみ呼ばはつて、其次は又聲を出すことならず。武松が云く、汝我を識認けるや。彼漢子武松が聲を聞いて、初めて武松たることを知り、大いに怕れ慄て云ひけるは、都頭我を饒し給へ。這回都頭無實の難に遭給ひぬるこそ此家に恨有るべけれ共、曾て某が干りしことにあらず、只願はくば我が命を害し給ふことなかれ。武松が云く、汝もし實情を說ば、我肯て汝を赦さん。張都監は今何れの所に在るやらん、詐なく我に告げよ。彼漢子が云く、我主人は今日張團練蔣門神等と共に終日酒を酌んで樂れけるが、尙鴛鴦樓に在つて夜飮を催し居給ふなり。武松が云く、汝此言に詐なきや。彼漢子が云く、某豈敢て讖を云はんや。都頭必ず疑ひ給ふことなかれ。武松が云くすでにかくのごとくんば、汝をも饒しがたしとて竟に刀をあげて頭を刎、其屍を傍に捨置、再び刀を鞘に收め忙はしく番所の内に入つて彼施恩が送りぬる綿衣を取出してこれを着し、暗に門の上に跳上つて墻をこえ、直ちに鴛鴦樓の下に至りて、此所を窺ひみるに、三四人の丫嬛一處に在つて再三怨を含んで云ひけるは、彼兩人の客、今日朝飯後

より酒を酌んで度々茶よ水よと只願我々を勞しけるが、猶回らずして亦復夜飲をなすは、これ何の道理ぞと、再三低言諫りけり。此時武松刀を拔手に提、遂に門を推開て走り入り、頓て彼女等に向て云ひけるやう、汝らは定て我を識認つらん。若し一聲にても喊ぶことあらば、我今汝らを殺すべしと、未だ云ひも罷らざるに、其内一人の女已に聲を放つて喊びしかば、武松大いに怒て、これを只一刀に斬殺しぬ。其餘三人の女急に逃んとせしかども、身癱脚痲れ走り動くこと能はず此彼に倒れし處に、武松這女等をも共に斬殺し、暗に後堂の内に走り入つて鴛鴦樓の梯子を登り、漸々と半に至つて、且耳を側めて動靜を伺ひ聞く所に、彼張都監、張團練、蔣門神各談話して在りけるが、蔣門神先づ云ひぬるは、相公這遭某らが爲に、武松を殺して仇を報じ給ふこと、此恩尤莫大なり、他日必ず重く報せんと、纔に云終りし處に、張都監これに答へて云く、我もし義弟張團練の賴みを受くるにあらずんば、いかんぞ肯て這等のことをなさんや。汝多くの金銀を費したりと云へ共、這次の計極めて神妙なれば、又不可なる所なし。定めて今時分は彼四人の輩、已に手を下して武松をば飛雲浦の邊にて殺しつらん。多くは渠等明日歸るべき間、共に消息を聞いて悅びを催すべし。張團練が云く、彼四人の輩は殊更物馴たる者共なれば、老早武松を殺して今宵の内に回ることもやあらん。蔣門神又云く、某彼兩人の弟子に再三命じ、はやく殺して速かに回れと申含ぬる間、彼等必ず早く手を下して殺すべければ、少刻悅びを告げ歸ること有るべし。何んぞ延引して明日に至るべき。武松已に三人が言を聞いて大いに怒、今飛蒐らんやと思ひ居ける。今夜武松何等の働きをなすや、次の卷を見て知るべし。

三編卷之八

張都監血鴛鴦樓に濺

武松は已に鴛鴦樓の梯子を半上りて、張都監、張團練、蔣門神等が談話を聞すまし、今跳蒐り皆々を斬て棄んと心焦燥を推怺へけるが、各の云ふ所を一々能く聞認ければ、右の手には刀を持ち、左の手に拳を揑り緊め、梯子を上り了つて樓上に顯れ出で、我老早此に在て汝等が談話一々聞たるぞといひければ、蔣門神先づ武松を見て愕然、肝も魂も九霄の雲外に散り、渾身癱縮み、恰も卒中風の發したるがごとくなり。然れども此者原來有名の力士なれば、急に座を起ちて掙扎んとせし所に、武松虎の威を奮ひ、嚮に我汝を免し、若し當地に隱れ居ば忽ち尋ね出し殺さんと、堅く申付たるを用ず、惜からぬ命と思へば、汝が願ひに任かするぞと、只一刀に斬倒し、また身を回して張都監に斬て蒐りしかば、忙はしくこれを迎へんとせしかども、武松電の如く跳入て眉間を剳劈ければ、遂に樓板の上に倒れけり。張團練は本武夫の家に生れたる者なれば、酒後といへ共尙臂に力の覺えあり。傍にある椅子を取て、武松に打て蒐りし處に、武松勢に乘じ唯一推おしければ、何かは以て熬ふべき、忽ち地上に倒れしを、武松飛入て、水もたまらず遂に頭を刎落し、蔣門神が頭も刎んとせし處に、初刀淺

武松屠殺
仇人血書白
壁一
殺者

傷なりしにや、再び立起り掙扎んとせしを見て、武松大きに怒り、忽ち右の脚を飛せて席上に蹋倒し、刀を擧て頭を刎ね、張都監が側に立寄り、抑汝は何の意恨有つて我を欺きたるや。我今汝が腹を剔五臓六腑を剜出し、一々怨を述べけれども、夜の闌んを厭ふにぞ、格別に慈悲を垂て唯頸を刎るぞとて、忽ち首を打落し、盃盤の狼藉たる中より、一つの大盃を擇み取り、自ら酒を篩で一連に三五盃飲乾し、再び張都監が屍首の前に至り衣の襟を扯斷り、則ちこれを血に薫し白壁の上に八つの大文字を書て云く、殺レ人者打レ虎武松也と、纔に書記りし處に、樓下に夫人の聲と覺えて呼はり云けるは、樓上の噪しきは、定て賓主醉給ひての事ならん。誰にても早く樓に登て扶け進らせよと、未だ云ひも終らざるに、兩人の漢子はや樓へ上り來りければ、武松急に身を藏しこれをみるに、此兩人の者は張都監が心腹の家人にて、前日後園の内に於て武松を捕へし者なれば、武松暗に悅こんで控へ居たりける處に、かの兩人席上に來りみるに、三人の屍首血泊の内に横たへて有ければ大に驚き、面を覩合せ唯呆れ果たる計にて、敢て聲をも做ず急に身を回さんとせし處に、武松躍り出て、只一刀に一人を斬倒しければ、彼一人は忽ち地上に拜伏し、一命を饒し給へと頻りに涙を流しけり。武松是を見て呵呵と大に笑て云けるは、我汝を饒しがたし、宜しく死を致せとて、遂に頸を刎落しぬ。武松熟想ひけるは、諺にも一に做ず二に休せずと云ふ事あるに、我何ぞ只四五人を殺し打休んや。縱ひ千百人を殺すとも、畢竟一死するのみなりとて、再び刀を提げて樓を下りければ、夫人誤つて武松を家人と思

ひけん。乃ち問て云けるは、樓上は何ゆゑかくのごとく騒動するやと、猶未だ云ひ了らざるに、武松房間の前に至りしかば、夫人此大漢子を見て大いに驚き、汝は誰なれば我家に來りしぞ。武松が云、汝我を忘れたるやとて、遂に刀を揮つて頭を刎落し、猶再三左右を顧みるに、彼張都監が寵愛の使女玉蘭、房間の内より燈燭を提げて出けるが、夫人が斬れたるを見て、忽ち眼を眩し倒れんとせし處に、武松早く馳來り、遂に胸の上を二刀刺て押伏せけり。斯る處に又三四人の男女出ければ、武松是をも斬殺し、乃ち四方八面を搜し、總て二十餘人を斬倒し、今は心地よしと悅んで遂に後門を馳出て城下に至り、今宵速に城を越て城外に逃出べしとて、頓て城門の邊に來りて伺ひ見るに、城門を守る軍卒等盡く熟睡して、更に物音なかりければ、武松心靜かに背後の方より繞り出で、急に城門の上に登りて下を望み見るに、此城原來小城なるゆゑ、城門も又大いならず低ければ、武松平生の術を盡し、足を縮め身を躍らして只一跳に飛下り、頓て正陣の橋を過りて、纔かに二三十步餘り行し處に、はや三更の鐘四方に響きて耳に轟きぬ。武松東の小路を望んで一時ばかり馳しかば、又早く五更の鐘所々に響ぬ。武松終夜辛苦して身體疲れ、なほ且嚮に打れたる二十杖の棒の痕、再び發して大いに痛みければ、武松頻りに勝がたく、暫く憩はんと欲して前面を望み見るに、樹林の内に一つの古廟ありければ、武松幸ひなるかなと悅んで、遂に廟中に入睡りし處に、傍より四人の漢子現れ出で、鈎索を以て武松を搭住、頓て高手小手に綁め引起しければ、武松漸々睡りを醒し、大いに驚きけり。彼四人の漢子武松を見て云けるは、此漢子肉究て多し。宜しく長兄の方に送るべしとて、恰も羊を牽がごとゝに、武松を引て村中を望み馳來り、路すがら四人齊しく云けるは、這漢子一身に血の跡あるこそ怪しけれ。多くは賊をなして斯身を打傷はれたるに疑ひなしと語て、漸々四五里計り馳ける處に、はや一軒の草屋の内に至て武松を引入れ、乃ち燈の下にて武松が衣裳を剝取り、頓て武松を亭の柱に絆り着て、四人相共に造化よしと悅びけり。武松密に竈の邊をみるに、梁の上に人の腿許多掛置ければ、武松心中に想らく、我不幸にして這輩が毒手に中つて死せんこそ拙けれ。我老早此禍に遇ふことを知るならば、孟州に於て自殺を遂げ名を後代に遺さんものを、今此處にて非命の死をなさんこと返す〴〵も遺恨なりと、牙を咬齒を切るばかりなり。彼四人の漢子、武松が包袱蘊を取て高聲に呼はり云けるは、長兄阿嫂おやかた夫婦をさしていふ早く來つて我輩が得采を見給へ。好き一疋の大牛を求て牽回りぬ。其時内より一聲答ていふ。我少刻來らんに、且手を下して皮を剝ことなかれ。武松これを聞て内より答たるは、何者なるにやと思ひける處に、やがて兩人出來る。武松これをみるに、一人は女なり。兩人齊しく云けるは、是は此武都頭にはあらずや。かの一人の漢子が云く、眞に是我が義弟武都頭なり。早く綁を解と云て、四人の者に命じければ、武松これを怪みて、再び睛を定め、彼の兩人の男女を見るに、彼漢子は則ち柴園子張青なり。彼女は是母夜叉孫二娘なり。此時彼四人の漢子張青夫婦が言を聞て大いに驚き、忙はしく武松が索を解て衣服を着さしめ、則ち前面の客廳に延て、座已に定まりければ、張

青先づ大いに驚きて云けるは、賢弟敬ふこは何ゆゑかくのごとく血に染て此邊に至り給ひしぞ。武松答へて云く。我今此體にて此邊に到し所以、尤一席の言に盡しがたし。我嚮に長兄に別れ、孟州の配所に至り、想はず管營父子が懇意を蒙れり。乃老管營が男小管營が姓名は金眼彪施恩と云ふ。此施恩毎日好酒好肉を以て某を欵待し、少しも怠慢のことなかりし。施恩本孟州城の東快活林と云ふ處に、一間の酒店を開きぬ。毎日毎月若干の高利を得けるに、張團練と云者、向に孟州に至りし時蔣門神と云ふ力士を引て來りけるが、這蔣門神己が豪強に倚て擅に施恩が酒肆を奪ひ取り、施恩を散々に打しゆゑ、施恩原官府へ訴んと欲しけれども、張團練が威勢に怕れて訴ふること能はず、徒らに臍を嚙で忿りぬ。此故に某施恩に代つて彼蔣門神を打散して、再び酒肆を取り復し施恩に與へしかば、施恩父子彌某を敬うて欵待ぬるゆゑ、某も又心を安んじ施恩と一所に酒肆の内に住しける處に、蔣門神此仇を報はんことを欲して、張團練に計を求め、遂に張都監が方に賄賂を送て某を殺さんことを賴みければ、其賄賂を悅んで賴に應じ、乃某を招て己が家に留置き、專ら懇情の體にもてなし某に心を寬さしめ、遂に詐の計を設け、某を後園の内に賺し入れ、則ち我を捕へて賊となし、翌日孟州府に送て我が命を害せんと計りぬ。然れども施恩父子、多く賄賂を上下の諸役人へ送て某が免れんことを求めぬるゆゑ、其在牢の時もさまで苦みも受ざりけり。こゝに又葉氏の孔目ありけるが、這人平生義を重んじ財を輕んじ、專ら人の禍ひを救はんと欲し、毛頭も私の非道を行はざるゆゑ、深く某が無實の罪に陷たるを憐み、再三府尹に告て、遂に某が命を救ひぬ。且又康氏の節級有けるが、原來施恩と交り厚きゆゑ、始終某を憐み在牢の中這人の情を蒙ること多し。是らの故にて一命恙なく保てり。若し是らの助けなくば、必ず牢中に於て害せられん。焉ぞよく今日の命あらんや。既にして六十日の限滿ける處に、二十杖策うたれ流罪に極りし處に、張都監また蔣門神が爲に計を設け、是非某を配所の道にて害せんと圖り、乃ち蔣門神が武藝の弟子二人を馳せ、彼監押の下官兩人と力を合せ、直ちに飛雲浦に至て、四人全く議を定め、已に手を下し我を殺さんとせしゆゑ、某豫じめ其意を悟り、乃ち兩人の下官を水中に蹋落し、蔣門神が弟子兩人各一刀に斬殺し、再び又孟州城に回り、竟に張都監が後門より忍び入り、鴛鴦樓に上り、乃ち張都監、張團練、蔣門神、此三人を一時同座に斬殺し、猶張都監が夫人を初として一家男女を盡く斬盡し、早速城門を越て、一時ばかり走りし處に、棒瘡再發して禁じ難かりしにより、古廟の内に入て暫く眠りしかば、這四人の輩鈎索を以て我を搭仕終に綁て此處に至れり。某縛り引立られて、初て眼醒て誠に茫然たり。しかし良緣絶ず、料らず長兄に相遇ふこと是則ち我が福の至極なりと、已に談じ終りければ、彼四人の輩忽ち地上に拜伏して云けるは、某等皆張大哥敬ふこの家人なり、頃日博奕に輸て本錢盡ぬるゆゑ、少し錢財を求んと欲して、方々を尋ね續りし處に、都頭血淋々になつて古廟の内に睡居給ふを看着け、是得采なりと悅こび、遂に鈎索を以て絆めまゐらせり。某ら元來下愚鄙賤の徒なれば、眼ありといへども眞の英雄

を識ず、安りに尊體を穢しぬること、今更罪を謝するに所なし。願くは都頭廣く仁慈を垂れ給へ。張青夫婦打笑て云ひけるは、我が輩毎度都頭を夢みて吉ならざるゆゑ、何とやらん心にかゝり、乃ち彼輩に命じて縱ひ人を刹とも只活捉にして性命を害することなかれと、再三禁め置ぬ。是則ち我ら夫婦豫じめ存念有りてのことなり。今日都頭かくのごとく禍を蒙りて此處に至り給ふは、偏に我ら夫婦が夢に應せり。武松此時かの四人の者に對して云ひけるは、我幸ひ汝らに捉はれたればこそ、此處に至て張青夫婦にまみゆることを得たり、是誠に汝らが賜なり。汝既に博奕に輸て下梢盡しとならば、我今汝らに少しの銀を與へんまゝ、これを下梢にせよとて、乃ち十兩の銀を取出して四人の輩へ分ち與へければ、彼等大いに悅んで拜取せり。張青これを見て、己も又三四兩の銀を取出し、四人の者に與へけり。張青又武松に對して云けるは、我今存念有と云しは、我老早都頭の必ず災難に遭て、此邊に徘徊し給はんことを知りぬ。此ゆゑに彼四人の輩に命じて云けるは、汝ら途中にて人を刹取るとも、必ず性命を害せずして活捕にせよ。もし萬一豪傑の士にあうて敵すること能はずんば、早速來て我に告よ。我其豪傑の士に見えて云ふ事ありと示しぬ。此故はいかんとなれば、彼らもし都頭に遇うて都頭を刹んとする時、四人はさて置四十人を以て齊しく敵し鬪ふとも、いかんぞよく都頭に敵せんや。然らば彼等必ず逃回て我に告ん、其時我急に馳來て相見え、其豪傑もし武都頭にも在るならば、早速延て我家に歸らんと圖りしなり。然るに都頭今日禍を蒙り給ひて此邊に至り給ふこと、尤も是奇異の至り、都頭もし睡りを醒し居給ふ時ならば、彼ら四人が働きにて、いかんぞかく捉ることあらん。我ら夫婦豫かじめ都頭の災難を蒙り給ひしを知しは、都て是夢の凶に依てなり。今日上天良緣を假給ひて、再び恙なく遇ぬること、互の福ひ何事かこれにしかんや。此時又孫二娘が云く、都頭かくのごとく辛苦を請給ひぬることなれば、定めて心身大いに疲れ給はんに、先宜しく客室に入りて歇み給へ。猶明日商議すべしとて、夫婦同じく武松を延て客室に至り、其夜は各歇みけり。

武行者夜蜈蚣嶺に走る

偖孟州城の張都監が館には、屍許多四方に横はり、血は流れて池をなしぬ。家人の内兩三人床の下に躱れ命を脫れし輩、直ちに五更の時を得て門外に走り出、大に呼はつて云けるは、昨夜武松と云者館門の内に踏こんで、相公夫人を始めならびに一家の男女盡く斬殺したるに、隣家の衆中早く集り給へと頻りに呼はりしかば、隣家此聲を聞いて大に駭きしかども、敢て一人も出來る者あらず、盡くみな曉に至て馳來りぬ。其後漸張都監が手下の役人ども、都て追ひ〳〵に馳來り、各此光景を見て、只呆れたる許なり。已にして諸人商議を定めて、衆皆孟州の官府に至て、府尹に斯と訴へければ、府尹是を聞て大に驚き、早速人を馳て屍を査點させ、又役人等に命じて武松が形を寫さしめ、急に尋出さんと計りけり。斯る處に彼張都監が家に來て査照をなしたる者共、已に回て府尹に告一々詳に語りし中に、白壁に血を以て書たる八字を寫して、府尹に呈す。府尹取上てみれば、殺人者打レ虎

武松也と云字なるゆゑ、府尹益心を驚かし、忙はしく人數を催し緝捕の官に興へ、先偏僻の地を搜させけり。翌日又飛雲浦の保正諸の鄉人を引て、孟州城の官府に至り訴へけるは、何者の所爲なるにや四人の漢子を斬殺し水中に捨置ぬ。しかも血の痕此彼に殘れり。是に依て早々訴へ申すなり。府尹是を聞て又一驚を加へ、その日人を飛雲浦に遣して、四人の屍を撈ひあげさせ、乃ちこれを査點けるに、其内兩人は武松を押監したる下官なり。其外兩人の屍首も各親類有て姓名住居分明なり。府尹役人等と商議して云けるは、武松數十人の命を害したること、其罪九族を滅すに當れり。尋常の公事とは等しからず。先宜しく城下の人家を搜すべき間、城門を關して内外人の出入を留よとて、一連に三日城門を閉、東西より南北に到り、只一宇も遺さず、專ら緊く深閨、幽室、前庭、後園都て搜さすと云處なし。此とき施恩父子は此事を聞て、武松が捉はれんことを恐れ、多く金銀を諸役人に送て、武松を走らしめんことをぞ賴みける。さて府尹は武松は城下に在ざることを聞て、亦復武松が相貌模樣を寫して、三千貫の賞錢をかけ、諸府に文書を下し、專ら嚴かに武松を尋ね覓めけり。武松は張青が家に四五日逗留して在ける處に、孟州の官府より、諸方に文書を下して三千貫の賞錢をかけ、殊更緊しく在々所々に至る迄、下官ら多く來て、武松を尋ね搜すよし聞えければ、張青、武松に對して云けるは、我聊か事を怕れて申にはあらざれ共、我今都頭を留がたきこと出來りぬ。頃日孟州府の文書諸州諸縣に到て、村々、里々、千門萬戸一々嚴かに搜し緊しく都頭を求るとなり。若後日縣州の下官等此所に至つて都頭を搜し出すことあらば、縱ひ幾ばく後悔すとも何の益かあらん。我ら夫婦都頭を送て身を安んじ命を立しめんずる所あり。嚮にも已に都頭をすゝめ、送らんと欲せしか共、都頭肯て往き給はざりしが、今事危急に及しかば、都頭曲てかの地に往き給はんや。武松が云く、某も此兩日定て事發んと察し、何れの方になり共落行んとこそ計ぬれ共、普天の下身を容ん所なし。若長兄我を送て身命を安んぜしめ給ふ所あらば、宜しく急に送り給へ。我いかんぞ嫌ふことあらんや。張青が云く、我向にも語しごとく、青州府の支配地、二龍山寶珠寺に花和尙魯智深、青面獸楊志と共に山陣を守つて强盜の頭領をなし、今專ら家を打ち舍を劫うて猛威を遠近に振ひ、青州府の官軍等誰か彼兩人を怕れざらんや。都頭たゞ彼山陣に入り給ひなば、終久禍ひを免れ給ひて身命を安んずるに足ぬべし。若他所に赴きなば、久しうして後必ず誤ある べし。魯智深常に書簡を寄て、我を山陣に招けども我斯里を離るゝに忍ずして、未だ其招きに應せず。我今一通の書簡を修へて具しく都頭の武藝を吹噓し遣はさんに、かれ何ぞ都頭を留めざらんや。都頭もし彼所にて頭領をなし給はゞ、縱ひ官府より千軍萬馬を發して寄來る共、豈よく都頭を捕ふることを得んや。宜しく意を決して彼所に赴き給へ。武松が云、我久しく當世の淸からざるを恨みて、深山幽谷にも身を隱さんと欲すること旦暮頻りなりといへ共、未だ時至らずして今日に推移りぬ。幸ひ這次人を殺して、事已に發りければ、宜しく此便機に乘じて二龍山に登り、魯智深等と豪傑をなさば、浮世の樂み何事か是にしかん。長兄宜しく書簡を修

へ我を勸め遣し給へ、我今日の内に發足すべし。張青大に悅び、即時に一封の書札を修へて、武松が始終の來歷一々詳に相述べ、頓て武松にこれを附し、大に酒食を具へ、別れの酒宴を催しけり。此時母夜叉孫二娘張青に對して云けるは、丈夫いかんぞ這等の體にて叔々を送り給はんや。若叔々此體にて往き給はゞ、必定前面に於て活捉れ給ふべし。武松が云、嫂々の云給ふ所頗る曉しがたし。此體にて往ば、必定活捉れんとは如何ぞや。若所存あらば速に語り給へ。孫二娘が云、今官府より叔々の形を寫して所々に懸、乃ち三千貫の賞錢を出し、偏く村々里々に觸て叔々を搜さしむ。叔々の面には金印の刺尤明々たり。若前面に至り給ひなば、行く人必ず叔々を識認て捉ふべし。其時奚ぞよく抵賴給はんや。此ゆゑに殆ど難き處ありとは云しなり。張青これを聞き呵々と打笑ひて云、面上の金印には兩箇の膏藥を貼ば、人の眼目を誑くに足ん。何ぞ金印のみを怕れてかくのごとく言を莫大に說や。孫二娘これを聞て同じく打咲て云、丈夫の言は獨り自らのみ聰明として、天下の人は皆癡愚とするに似たり。豈よく這等の淺々しき計を以て眼明らかなる下官らを誑くに足らんや。我却て一ッの計あり、只怕らくは叔々これに從ひ給ふまじきことを。武松が云、我今一味に災を避、難を脫れんことをのみ欲ふ。如何ぞ敢て良計に背んや。願くは嫂々速に計を示し給へ。孫二娘大に笑て云、叔叔必ず我計を聞て怪しみ給ふことなかれ。偖計といふはいかんとなれば、二年以前に一人の頭陀、此處を過りて我店に立倚しゆゑ、彼蒙汗藥を用てこれを殺し、乃ち包袱蘊等を奪取て其肉は常のごとく肉包に做へぬ。其時彼頭陀が着せし一領の衣服一領の直裰德と云もの幷に一本の度牒、一連の珠數、一腰の戒刀あり。這刀いかなる名作なる故にや、又多く人を斬し故にや、毎夜三更の時に至りて自ら鳴嘯の響きあり。豈希有の寶刀にあらずや。叔々既に難を遁れんとならば、必ず髮を剪んで頭陀の形になり給ひ、宜しく行者の模樣に打扮て、髮を垂て以て面上の金印を遮り藏し給へ。尙且此度牒を携て一生の護身とし給へ、是則ち前世の因緣なり。ことにかの頭陀が年甲相貌、叔々と等しかりければ、其法名も又度牒の表を見給ひて、彼頭陀が法名を用ひ給へ。是尤も一生全き計ならずや。張青是を聞て忽ち掌を鼓て云けるは、我妻が計何の神妙か是に過ん。我却てこれを忘れたり。只知らず都頭肯て頭陀となり給ふべきや。武松が云、是何の嫌ふ所かあらん。唯恨くは我形出家の模樣に應ずまじ。張青が云、我まづ都頭の爲に粧ひを調へて試みん。我が妻早く直裰等を拿來れ。此時孫二娘房間の內より彼包袱蘊を取出し許多の衣裳を武松に與へて着せしめ、乃ち髮を剪みて金印の上に垂ければ、果して金印少しも見えざりけり。武松大いに喜んで、自ら直裰を把衣裳の上に着し、又珠數を把て頸にかけ、彼戒刀を直裰の下に帶し、粧ひ已に整りしかば、孫二娘再三讚美して云けるは、誠に有がたき僧形なり。是を以て前世の因緣を知り給へ。此時武松自ら鏡を照して己が形を見、忽ち絕倒して扨々誠に好き一箇の行者かなと云ければ、張青も同じく呵々と打笑て云けるは、僧形旁善智識かなと讚嘆しけり。武松は事已に危急なるを見て、はや發足すべしと告しかば、張青夫婦も然りと同じ、

乃ち酒宴を設けて武松を欵待し、又餞として一錠の銀を武松に送り、盃已に收りければ、武松已に其日旅裝ひを調へて、包袱纒を背に負、已に張青夫婦に辭して別れを告し處に、孫二娘彼度牒を取り出して武松に與へ、互に依々戀々として暗に涙を含みけり。張青又再三武松に示して云けるは、賢弟道中に出給ひなば、自ら心を用ひ意を留て謹慎給へ。必ず大酒に及んで大事を誤給ふことなかれ。殊に出家の行跡は、慈悲を本として柔和忍辱なるべきものなれば、縱ひ何等の忿るべきことありとも能是を忍び、假にも人と爭ひをなし給ふことなかれ。已に二龍山に至り給ひなば、必ず早々書簡を寄て消息を通じ給へ。我卽ち今此處に在つて營をなすといへども、是また長久の計にあらず。頓て家業を止て、我等夫婦も共に二龍山に上り、再び都頭と臂を交へて樂まん間、宜しく魯智深、楊志に言を傳へ給へ。武松是を聞て云けるは、我自ら肯て行跡を謹慎べし。長兄必ずこれを憂へ給ふことなかれ。且早々家業を止て速に二龍山に上り給へ。我專ら長兄嫂々の來臨を俟べしとて、遂に別れて門外に馳出ければ、張青夫婦も共に走り出て遙に送りけり。扨武行者は張青夫婦に辭して、大樹十字坡を離れ、直ちに二龍山を望んで進發す。此時十月の天氣にて日甚だ短く、只一瞬間に晩に向とす。武行者已に五十里ばかり住きし處に、はや紅日沈んで月色漸々明かなり。武行者前面を見るに、一ツの高嶺ありしかば、乃ち月の明かなるに乘じて馳上り、已に嶺上に至て四方を顧るに、誠に嶮しき高嶺なり。武行者遂に麓を望んで下り往く處に、林の内に忽ち人の笑ふ聲ありければ、武行者是を聞て想道、恠や此のごとき蕩々たる高嶺に何者有てかく笑を催すや、必定蹺蹊あらんとて、已に林の邊に至て此處を伺ひみるに、原此林一ツの墓に添て一宇の草庵あり。庵の窓より兩人の男女露れしかば、武行者何者なるやと近く前んでこれを見るに、一人の先生一人の女を携て月を賞し戲を弄して咲ひけり。武行者是を見て、心中甚だ忿りを發し、此庵はもと清淨潔白の地なるべきに、彼輩何ぞかくの如く穢をなすや。我先彼等を殺して慰まんとて、則ち彼戒刀を引拔手に持、自ら月光の下に透し、戒刀を見て云けるは、汝我が手に來り未だ快きことに遇ず。我今試に彼賊先生を斬害汝を祭るべしとて、再び先鞘の内に納め、彼直裰の袖を把て高く卷上、直に庵の前に至り門を敲きければ、彼の先生此響きを聞いて忙しく窓の戸を關して躲れけり。武行者又一ツの石を拾ひ取て、頻りに門を敲きしかば、内より一人の道童走り出て門を開き、則ち武行者を罵ていはく、汝何奴なればいかんぞ半夜三更に門を敲て我が庵を鬧しむるや。武行者眼を睜開き、大いに怒り吼つて云けるは、汝賊道童敢て我を欺くや、我先汝を斬て刀を祭らんと、遂に戒刀を揮て道童が頸を刎ければ、只一聲呵と喊ぶにも及ず頭は前に落體は傍に倒れけり。彼先生内より是を見て、則ち武行者を大に罵り呼はつて云けるは、汝賊徒いかんぞ我道童を殺したるやとて、遂に利劍を轉し武行者に斬つてかゝりしかば、武行者これを見て大いに打わらひ、とても汝を饒すまじきに、汝劍を轉して來るは、自ら死を急ぐならんと戒刀を揮て相迎へ、互に猛威を勵し刀を交へ、戰すでに十餘合に及びし處に、武行者詐

て五六歩許退きしかば、彼先生勢ひに乗じて斬入しに、武行者閃りと避け、頓て戒刀を擧、忽ち先生が首を刎たりける。此先生何等の人ぞや、次の卷にて知べし。

此卷に云賞錢とは屬託也。よむには音便にてそつたくとよむべし。たとへば放火人を捉へ來らば褒美として幾ばくの銀を取すべしと許多の人民に廣く知しめん爲、市中人足繁き所に、札を建置など則ち是也。褒美に遣す銀にて三千貫文の錢を與へんとなれば、賞錢の文字をそくたくと讀せたる此類、義訓と云もの也。道童とは道士の使童なり。或人論じて云、此書貳編目に宋江閻婆惜との事に、閻老婆唐牛兒の諍論有。此編潘金蓮、西門慶との事に、王婆鄆哥の諍論あり。事異なれ共趣向は一ッなり。作者別に工夫もなかりしにや。又武松が傳を論じて、兄武大郎が仇を復するは、武松が身に係ては尤も重きことなれ共、兄の喪に遇て官府を憚ず知縣の前に進み、兄の死骨を懐にし廳前に出證見なりとて知縣に見せ、或は奸夫淫婦を斬其首を刎髪を結合せ提げ來て、堦下に置、公を穢すを憚ず、孟州へ流罪の終道、十字坡にて張青が家に逗留し、兄弟の約を結ぶ等保養鬱散の旅のごとし。此時張青が談話に、我々夫婦の營み旅人を欺き殺し衣類を剝取り、殺せし人肉を牛肉と僞肉包を製し賣物とす。店に入來れ共殺さゞるもの三ッ有。僧侶を殺さず、娼妓の類を殺さず、流人を殺さずと、而して武松多く人を殺し張青が宅にて行者の模樣に姿を變、寶珠寺へ落行に臨て孫二娘が詞に、二年以前一人の頭陀店に入來たる故、濠汗藥の酒を用ひて殺し、其肉は饅頭に做へ衣類と携へ來し品は取置し、其直綴、度牒、珠數、戒刀の類を武松に與へ旅粧をなすとありては、僧を殺さずとの言は出傍題の虚言と聞ゆ。又小事をあぐれば張都監が八月十五夜月の宴をなし、武松を捉へん計に発を正中に置、暗き故武松跌き倒れたるを、大勢にて取押へ綁るとあれ共、此比の月は曉迄は傾かず、物に躓く程の闇夜にあらず、又比類無豪傑にて、用捨する殺威棒を好で策れんことを望む程にて、此時無實の罪に陷、自ら覺無科を引請白狀して棒を赦されんと乞ふも、豪傑の魂ならず、又睡て生捉らるゝ共。幾ばくの人をも踢殺す計り足のはたらく剛力にて、凡々の四人に牽れ、張青が宅に至るもをめ〳〵と云甲斐無。此張青が家には一度來て逗留し、人を宰所迄も見置きたるに、何國へ引來られたるか辨ざる體も不審。又行者と姿を變ては別て萬端を謹慎、柔和忍辱第一なる旨張青も諫め、其身も納得し立別たる間もなく、蜈蚣嶺にて先生と道童を斬。是過の高名にて殺して功有るにもせよ、其身に干らぬ事成ば、世を忍び落行頭陀慰に人を斬とは、張青が深切を無にするも、是又英雄豪傑の志に有ずと。愚辨して云、水滸傳の書は支那俗間の稗史なれば、理論を容に足ず。奇談に文華を加へ、畫に虚事あるは和漢一ッ也。譬ば今日本の兒女の弄ぶ草紙、俗間に讀繪入のよみ本などを見て、其事の虚實を議論し、旨趣を辨鑿する者は未だあらず。二編目の首卷緒言に演るごとく、狂言綺語は穿に暨べからず。

三編卷之九

武行者醉て孔亮を打つ

武行者は道童と先生を斬り、庵の門に立ち大音に呼はりけるは、庵の內に隱れ在る女早く出來れ。我誓て女は殺さじ。只汝に彼先生が來歷を問はん。彼女是を聞て忙しく走り出、卽ち地上に倒れて拜伏す。武行者これを見て、汝宜しく拜を休よ。我先汝に問はん。こゝは如何なる所にて、又彼先生は汝が爲には何者ぞや。汝實にこれを告よ。彼女涙を流して云けるは、奴はこれ這嶺の下に居住する張太公と云者が娘なり。此庵は奴が先祖の墓を安置したる庵なり。彼先生はもと何國の者かは知らねども、向に我が家に來て一宿し、その夜我が父母に對して善陰陽を習ひ、能風水を識りたりと語りけるゆゑ、我が父母不幸にして、彼れに墓地の風水を觀せしめ、吉凶を占はせんと欲し、數日家に留めて此墓の風水を觀せ、又數日留めける處に、彼一日奴を見て、再三戀慕ひ、二三ヶ月奴が家に逗留して回らざりしゆゑ、父母是を怒りしかば、彼却て大に恚り、遂に父母と哥々嫂等こと〴〵く殺し、奴を引て此庵に居住せり。我決して彼が心に從ふまじく思ひしかども、若彼竟に憤りて奴を殺さば、父母の仇を報ずる者あるまじきを悲しみ、先曲て彼に從ひぬ。若其便機を得なばいかん共して仇を報じ恨を雪がんとのみ圖りき。彼道童も原他所より掠め來りし者なり。此嶺は乃ち蜈蚣嶺と申、彼先生此嶺のかくのごとく、風水好を見て己が號をも自ら稱して、飛天蜈蚣王道人と申しぬ。武行者又問うて云、汝なほ親類有て常にかの先生を害し、仇を報せんと圖る者ありや。彼女答へていはく、我が親類村中に猶數家有りといへ共、都て賤き農夫なれば、第一には彼先生が勢ひを犯して爭ふこと能はず、第二には遠く州裡に馳て官府に訴ふこと能はず、衆皆徒らに臍を嚙のみなり。武行者が云、彼先生庵中に金銀の貯ありや。女が云、彼向に我家の財寶を奪ひ取て、今已に一二百の黃金あり。武行者が云、金子あらば汝早く取拾めよ。我今火を放て此庵を燒拂ふべし。彼女がいはく、和尙は酒肉をも食し給ふや。武行者云、若酒肉あらば速かに我に與へよ。我是を食せん。彼女がいはく、已にかくのごとくんば宜しく庵中に入り給へ。武行者がいはく、庵中に猶人あつて暗に我を害せんと圖るにはあらずや。彼女がいはく、和尙已にかの先生がごとき萬夫不當の勇士だにも殺し給ひぬる豪傑なれば、假令庵中に千萬の人伏し置くとも、何ぞ怕れ給はん。庵中には只一個の人もなく、必ず疑ひなく入たまへとて導きければ、武行者則ち彼女に從て庵中に入りし處に、彼女頓て酒食を具て慇懃に欵待ぬ。武行者大盞を乞取て飽飲し、酒已に盡ければ、武行者已に火を放て庵を燒拂ふ。此時女一包の金子を武行者に献じて謝しければ、武行者辭していはく、我汝が金を受くる者にあらず。汝無用の心を費やさんより、汝が懷中に納めて私の私用に備へよ。且速かに此を立去れ。彼女大きによろこんで拜謝し、遂に自ら

嶺を下て回りけり。武行者は彼兩人が屍首を火中に投じて是を燒棄て、其夜月の明かなるに乘じ、嶺を下て直ちに青州を志して進み約莫路を往こと十餘日、若干の州群村郷を過りけるに、都て武行者が形を寫して、賞錢とともに路口に掛けあり。專ら緊しく尋ね覓むるといへども、武行者今の體髮を剪て姿を變ければ、敢て一人も咎むる者なく、時はや十一月の空に移り寒氣烈しく勝がたかりしかば、武行者路すがら多く酒肉を求めて食しけれ共、更に寒を防ぐに足らざりけり。此日武行者一ツの岡を上つて、前向を望みけるに、大なる高山あつて直ちに九霄に聳え、十分に險阻なり。武行者已に岡を下つて纔に三五里許り馳ける處に、一軒の酒店あり。門前にはひとつの溪あり。屋のうしろは都て顛石亂山雲を接へて崢嶸。武行者遥ちに酒店に入り呼はりけるは、主先我に二升の酒を賣與へよ。若し肉あらば添來れ。主答て、酒はあれ共都て白酒なり。肉は賣盡しさらにこれなし。武行者がいはく、白酒は却て味ひ美ならんに、早く盪して拿來れ。主此時先二升の酒を舀でこれを盪め、乃ち大碗に釃で武行者に與へ、又一碟の熟菜を具へて肴とす。武行者時を移さず二升の酒を酌乾、再び又二升の酒を求めければ、重ねて二升の酒を大碗に斟で出だしける處に、武行者只願これを飲ぬ。又向に岡を過りし時、もはや五六分の酒を吃しけるに、今又四升の酒を飲且寒風に吹れしかば、醉大に發し、再三呼つて云けるは、主實に肴を賣盡したるならば、只好汝らが自家に用ひん肉を少しく我に分ち與へよ。我重く價を償ふべし。主打笑つて、我いまだ嘗てかゝる出家を見ず。いかんぞ酒肉をのみ一向用ひんと欲ふや。若し又自家に用る肉あらば、老早出して和尚に與ふべけれ共、只恨むらくは半點もこれなし。和尚再三物好みし給はんより、速やかに盃を收め飲遏給へ。武行者が云、我價を償はずして汝が酒食を求むるにあらず。汝何ぞかくのごときことをいふや。汝が肉なきと云も又信じがたし。宜しく肉を以て我に賣れとて、正に言を爭うて居ける處に、門外より一人の大漢子三四箇の人を引て、店内に馳入しかば、武行者暗に此人をみるに、頭には紅巾を戴き身には皂衣を着し、面丸く耳大く脣濶く口方なり。身の長は七尺餘高にして年の比二十四五歳と見え、相貌堂々として威風凛々たり。此人已に店の内に入りければ、主滿面に笑を含んで相迎ふ。彼大漢子が云、我方々を奔走して甚だ疲れたるに、最前の酒と肴をはやく拿來れ。われ快く一盃を酌んとて、遂に武行者と席を對して座しければ、彼隨がひ來りたる三四個の人は、すべて傍に列座せり。此の時主一樽の美酒を携さへ出てこれを舀ければ、馥々酒の香忽ち風に從、武行者が鼻を襲うて過りけり。武行者此香を聞ぎて大いに美み、心中に且づ六七分主を怨みけるに、主又四ッの大盤に鷄と肉とを入て拿來り、乃ち彼大漢子が前にこれを置き、彼舀出したる酒を盪て來らんとて、已に厨の邊に入りければ、武行者は己が前の一壺の白酒と一盤の熟菜とのみにして、淡薄不興なるを見て大いに怒り、遂に拳を揑て器を盡く打碎き、恰も奔雷のごとく大音聲に吼て云けるは、汝何ぞ客を欺むくこと直ちに此のごときや。我原來酒錢を與へずして、空しゝ汝が酒を飲むにあらず。汝小人我を何等の者と思ふぞや。主此を見て忙しく走り出て

云、和尚何ゆゑ斯忿り給ふや。只宜く靜り給へ。若し酒を求め給はんとのことならば、怒を息てこれを命じ給へ。武行者聞もあへず怒る眼を睜開て大いに罵しつて云、汝小人いかんぞかく虛言をなすや。汝さきには已に白酒のみ有て肴なきと云けるに、今又美酒佳肴を以て彼客に賣與へて、我に售らざるはいかん。我も同じく汝に價を償ふなり。汝客を擇んで諂ふこと、何ぞ一列ならざるや。主が云、和尚誤つて我を恨み給ふな。彼酒と肴とは原我が家にある所にあらず。是乃ちかの大郎自ら携さへ給ひし酒肴にて、只我が店を借りて酒を酌給ふのみ。我肯て客を擇て賈をなさんや。必ずこれを怒り給ふことなかれ。武行者は心中に只顧彼酒肴を慕ひければ、主がいふことを耳にも聞入れず、益々大いに怒き、汝焉ぞよくかゝる套語を以て我を欺くことを得んや。早く美酒佳肴を我前にも携へ來れ。主がいはく、我曾て汝のごとき出家を見ず。汝何ゆゑ再三非道をいふや。武行者が云、汝老爺在家の人敬て云こと に向て非道と云は是何の無禮ぞや。主が云、汝は先出家の形とみえけるに、いかんぞ在家の詞を用ひ自ら老爺と稱するや。老爺は出家の稱する言にあらず。汝は是實に出家にもあらず、在家にもあらず、不三不四の徒なり。武行者此言を聞て大に怒り、忽ち拳を揑て主が面をいたく打ければ、主勇力に打れて眼を眩し、直に彼武行者が對面に座したる大漢子が肩に礙り倒れける處に、其疼み甚だしく起ること叶はず。大漢子此光景を看て大いに怒り、忙はしく躍り起ち、武行者を罵て云、汝賊頭陀何ぞ甚だ無禮をなし、且妄りに手足を擧て主を打しぞ。豈是を出家といふべきや。汝必ず俗心を起すことなかれ。武行者冷笑つて云、我主を打たんに、何の事か汝に干からん。那大漢子益〳〵怒て云、我好意を以て汝を諫るに汝却つて欺くはいかん。必ずしも我恚りを惹出して後悔することなかれ。武行者これを聞て、虎の怒をなし、忽ち走り出て大いに呼はつて云けるは、汝は何奴なれば閑事に干つて自ら禍ひを招くや。彼大漢子大に咲て云、汝賊頭陀我と拳を交へんと欲ふや。汝若し力量あらば我肯て汝が對手にならんとて、已に門外に出ければ、武行者も相續いて門より外に走り出、我豈汝を怕れんやと、拳をあげ打てかゝる。彼大漢子武行者が猛勢を見て、卒爾に相迎はず、乃ち拳を硬めて十歩計引退き、其便機を窺て控へける處に、武行者電のごとく跳入り、遂に右の手を伸して、彼大漢子が肩骨を碎くる計に揑りければ、彼大漢子力を用ひて武行者を踢倒さんとせしか共、いかんぞよく武行者が勇力に敵することを得んや。漸々力衰ろへて働らくこと能はざりければ、武行者頓て、彼男を扯よせ、只一投に地上に投着けるに、恰も孩子に戲るゝがごとくなり。彼隨がひ來りし三四個の人、都て此體を見て大に恐れ、敢て一人も助けんとする者なかりけり。武行者彼大漢子を踏付て、鐵石のごとき拳を擧、約莫二三十拳一連に打丁り、遂に酒店の前の溪の内に投入しかば、彼三箇の人これを見て大いに驚き、各急に溪の内に馳入、かの大漢子を扶け上げ、直に南を望んで回りけり。酒店の主は此の時少しく人心地つき、這體を見ていよ〳〵肝を消し、忙はしく後堂に匍匐行て躲れ居けり。武行者獨り、自ら哈々と大いに咲ひ、再び酒店に入て彼酒肴を擅に賞翫し、暫くの間に盡

くこれを吃し畢り、彼店を跳出溪に沿て走り行、北風に吹れ、忽ち醉ます〳〵大に發しけり。既にして四五里計り馳ける處に、傍の墻の内より一疋の黄犬走り出、只願武行者が後へに纏ひ來りて吠しかば、武行者大いに怒り、暗に彼の戒刀を拔て只一砍にと追駈しに、彼犬溪邊を繞て尚頻りに吠ける處に、武行者遂に追着て唯一刀にと躍り起て斬ぬるに、彼犬これを見て急に傍に跳去ければ、武行者早くも空を砍、其力を用ひしこと甚はだ猛き故にや、覺えず石に跌いて溪の内に眞倒に落入けり。此時冬の天氣にて、溪水已に涸、僅か一二尺の水にはみたざりしかども、水中殊更冷にして武行者忽ち渾身こゞえ、急に上ること能はず、又良久しく水面に身を浸し、漸々岸に手をかけ扒上りし處に、彼戒刀を水底に落しければ、武行者忙はしく頭を低て水底を望み、彼戒刀をすゝひ取らんとしけれ共、一は則ち酒にゑひ二は則ち水にこゞえ、全身すべて痳れたるが如し。よつて足のふみども堅からず、再び身を飜して倒に落入りけり。然る處に傍のへいの邊より一夥の人はせきたり、當先に一人の大漢子進みけるが、其裝束極めて嚴かにして、手には一條の棒を拿ぬ。其ほかのをとこ共は、みなげ人とみえて盡く左右に從がひ、各手には棒を提げて、たゞちにたにべに至り、其内一人の僕たにを指ざして云けるは、彼賊行者こそ、さかやにて不禮をなせしものなれ。扨今此處に馳來りぬる此大をとこは、先に武行者にうたれたる大をとこが兄なり。先に打れたる彼大をとこはべつに人じゆを催し、直に酒店に馳て、武行者を尋ねけれ共、はや武行者駈出たると聞き、忙はしく後を慕うて追かけ、同じく此處に至りて尋ねめぐり、忽まち舍兄に遇ければ、舍兄が云、向に汝を打たる行者は、溪の内に在る頭陀ならんとて、乃ち指ざしゝてみせければ、彼打れたる漢子これを見て云けるは、かのづだこそわが仇人なり。速かにこれを捕ふべしとて、諸の人數を一所に集めて、溪邊に馳行し處に、舍兄の大漢子が云、先彼を私宅に引回りて、痛く策たんに、汝ら早く手を下して活捉にせよと下知しければ、三四十人の漢子共、一齊に吐と溪の内に跳入て、武行者を捉へけるに、武行者は酒にゑひたるのみならず、溪水に身を浸して凍えしかば、少しも動き働らくこと能はず、遂に擒となりにけり、諸の漢子共武行者を捉捕、横に拖倒に拽て岸の上に登り、尚中央に取圍んで一間の大家ある所に引回りぬ。武行者は前後不覺の體なりしかども、微し醉眼を開いて此處をみるに、家の左右は都て高墻粉壁あり。周廻は盡く垂柳喬松相交り、密々に茂りぬ。諸の漢子共遂に武行者を拖立内に入り、頓て衣裳を剝て戒刀を奪ひ、已に高手小手に綁て大柳樹のもとに捆り着け、藤の鞭を以て、四五十鞭打ぬる所に内より一人の漢子走り出て問けるは、汝兄弟何者を捕へて斯策や。兄弟兩人これを聞忙はしく慇懃に答へて云けるは、長兄敬ふべ、これを聞給へ。今日弟、三四人の家僕を從へ、乃ち前面の酒店に在りて酒を酌んとせし處に、這賊行者酒に醉て事を鬧し、弟を散々に打、剩へ溪の内に投入て大に身體を傷はしめぬ。よつて兄弟人數を催し尋ね行し處に、這賊行者自ら溪の内に陷り、寒水に凍えて在りけるを、遂に捉へて扯回りぬ。這賊をよくみるに、必定眞の出家にあらず。已に面上にも金印の

刺あり。この故に頭陀となり、髪を垂て此金印を遮り藏すと覺えたり。此賊定めて罪を避逃れ出たる囚徒にてあるべし。宜しく今拷問して其來歴を聞屆、速に官府に訴へ申べし。舍弟の大漢子が云、這賊我が身體を打ち破つて、斯苦しみを受しむること恨尤大いなり。若しこれを官府に送て、人の手に殺させては、我が恨いかんぞ全く雪ぐことあらん。只此處にて三百鞭を與へて終に打殺し、一把の火を用て屍を燒捨なば、我方に能此恨を絶すべしと、未だ云も罷らずして又鞭搶取て、已に打たんとせし處に、又彼内より出たる漢子が云けるは、汝先づ打つことを休よ。我試に彼を一見せんとて、近々と向ひ前みけるに、武行者も酒の醉漸々醒て心中に此ことを曉り、只眼を閉少しも怕るゝけしきなかりけり。彼漢子已に武行者が前に至て、先肩の上の棒瘡を見て云けるは、此棒瘡は頃日打たれたる痕なりとて、又手を以て武行者が髪を揭げ暫く面を見て、忽ち大に驚きて云けるは、這はこれ我が義弟にてはあらずや。武行者此言を聞て眼を開き、同じく彼漢子を看て云けるは、斯宣ふは誠に我が義兄にてましますよな。彼漢子又忙がはしく兄弟の者に向つて云けるは、這行者は我が義弟なるに、疾く我が爲にこれを助けんや。兄弟の者大いに驚きて云、這行者いかんぞ却つて長兄の義弟なるぞ。那漢子が云、我常に汝等に語りぬる、彼景陽岡にて虎を殺せし武松と云は、則ち此行者がことなり。只しらず、いかなるゆゑにて斯髪を剪み頭陀の形とはなりけるぞや。兄弟の者これを聞て、慌て忙き絆を解かせ、衣服を着さしめ、乃ち延て草堂の内に入りければ、武行者急に彼の漢子を拜せんとせし處に、彼漢子これを扶け起して云ひけるは、賢弟敬ふこと定て酒の醉いまだ醒まじきに、先宜しく安坐して談話せよ。何ぞ必しも拜をなすに及ばんや。武行者益大に悅び、座已に定まりければ、酒の醉も今はやや全く醒にけり。扨彼武行者を助けたる男は別人にあらず、乃はち是鄆城縣の人及時雨宋公明なり。武行者先づ問て云、長兄は向に柴大官人の館に居給ひけるが、何ゆゑ又此處には至り給ひしぞ。疑らくば是夢中の參會にてはあらざるや。宋公明が云、我汝と柴大官人が館にて別れて以後、柴進が家に半年計り住しける處に、家内の老父がこと且暮心に懸り、乃ち弟宋清を、再び故郷に回して老父を問はしめ、其後鄆城縣の消息を聞けるに、官府のことは、彼朱同雷横兩都頭が働らきによつて宜しく相濟、所々方々に文書を下して我を捉へんとせしことも、遂に漸々怠たりしとなり。このゆゑに我今頗る心を安んせり。扨此家の主孔太公時々鄆城縣に人を馳、我ことを問給ひし故、宋清が回つて後、我は柴進が館に住せしと申せし故早速滄州へ人を馳、我を迎へ給ひぬ。此處は是白虎山と云處にて、此館は則ち孔太公の館なり。向に汝と爭ひ鬪ひたる人は、孔太公の二男なり。彼人常に短氣なるに依て、動不動人と爭ひを惹出すこと多し。乃ち其名を獨火星孔亮と號す。又彼一人の大漢子は孔太公の嫡男毛頭星孔明と云人なり。此兄弟鎗棒を好んで學ぶゆゑ、我略是を指南せり。我此處に在ること已に半年餘りなり。我今又急に清風寨に赴かんと欲す。我柴進が館に在りし時諸人の傳へ云けるを聞けるに、汝向に景陽岡の上にて猛虎を殺し、乃ち陽谷縣に留りて都頭の職をなせしと、其後又人の風説に西

門慶とやらんを殺し、入牢せしと專ら沙汰有りけるが、しらず何れの處に流されしぞや。又いかなる故にて、斯頭陀の形に姿を變へ、今此處には來りしぞ。武行者答て、某嚮に柴大官人の館にて長兄に別れてより後、直ちに景陽岡の上に至りて、大虎を殺しければ、村中の者擧て是を悅び、某を吹噓して陽谷縣に送りぬる處に、知縣某を擧て都頭の職を授けぬ。其後阿嫂西門慶と私情を通じ、兄武大郎を毒殺せしゆゑ、某此兩人の男女を殺し、兄の仇を報じ知縣に斯と訴ければ、本府に送て決斷を求めし處に、陳府尹殊に某を憐み死罪を免し流罪に決斷し、二十杖策つて孟州に流され、某已に孟州の路十字坡と云處にて、張青孫二娘と云夫婦の者に遇て、八拜の交りをなし、兄弟の義を結び、其後孟州に至て老管營が男施恩と云者と、また兄弟の約を誓ひ、其比施恩が仇人蔣門神と云者ありけるを、某施恩が爲にこれを打倒し處を追拂ひければ、蔣門神此恨を雪がんと欲して、張團練、張都監等を賴んで某を害せんと圖りけるゆゑ、某竟に張都監が樓上に忍び入り、此三人の者を斬殺し、猶又張都監が一家中の男女盡く斬盡し、再び難を避て張青が家に入り、商議しける處に、其妻孫二娘が計に依て、かくのごとく行者となつて人目を誑き、直ちに此處に至りぬ。又蜈蚣嶺と云處にて、王道人と云者を戒刀の試にこれを殺しぬとて、始終の事詳に語りし處に、孔明孔亮これを聞て大に駭き、忽ち身を飜へして拜をなしければ、武松忙はしく禮を還して云、先には甚だ不禮をなしぬ、願はくはこれを宥し給へ。孔明孔亮が云、我ら兄弟眼有りといへども、眞の英雄を識らずして威風を冒しぬ、望らくは罪を免し給へ。武行者が云、足下兄弟既に斯く我を憐れみ給ふならば、彼度牒戒刀並に衣裳等これを失なひ給ふことなかれ。孔明が云、豪傑必ずこれを憂へ給ふまじ。我自ら都て收拾めければ、只一色も失なふことあるまじ。武行者これを聞いて深く感謝す。此時宋江頓て孔太公を請て、同じく對面なさしめ、互に禮畢て座已に定まりしかば、孔太公家人に命じ酒宴を儲けしめ、豐に武行者を欵待けり。其夜は宋江武行者と一所に歇み、一年餘りの別離の愁を語りて、共に寸心を慰めけり。

錦毛虎義をもつて宋江を釋す

翌日武行者は宋江と同く起て共に中堂に至り、孔明兄弟と座を連ね食を吃し、閑談良久しくして、はや近午の天に至りしかば、孔太公又羊を殺し猪を宰しめ、大いに酒宴を設け飲酌を催しけり。是日村中の親戚等悉く來て豪傑の交りを賀しければ、宋江此光景を見て、心中斜ならず悅びぬ。既にして酒宴罷りければ、宋江武行者に問うて云く、汝は今何れの處に行て身命を安んせんと欲ふや。武行者が云く、昨日已に長兄に語りぬる彼菜園子張青一封の書簡を修へ、乃ち某を薦て、青州の二龍山寶珠寺魯智深が山陣に送り申す。張青も又家業を止めて後より二龍山に來るべしと約しぬ。宋江が云く、汝若し二龍山に往ば、尤も身命を立るに足るべけれ共、願はくは我が行く處に來らんや。前日故郷より書簡を寄せて云けるは、青風寨の知寨小李廣花榮は我が閣婆惜を殺したることを聞いて、毎度書簡を寄せ再三再四我を請て、寨裡に住せしめんと欲する間、宜しく先づ花榮が請に應じて、彼が懇意をも

謝し申せと、老父の方より備細に申し越ぬ。殊更清風寨は此處より遠からざれば、頃日既に發足せんと思ひつれども、只天色陰て雨あるべき模樣なるゆゑ、未だ發程せざりしが、必定近日の内孔太公父子を辭し、清風寨に赴べき間、汝も先づ我に隨て同往せんや。武行者が云く、長兄若し肯て某を清風寨に携へ往き給はゞ、某が爲には莫大の福なり。然れ共爰に一つの事有て、尊命に從ひがたし。昨日も語りぬるごとく、某此たび犯したる罪は正に九族を亡さるゝに當れり。もし長兄に從ひ彼所に赴き萬一事漏て官司に活捉るゝことあらば、災必ず花榮長兄に及ぶべし。長兄は某と同死同生の約を誓ひ給ひしことなれば、假令某が爲め災を蒙り給ふ共、十分恨み給ふことも有まじけれ共、花榮は又格別の交りなければ、若し彼に禍を蒙らしむることあらば、某何を以てかこれに當らん。此ゆゑに、此度は只宜しく意を決して二龍山に上り、彼に隱れて禍を避け難を脱るべし。若し天憐を垂給ひて朝廷の御赦免をも蒙むらば、再び長兄を訪うて會合致すべし。願はくは長兄明らかに是を察し給へ。宋江此言を聞て云ひけるは、汝若し果してかくの如く、朝廷に歸順するの心あらば、天必ず汝を祐けたまふべし。此の上は我苦りに汝を諫めて、同往せんこと大に不可なり。若し互に上の御免を蒙むりて身命恙なくんば再會の期何ぞなからんや。然れ共汝なほ幾日此處に滯留して、我と倶に發足せよとて、兩人孔太公が館に二十餘日逗留し、宋江はや發足すべしとて、武行者と共に孔太公父子に別れを辭しけれ共、父子再三頻りに留めて、又四五日延引せしが、宋江決して發足すべしと、再四告て已に旅粧をも調へしかば、孔太公父子苦りに留むること能ず、遂に酒宴を設て、其日晩れに至る迄、觴を飛せて別れを惜み、互に依々として深く心中に感歎しぬ。翌日孔太公父子一套の衣服並びに一重の直裰を武行者に送り、又彼武行者が包袱蘊及び度牒戒刀のものを還し、旅裝を調へしめ、又五十兩の銀を宋江に送り、餞の儀を表しければ、宋江堅く辭し、これを受ざりしかども、孔太公父子再三進めて、自ら宋江が包袱の内に入れしかば、宋江辭すること能はず、遂にこれを收納けり。已にして宋江武行者は、旅粧ひはや調りしかば、兩人同じく孔太公父子を辭し、門外に出でける處に、孔明、孔亮深く別れを惜み、直ちに二十里餘り送りて遂に一別に及びぬ。夫より宋江武行者と共に路を急ぎ、其日は七十里を馳て旅宿に歇み、翌日又早天に打ち立ち方に五十里計り行きて瑞龍鎮と云ふ所に至りけるに、此の處に三筋の路ありしかば、宋江先づ鄉人に問て云く、二龍山と清風寨には何れの路を行くぞや。鄉人答へて曰、二龍山と清風寨には兩路に分れ行くなり。先づ二龍山へは西の路を望で行き給へ。又清風寨には東の路を望んで行き給へ。宋江是を聞て乃ち武行者に對して云ひけるは、賢弟我汝と今日別るべきに、宜しく此處に於て三盃を酌んとて、頓て酒店に入りて盃を擧互に相勸め、酒已に數遍巡りし處に、武行者が云く、某長兄を送つて、幾ばく道を行かば可ならんや。宋江が云く、何ぞ送るにや及ばん。古への語にも君を送ること千里、終に須く一別すべしと云ふことあり。汝只願二龍山を望んで進發し、萬里の路ことなく早々到着して魯智深等と共に難を避け災を脱れ、自ら

身を全くせんこと専要なり。向後必ず酒癖を改めて只よく朝廷より御赦免あらんを待請よ。汝又魯智深楊志等をも宜しく諫めて朝廷に降らすべし。然らば必ず爵祿を受て妻子を安穩ならしめ、尙清名を普天の下に振うて、譽を末代に遺すことあらん。我斯不肖たりといへ共、素より忠心を懷くこと切なり。然れ共未だ寸歩も進むこと能ずして、かくのごとく狼狽あり。汝は原來萬夫不當の豪傑なれば、決然大官をなすことあらん。汝よく我此の一言を聞いて心に銘じ、他日の參會を圖るべし。武行者此の言を聞て大いに感激し、遂に兩人は酒店を出て路口に至り、武行者覺えず涙を洒ぎ、只戀々と別れに忍びず、一向歎息に逼りけり。宋江が云く、汝唯宜しく我言を忘れずして酒癖を改め、自ら謹で災を免れよ。武行者が云く、長兄もし清風寨に赴き給ひなば、必ず重く尊體を保養し給へ。某肯て長兄の訓を守り申さんとて、遂に別れて二龍山へぞ馳行けり。扨宋江は武行者に別れ、直に清風寨を望んで東の路より進發し、已に數日馳ける處に、はや前面に一つの高山あり。則ち是を清風山と號す。宋江此山をみるに勢ひ嶮く樹木稠密にして其風景凡ならざりしかば、宋江心中にこれを悅び、再三再四顧み行きけるに、覺えず紅日西に落ちて、天色すでに晚しかば、宋江心中大に駭き、急に旅宿歇家を求んと欲して此彼を看繞りけれども、只一軒の破敗屋もなかりけり。宋江闇に想ひけるは、若し夏の天氣ならば、林の内になりとも歇むべけれ共、今は是れ仲冬の天氣なれば、風霜甚だ寒し。いかんぞよく野宿をなさんや。若又虎豹等の獸出ることあらば、遂に一命を害せらるべし。しかじ猶前面に馳て人家を求んにはとて、東の小路を過り足に信せて奔走し、約莫一時ばかり馳て心彌慌、更に路をも見分たず一味に走りける處に、忽ち地上に索あるを躍で跌き倒れければ、銅鈴齊しく響いて、左右より十四五人の小賊ども叫き喊んで走り出で、頓て宋江を押へ高手小手に綁め、早速火把に火を着、直ちに山を望んで上りしかば、宋江大いに膽を消只呆れたる計なり。小賊ども遂に宋江を引て山陣に至りし處に、宋江火光の下に在つて四下をみるに、都て皆木柵を用ひて陣を堅固に備へ、其中央には一つの草廳あつて、廳の上には三つの椅子を設けり。後の方には百十餘間の草屋を建列ね、各内には火の光り明らかなり。小賊らやがて宋江を柱に捆着、已に大王に報すべしと議しける處に、内より一人の小賊出て云ひけるは、大王は今酒に醉て休み給ひぬれば、先宜しく醉の醒給ふを待ちてこれを報すべしとて、衆皆宋江が左右に座を列ねて、ともに緊しく守りけり。宋江暗に想ひけるは、我只一人の淫婦を殺し、いかんぞ此の如き苦みを被るや。我が一命此處に於て殺されんこそ、運の拙き所なれとて、自ら眼を閉て只顧嘆じけるに、はや三更の左側に至りけり。かゝる所に四五人の小賊走り出て呼はり云ひけるは、大王少刻廳上に出で給はんと命じ給ふぞ、速に用意せよとて、俄に椅子の上に虎の皮の褥を布、廳の四方に許多の燈燭を點し、其光り恰も白晝のごとくなり。宋江微し眼を開いて、いかなる大王なるにやと暫く窺ひ見る處に、彼の大王頓て廳上に出來りぬ。其粧束嚴に美麗なり。此大王は原山東の人にて、姓は燕名は順と申し、別號を錦毛虎と云ふなり。昔日羊馬を賈ふ商

人なりしかども、商賣に本錢を失ひ、今此所に跡を留めて盜賊の頭領をなせり。此時燕順已に酒の醉醒て廳上に出で來り、乃ち椅子の上に坐し、左右の小賊に問うて云ひけるは、汝ら彼者は何れの所にて捉へけるにや。小賊等答へて云く、某等先きに後山に埋伏し、鈎索を地上に引き、人もや來ると待ける處に、果して此者鈎索に鈎て倒れ候ゆゑ、早速綁て大王に献じ奉るなり。燕順これを聞き、汝らが働き我肯て恩賞を行ふべき間、速に彼兩人の大王をも同じく此の處に邀へ來れ。一人の小賊命を奉つて廳前を退き、良久しくして大王兩人を邀へ廳上に至りぬ。宋江暗に此兩大王をみるに左の方に坐したる大王は、身のたけ五尺に滿ずして、兩眼の光は恰も日月のごとくなり。此人は原兩淮の生にして、姓は王名は英と號す。渠此のごとく身の長矮きゆゑ、人皆矮脚虎と諢名せり。原車家の二男なり。昔日道中に於て不圖貪心を起し、多く商人の財寶を奪取けるゆゑ、終に其事露顯し、官司に捉はれ久しく牢中に在て已に斬罪に決斷せしに、一夜風雨烈しきに乘じ、暗に牢を越え直ちに此清風山に上つて、燕順と共に盜賊の頭領をなしぬ。扨又右の方に坐したる大王は面の色白くして鬚長く、身材極めて大いなり。此人は原浙西蘇州の產にして、姓は鄭名は天壽と號す。彼斯面色白うして人物風流なるにより、人皆白面郎君と呼び慣せり。原銀器を造りて業としたる工匠なり。此鄭天壽幼き時より、武藝を學んで練熟し、其後家業廢れ異郷に落魄、ある日此清風山の下を過りける處に、王英に出合ひ鋒を交へ戰ひ已に五六十合に及びぬれど、勝負分たざりしゆゑ、燕順大いに其武藝を愛し、遂に山陣に留て、第三位の頭領となしぬ。此時王英先づ小賊共に對して、汝等已に旅人を捉へたることならば、早く殺して其肝を引き出せ、我これを肴にして快く一盃を酌べきぞ。小賊等命を奉り頓て大いなる銅の盤に水を入れ、宋江が前に置ければ、又一人の小賊双の袖を捲上、明晃々刀を提げ已に宋江が前に進みし處に、彼銅の盤を携へ出たる小賊、又宋江が衣の襟を扯開いて、胸の上に只顧水を澆ぎぬ。此故はいかんぞなれば、凡そ人の胸の内には熱血裏ぬるゆゑ、今此冷水を以てしば〳〵澆ぎ熱血を發散し、其後胸を剜開て肝を取り出すときは、其肝脆くして味ひ美なるに因てなり。彼小賊良久しく水を宋江が胸の上に澆しかば、宋江大いに嘆じて、惜哉宋江今此處に於て非命の死をなすよな。嗚呼何ぞ運の拙きこと直ちにかくのごときやと、再三嘆息に及びし處に、彼燕順不圖宋江と云ひたる二字を聞て、忙しく小賊等を退けて云く、汝ら先づ水を澆ぐことなかれ。我今かの旅人が嘆息したるを聞きたるに、何宋江とやらん云ふ二字を稱へけると覺ゆ。果して此言ありや。小賊等答へて云く、大王の聞き給ひし所、曾て差なし。彼今獨自ら云ひけるは、惜哉宋江今此所にて非命の死をなすよなと歎息せり。燕順これを聞て、急に身を起し、乃ち近々と進み寄つて、宋江に問うて云ひけるは、汝曾て宋江を識認たるや。宋江が云く、我乃ち是宋江なり。燕順又問ふ。汝は何れの國の宋江ぞや。答へて我は是濟州鄆城縣にて押司の官をなせし宋江なり。燕順が云く、然らば汝は閻婆惜と云ふ女を殺し故郷を逃出たる山東の及時雨宋公明と云ふ人にはあらずや。宋江が云く、汝は何を以てこれを知

れりや。我乃ち其閻婆惜を殺せし宋公明なり。燕順これを聞て大きに驚き、急に小賊が持たる刀を奪ひ取て、宋江が綁めの索を割解き、又己が身に穿たる錦衣を脱て宋江に着さしめ、なほ自ら宋江を扶け起し、第一位の椅子に座を譲り、忙しく彼兩人の大王王英鄭天壽に向て云ひけるは、汝兩人椅子を下て拜を行なへとて、遂に三人地上に倒れて拜をなしければ、宋江慌忙て椅子を滾び下、速に禮を還して云ひけるは、三位の豪傑我を殺さずして、却つて大禮を行ひ給ふはいかなる謂ぞや。三人の大王跪いて猶ほ慇懃に畏まり、燕順先づ言を開いて云ひけるは、某ら眼ありといへ共、眞の仁人を識す。已に押司の尊命を害せんと欲ぬ。若し押司自ら大名を曰はずんば、いかんぞよく宋押司たることを知らんや。某凡そ十四五年が間、諸州諸府に徘徊して、曾て宋押司の大名を聞き及びぬ。只恨らくは緣薄うして未だ尊顏を拜せざりし處に、今日天幸ひを假し給ひて押司を覩奉ること、某一生の喜悅、何事かこれにしかんや。宋江答へて云く、某何等の智德有て、かく慇懃の懇情に當らんや。燕順が云く、押司は原來能賢に禮し、士に下つて天下の豪傑と交はりを結び給ひしゆゑ、其佳名四海に流れて芳し。誰か敢て押司を敬はざらんや。梁山泊頃日大いに繁昌すること、都て皆押司の賜とこそ、諸人擧てこれを感歎す。只しらず押司は今何れの處に往んと、何れの地より此處に到り給ひしぞ。宋江答へて、彼晁蓋を救ひ其後閻婆惜を殺し、ならびに柴進孔太公が館に逗留したること、今又清風寨に馳せて小李廣花榮を訪はんと欲する事、始終備細に語りければ、三人の頭領是を聞て大いに悅び、早速一套の新衣を取り出して、宋江に着せしめ、又小賊等に命じ牛を殺し馬を宰しめ、大いに酒宴を設け、其の夜五更の時まで飲酌をなしにけり。翌日宋江辰の刻に起きて、廳上に出で、則ち三頭領と共に閑談をなし、又彼武松が豪傑萬夫も當りがたき剛勇を語りければ、三人の頭領齊しく大いに嘆じて云く、某ら無緣にして未だ武松に遇ず。もし其武松を得て共に此山陣を守らば、尤も十分に宜しかるべきに、今已に他所に行かしめぬるこそ殘憾なれとて、再三仰ぎ慕ひけり。宋江は清風山に五七日逗留しける處に、三人の大王心中に大悅し、毎日美酒美食を饌へて、宋江を欵待ぬ。此時蒲月初旬なりけり。山東の人、例年臘日には必ず墳に上て先祖を祭ること有り。斯る處に一人の小賊來て告けるは、今大路の上に一乘の轎に七八人漢子跟て、二つの大盆を荷はせけるが、定て墳に上て先祖を祭るならん。王英は原好色の徒にて、此告げを聞き暗に想ひけるは、轎の内なるは必ず女ならん。何ぞ是を奪取て樂しまざらんやとて、急に四五十の小賊を催して山を下らんとしける處に、燕順宋江再三これを欄りしかども、王英耳にも聞き入れず、小賊に下知し金鼓を鳴させ、直ちに麓を望んで下りけり。扨宋江、燕順、鄭天壽等三人は猶山陣に在つて飲酌を催しける處に、少刻一人の小賊來りて報じけるは、王頭領人數を引て彼七八人の者を趕給ひしかば、彼漢子共大いに怕れて逃去し故、只轎夫二人を捉へ頓て轎を披き内をみるに、只一人の女と銀の香盒のみ有て、別に何の財寶もあらずと。燕順問うて、其女は今何れの所に在や。小賊が云く、王頭領自ら後山の房間の内に擡入給ひぬ。燕順こ

れを聞き、呵々と大いに咲ひければ、宋江が云く、王頭領はもと女色を貪る人なるにや。是大丈夫のなす所にあらず。燕順が云く、王英が人となり、諸事敢て背くことなけれ共、只惜むらくは女色に愛るの病あり。宋江が云く、已にしからば、我足下ら兩人と共に行きて諫言を加へなば可ならんや。燕順鄭天壽大に悅び、遂に宋江を延て後山の王英が房間へ行き、直ちに門を推開いて内を見るに、王英彼の女を摟へて、只管娛んことを求めて有りけるが、宋江等三人が來りしを見て、忙はしく女を放ち、乃ち三人を請て座せしめけり。宋江彼女を見るに、身には縞素を着し、腰には孝裙を繫び、面には粉脂を施さず。其天然の姿尤も妖嬈にして麗し。誠に沈魚落雁の容貌あり。宋江心中に思ひけるは、此女が粧ひ都て孝服を着しけるは、定めて近き親類の忌中ならんと推量り、乃ち女に問うて云ひけるは、夫人は誰が家の人にて、這等の時節かく遊行し給ふや。彼の女滿面に羞る色を含み答へけるは、我は是清風寨の知寨が妻にて候が、近き比老母相果ぬるゆゑ、今日少しの供物を調へて墳を祭らんと欲し、今此山の下を過りぬ。何ぞ私に遊行することあらんや。願くは大王我が一命を救ひ給へ。宋江此言を聞て大いに驚き、乃ち心中に思ひけるは、我まさに清風寨の知寨花榮が方に訪ひ行んと思ひぬるに、此女今清風寨の知寨が妻と云ひしは、恐らくは花榮が妻にてもあらんすれば、我宜しくこれを救はんと圖り、則ち問て云ひけるは、夫人果して清風寨の知寨が妻に詐なくんば、夫人の夫は乃ち花榮と云ふ人ならん。何ゆゑ花知寨はまた夫人と共に出でずして、這等の時節に獨夫人を放つて此處を過らしめ給ふや。彼女が云く、我は是花知寨が妻にてはあらざるなり。宋江がいはく、夫人は今已に清風寨の知寨が妻と告げ給ひぬるに、何爲又言を變じ給ふや。彼女が云く、大王いまだ清風寨のことを知り給ふまじ。清風寨には今兩人の知寨あり。乃ち一人は文官、一人は武官の知寨は乃ち花榮なり。文官の知寨は乃ち我が夫劉高と云ふ者なり。宋江これを聞き想へらく、彼が夫已に花榮と同僚ならば、我これを救はずんば有べからず。若し然らざる時は、明日我は清風寨に至て頗る詞有るまじ。只よく王英を勸めて放たしめんと欲し、乃ち王英に對して云ひけるは、某一句の言を告んに、足下肯てこれを容ひ給ふべきや。王英が云く、押司言あらば速に言ひ給へ。何ぞ遠慮し給ふに及ばん。宋江が云く、我れ今此夫人の云はるゝを聞くに、原是朝廷の官人の妻なれば、いかんぞ下賤の輩と一列に看んや。足下宜しく大義の二字を顧み、速に此夫人を放ち再び回らしめ給へ。王英が云く、押司が詞背くにはあらざれ共、某久しく妻を求んと欲して朝夕これのみ憂ぬ。今朝廷の官人等非道を行ふ者儘多し。縱ひ是を奪ひ取りたるとも、何の妨かあらん。望むらくは押司某が所望を遂しめ給へ。宋江これを聞て、忽ち地上に跪づいて云ひけるは、足下もし夫人を求め給ふぞならば、某後日一人の美女を擇て足下に嫁せしめ申べし。只此の夫人は是我が朋友花榮が同僚の人の妻なれば、某如何ともしてこれを放ち回さんことを願ふなり。明かにこれを察し給へ。此時燕順鄭天壽忙しく、宋江を扶起して云ひけるは、押司先づ座を安んじ給へ。這事原來大事にあらざれば、宜しく商議をなし申さん。

宋江是を聞て、若しかくのごとくば、偏へに各〻を賴んとて、深く是を謝しければ、燕順はや宋江が心底を察して、王英が存念を顧ず。則ち左右の小賊を呼んで云ひけるは、汝ら早く此女を再び轎に乘しめ、山下を送くり出すべしと嚴に命じぬる處に、彼女此の言を聞て天に歡び地に喜び、再三宋江を拜謝して、大王の厚恩忘れがたしと云ひければ、宋江此光景を見て、再び彼女に對して云く、夫人必ず我に謝し給ふことなかれ。我は此山陣の大王にあらず。乃ち鄆城縣の旅客なり。彼女益々感謝して、遂に轎の内に座しければ、兩人の轎夫急に轎を擡て、山下に馳下り、恰も飛がごとくに跑去けり。宋江彼女を救ひしこと、大難に遇ふ根本とは、神ならぬ身に知らるべきかは、次の卷を見て驚くべし。

三編卷之十

宋江夜小鰲山を看

偖も王英は半は羞ぢ半は悶り、更に聲をも出さずして在ければ、宋江自ら手を携へて廳上に至り、再三再四諫て云けるは、足下自ら悶り給ふことなかれ、某後日かならず一人の美女、聰明怜悧なる者を擇び出して、山陣に送り申さん間、只よろしくこれと共に、長遠の娛を同うし給へ。大丈夫既に一言を出す時は、駟馬も追がたしと云ふことあれば、某誓て約を失ふことあらじ。燕順鄭天壽これを聞て共に呵々と笑ひければ、王英心中に悶るといへども、宋江が威風且禮義に綁られ、只自ら怒れる色を藏して同じく笑ひを催しけり。扨又清風寨の軍卒等は、想はず夫人を奪ひ取られ、やむことを得ず寨裡に歸り、則ち劉知寨に見えて、清風山の强盜等に夫人を奪ひ取られたるよし告ければ、劉高是を聞て、大いに怒り罵て云く、汝ら何ぞかくのごとく懦弱にして、我が妻を奪ひ取れたるぞ、我曾て汝等を饒さじとて、乃ち棒搶取て七八人の軍卒等を散々に打しかば、軍卒等分說して云けるは、某らは僅七八人の小勢なるに、賊等は都て四五十人の大勢なれば、いかんぞよく、彼等に對して敵することを得んや。願くは相公これを察し給へ。劉高益々怒て云く、汝ら何の面目あつて猶かくの如く、言

譯を致すや。早々我妻を取返ずんば盡く入牢させ斬罪に行べきぞ。軍卒等此事を聞て大に恐れ、俄に寨中の兵七八十人を催して、各器械を持、直に清風山に馳せて夫人を奪回さんと欲し、已に半路まで打出ける處に、彼兩人の轎夫忙はしく轎を舁て飛が如く馳來りければ、軍卒等是を見て、急に相迎へ問けるは、夫人はいかなる計に因て、再び賊手を脱れ山を下り給ひしぞ。女が云、賊等我を捉へて山陣に上りしかども、我自ら劉知寨の夫人たる事を云ひければ、彼ら大に怕れ、忽ち我を拜し乃ち山下迄送て我を回しぬ。諸の軍卒共頓首して云けるは、夫人もし肯て某らが一命を救ひ給はんとならば、願くは相公に見え給はん時、某らが力にて再び夫人を奪ひ回したると宣ひ給はれ。若然らずんば、某らが罪決して免れ難からん。那女が云、我自ら宜しく云ふべきに、必ず憂る事なかれ。諸の軍卒共大いに悅で拜謝し、頓て轎を中央に取圍んで、忙はしく寨裡に回りければ、劉高是を見て大いに悅び、夫人に問て云ひけるは、汝は誰が助けを蒙りて、再び恙なく回りけるや。彼夫人が云く、盜賊等我を捉へて山陣に登り、再三戲れを云ぬれども、我決してこれに從ばざりしかば、彼大いに怒り、已に殺さんとしける處に、我遂に彼等に對していふ。我はこれ清風寨の劉知寨が夫人なるに、汝もし我を殺すことあらば、此山陣立處に滅亡すべしと嚇しければ、彼輩忽然として大いに怕れ、急に我を送て山下に至りし處に、幸ひ軍卒等劔戟を振て寄來り、遂に我を奪復して馳回りぬ。劉高此事を聞て大いに悅び、乃ち十樽の酒と一疋の羊とを以て軍卒等を賞しけり。扨宋江は劉知寨が夫人を救うてより以來、五七日も山陣に逗留しけるが、はや山を下て花知寨が方へ往んと欲し、乃ち三人の頭領に別れを告げ山を下んことを求めければ、三人の頭領苦りに留めけれども、宋江已に意を決して留らざりしかば、三人の頭領已ことを得ず、遂に酒宴を設け別れの盃を勸めけり。三頭領又各黃金若干を宋江に送て餞の儀を表しければ、宋江これを收めて感謝し、其夜三更の時に至て各歇みけり。翌朝宋江未明に起て早飯を食し、頓て旅粧を全く調へ、乃ち三頭領に辭して山を下りしかば、三頭領小賊餘多從へて麓の路二十餘里を送り、再三宋江に約して云ひけるは、押司清風寨より回り給ふ時は、必らず山陣に立倚給ひて再び參會をなし給へ、某ら專ら待申とて、切りに別れを惜みぬ。宋江深くこれを謝し遂に三頭領に別れ、清風寨へ急ぎけるほどに、自ら包袱裹を背に擔ひ、遂に寨邊に至て鄉人に、花知寨が住所を問ひければ、鄉人答て、此處に兩寨あり。正南の上なる大寨は文官劉知寨が住所なり。又正北の上の小寨は、武官花知寨が住所なり。若し花知寨に事あらば、正北の方に尋行給へ。宋江是を聞て大いに悅び、直ちに正北の寨を望んで馳來り、遂に門前に至て窺ひければ、門を守る軍卒、宋江を見て、其姓名幷に來意を問ひ、内に入て知寨に斯と告ければ、時も移さず一人の年若き軍官走り出で、先宋江に向て拜をなしぬ。此人の相貌眉清く目秀で齒白く唇紅にして、而も威風凛々たる好き一人の豪傑なり。乃ち是清風寨の武知寨小李廣花榮なり。花榮已に宋江を延て廳上に至り、乃ち請て中央に座せしめ、又身を飜して四拜を行ひ、乃ち傍に座を陪して、慇懃に云ひけるは、某押司に

別れ奉りてより以來、はや五六年を過しぬ。某常に押司のことのみ、朝夕心に掛り、益渇想の懷に逼りける處に、頃日人の傳へ云ふを聞けるに、押司曾て閻婆惜とやらん云ふ女を殺し給ひぬる故、官司より賞錢を出して、方々搜し求るよし、專ら其沙汰ありしに、某恰も針の毬に座する心地、連々に十封餘りの書簡を寄て、押司の起居を問けるに、今日押司駕を枉て鄙舍に至り給ひしこと、某一生の悅び、誠に雀躍に勝ざるなり。宋江大いに嘆じて云く、賢弟何爲再三慇懃の言を云ひ給ふぞや。我曾て賢弟の華翰を接へ、深く厚意を感じぬ、是故這回偶來れり。只宜しく座を寬げ閑談すべしとて、彼閻婆惜を殺したることならびに、柴大官人孔太公等が館に逗留したること、及び武松に遇たること、又清風山にて活捉られ、却て燕順等三頭領が懇情を受たること、一々詳かに語りければ、花榮此言を聞いて嘆息斜ならずして云ひけるは、押司此のごとく禍ひに遭給ひ、嘸身心を惱し給ひつらん。今日幸願ひしごとく、此所に至り給ふ上は、少しも憂へ給ふこと有まじきに、且數ヶ年私宅に滯留し給へ。其内宜しからんずる商議をなすべし。宋江が云く、我向に柴進が館にありし時、老父がこと頻りに憂へ想うたるゆゑ、弟宋清を回して、老父を訪らはせける處に、老父も恙なく又官司の事も漸息ぬるゆゑ、宋清已に書簡を孔太公が館に寄て、委細のことを我に告しらせり。其比賢弟の書簡をも共に送り屆ぬ。これに依て賢弟の深く懇情なることを知り、今日特々貴宅に拜候しけるに、果して此のごとく、懇の存念誠に感佩の至りなり。花榮が云く、先にも已に語りぬるごとく、連々に二十餘封の書簡を呈して、押司の起居を候ひ奉りしが、久しく返簡をも得ざりし處に、其後令弟宋清公已に歸鄉ありしとて、乃ち書簡を惠み給ひて、押司は今孔太公が館に居給ふと告知らせ給ひぬ。是故に某近々人を孔太公が館に馳て、押司を邀へ奉らんとこそ思ひつるに、料らず今日光臨を蒙ること、是天の賜なり。然れども、祇恨らくは何の欵待をも盡すことなし。先宜しく後堂に移り、休息し給へとて自ら宋江を延て後堂に至り、早速妻崔氏を呼出して、宋江を拜させ、又妹をも共に呼出し、同じく宋江を拜さしめ、頓て新しき衣服を取出して、宋江に着させ、後堂に於て酒宴を設け、快く飲酌を催しぬ。此時宋江彼劉知寨が夫人を救ひしこと、一々備に語りければ、花榮これを聞て、忽ち双の眉を皺めて云ひけるは、長兄何の來歷もなきに、彼女を救ひ給ふはいかん。某却て彼を滅ぼさんとこそ思ふなり。宋江此ことを聞て大きに恠み、則ち問て云ひけるは、賢弟何ゆゑ此の如き事を云ひ給ふや。我は只賢弟の同僚たる人の妻なるに依てこそ、再三再四頻りに王英を諫め、遂に救ひ得て再び回らしめけるに、賢弟却て是を悅び給はざるは、必定緣故あらん、速にこれを語り給へ。花榮が云く、押司はいまだ知り給ふまじ。此清風寨は青州第一の要害なり。某一人此寨を守りし時は、遠近の盜賊等敢て一人も來ることなかりしに、今彼劉高想はず正知寨となり、擅に已が勢ひに乘じて、居民を闘し法度を破て、專ら非道をなすゆゑ、民の苦む者多くして、盜賊内より起れり。某は武官にして副知寨たるにより、毎度彼に欺れ、恨み骨髓に徹り、終には彼を殺すべきとぞ思ひつるに、長兄いかんぞ彼が妻を

救ひ給ひぬるや。殊さら彼女大いに毒惡なり。常にしも一向夫を擅援て、不仁のことを行はしめ、專ら黎民の賄賂を貪りて、不義の財を集んと欲す。幸ひ彼女に玷辱を蒙らしめて、天罰をも知らせんものを、長兄誤つてこれを救ひ給ひしこと、甚だ以て後悔なり。宋江此言を聞て、則ち諫めて云く、賢弟の言差へり。古の語にも寃仇解べし結べからずと云ふことあり。況や彼は今賢弟と同僚の官なれば又他人とは同じからず。殊に彼は文墨の人なれば、假令少しの過ちあるとも、只よろしく惡を隱して善を揚給へ。賢弟向後必ず恨を遏て交りを親しうし給へ。花榮此言を感じて云く、長兄の曰ふ所は、一々これ賢者の見識なり。某明日公廨の內にて劉知寨に見えなば、彼が妻を救ひ給ひぬること、一々告知せ候はん。宋江が云く、賢弟もし肯てかくのごとくんば、正によく親切の情現はれて、此より平生の交り互に睦しかるべし。花榮いよ〳〵其言に服し、夫婦慇懃に宋江を欵待ぬ。其夜二更の時に酒宴已に畢りければ、花榮則ち宋江を請て後堂の內に歇せけり。翌日又酒宴を設て、宋江を欵待、懇情を盡し怠慢の體なかりしかば、是より宋江は五六日を過しける處に、花榮手下の軍士に命じ、宋江を街に導かせ、此彼の風景を遊覽なさしめければ、宋江は已に此日を始として、每度軍士に誘引せられ、或は茶肆又は酒肆盡く至らずと云ふ處なし。此日宋江彼軍士と共に小枸欄と云ふ處に、暫く徘徊して風景を遊賞し、夫より直に村中に馳て、寺院宮觀等を一覽し、遂に又街の上に繞り出て、酒肆に至り良久しく酒を酌で樂みけり。宋江此のごとくすること每日なりしかば、寨裡に逗留すること、一月餘に及び、漸々臘盡春回り、又早元宵に至りければ、淸風寨の民ども、土地大王廟の前に一つの小鰲山を造り、其上には七八百の花燈を設け、街の上には千百の藝者盡く來て喧嚷けり。然も京の繁榮には如ざれども、此處も亦人間の天上なり。此時花榮は手下の軍士等に命じ、嚴かに寨の四方を守らしめ、專ら盜賊醉漢の徒を防がせけり。宋江花榮に對して云ひけるは、今宵は當地の街の上に、萬千の花燈を點し、都の光景にも多く讓らざるとこそ承はる。宜しく馳て一覽致さば可ならんや。花榮が云く、某も老早長兄を導きて、共に遊覽せんと思ひけれども、只恨らくは、知寨の職をなしぬるゆゑ、妄りに遊行すること能ず。長兄もし一覽し給んならば、某今家僕二三人を長兄に跟て導かすべき間、早々花燈を見て回り給へ。某は家に在て、專ら長兄の回り給ふを待受、共に三盃を酌で佳節を慶すべし。宋江が云く、既にかくのごとくんば、足下は家に在て待給へ。我は花燈を看て少刻回るべしとて、乃ち二三人の家僕に引れて街に至り、四面八方に繞て遊覽するに、門々戶々に種々の花燈を懸け其多きこと幾千萬と云ふ數をしらず。宋江大いに讃美し、遂に土地大王廟の前に至て、彼小鰲山の花燈を見るに、或は金蓮燈、玉梅燈、或は牡丹燈、芙蓉燈、其外許多の故事を用ひて、燈籠を錫りしかば、誠に美々しき佳觀なり。

元宵とは、正月十五日は上元、七月十五日は中元、十月十五日下元と云ふ。支那の俗正月十五日夜、市中は家より家へ竹を亘し、種々の花燈を架並べ、道行人の頭上へ悉く燈籠あり。其外に造り物の

燈籠色々新奇を出し、今小鰲山とあるは、蓬萊山の形を造り、是へ燈籠を交へ掛たるなり。日本には中元の佳節を云ふのみにて、上元下元をいはず。土地大王廟とは、所の鎮守と云ふごとし。

此時、宋江二三人の家僕と共に、良久しきまで普く遊賞し、纔半里許りに至て對向をみるに、殊更燈燭熒煌として、一夥の人雲霞のごとく集て、大墻院の門前を圍みしかば、宋江何事なるにやと近々向ひ進んでこれをみるに、幾ばくの人鑼鼓を打鳴し、舞を奏うて騷ぎけり。宋江諸人の後に在りてこれを見んとしけれども、宋江は原身材矮き小漢子なれば、偏にこれを見ること能はざりし處に、從ひ來りし二三人の家僕、諸人を推分て宋江を進せしかば、諸人の前に進出て、これを見るに、彼舞の裝束究めて異風に打扮けるゆゑ、宋江覺えず聲を放て咲ひける處に、墻院の内には劉知寨夫婦高樓の上に登つて、舞を見て在りけるが、彼夫人不圖宋江が笑ひぬるを見て、忽ち夫劉知寨に告て云ひけるは、今彼咲ひたる漢子こそ、前日我を清風山に奪ひ行し盜賊の首なり。宜しくこれを捕へ給へ。劉高これを聞いて大いに驚き、忙しく左右の家人に命じ宋江を捕しむ。宋江は舞を見了て、再たび外面に走り出で、纔二十歩許り過行んとせし所に、七八人の軍士飛がごとくに馳來り、頓て宋江を捕へて綁めけり。其勢ひは恰も皂鵰が紫燕を追ひ、猛虎が羊羔を啖ふに似たり。彼軍士等大いに宋江を罵て云ひけるは、汝犬賊いかんぞかく大膽に此處には至りぬるぞとて、遂に劉知寨が廳前に引出しぬ。扨彼宋江を導て來りぬる三人の家僕は、宋江が活捕れたるを見て大いに仰天し、且よろしく主人花知寨に告べしとて三人齊しく足を飛せ馳回りぬ。彼劉知寨は廳前に躍り出て待居ける所に、軍士等はや宋江を活捉て廳前に引渡しければ、劉知寨宋江を見て大に怒り、汝は是清風山の賊首にあらずや。いかんぞ擅まに此處に來て自ら死を求るや。宋江告て云く、某はもと鄆城縣の者にて名を張三と申、花知寨とは舊友なるによつて、多日花知寨が家に逗留せり。竟に清風山に在て、賊をなせしことなし。相公誤つて我を賊と思ひ給ふな。此時劉高が妻、屏風の背後より走り出て、大いに怒り罵りけるは、汝奸賊日外清風山に在て、我に見えけるは定て猶記えあらん、いかんぞ再三是を抵賴や、宋江此女を見て忙しく答へけるは、夫人何故かくのごときことを云ひ給ふや。其時我已に夫人に對して云ひけるは、我は本此山の大王にあらず、即ち鄆城縣より來りし旅人なりとこそ告けるに、何ぞはや是を忘れ給ふや。劉知寨が云く、汝已に旅人ならば、何ゆゑ又清風山には在りけるぞ。汝が言一々其理に當ず。我豈あへてこれを信せんや。妻又云く、彼日山陣に於て第一位の席に坐し擅まに我をして大王と稱へしめぬ。又もし賊首にあらずんば、汝は何ぞや。宋江が云く、我向に再三彼頭領等を諫めて、夫人を救ひぬるに、夫人は何故今日我を捉へしめ賊首とは云ひ給ふぞや。是則ち仇を以て恩に報ずるがごとし。夫人自らよくこれを察し給へ。彼女大いに怒り、宋江を指さし云く、汝奸賊尚かくのごとく抵賴んとするや。若し痛く打たずんば、いかんぞ肯て白狀せん。宜しく早々打給へとて、再三劉知寨を諫めければ、劉知寨然りと同じ、則ち左右に命じ、宋江を四五十鞭打しめぬる處に、痛ましい哉宋江は皮開

け肉綻れ、鮮血滾々と流れけり。劉知寨又左右に命じて云く、先今宵は其賊を梁の上に吊起て緊しく守るべし。猶明日州裡に送り、罪を決斷せんと議定しける。扨宋江に從ひ行たる家僕慌忙き馳回り則ち花知寨にまみえて、宋江が捉れたることを告ければ、花知寨これを聞て大きに驚き、忙はしく一封の書簡を修へ、急に兩人の家僕を劉知寨が家に馳て書簡を送らせける處に、兩人早速劉知寨の門前に至り、守門の軍士に斯と告ければ、軍士内に入て花知寨が使者のよし報しけるに、其使者を廳前に呼入しかば、使者則ち書簡を取出してこれを呈す。劉知寨これを披き讀。其文にいはく、

花榮拜二上僚兄相公座前一。所レ在薄親劉丈近日從二濟州一來。因レ看二燈火一誤犯二尊威一。萬乞情恕放免。自當二造謝一。草字不レ恭。惟願照察不宣

劉高書簡を見了て、忽ち大いに怒り、乃ち書簡を扯破て使者が前に投去、猶再三罵て云ひけるは、花榮果して斯のごとく大膽なるや。汝も是朝廷の官人なれば、宜しく法度を守るべき處に、却て盜賊等と通同するはいかん。彼賊自ら其名を告て、鄆城縣の張三と申者なりと云ひたるに、花榮今又彼が姓名を劉丈と書しは、我と同姓たらしめて、其罪を免さしめんと圖るなり。我汝ごとき小人に欺れんやと益怒り、乃ち左右に命じて花榮が使者を門外に赶出しぬ。使者此の光景を見て大いに驚き、早速馳回て花榮に斯と告ければ、花榮忽然として怒心頭より起り、急に盔甲を着し鎗を取り、忙しく馬に乘て軍士四五十人を引率し、直ちに劉高が寨裡に馳せ、はや門前に押つめぬ。

花榮大に清風寨を鬧す

此時劉知寨が守門の軍士等、花榮が猛勢を見て甚だ怕れ、四方に散て逃失けり。頓て花榮疾然として門内に馬を騎入、廳前に至て馬より下り、只顧手中に鎗を撚り、大音に呼りけるは、劉知寨早く出給へ、對面の上敢て說話せん。劉知寨此言を聞て大に怕れ、深く閨中に躲れ出ざりけり。花榮尙再三呼はりしかども、劉高さらに出ざりければ、花榮忙がしく軍士に命じ、宋江を尋ね搜させける處に、軍士等勢ひに乘じ、前後左右偏く搜し、遂に廊下の前の空房の内にて、宋江を搜し出せり。時に宋江は梁の上に吊起られ、しかも兩腿都て打綻られしかば、血流れて渾身全く紅に染けるを、軍士等急に扶け下し、綁の索を解ければ、花榮下知して、先づこれを私宅に送り回さしめ、其身は再び馬に跳乘大音聲を響せ呼りけるは、劉知寨汝今我が上に在て正知寨をなせばとて、何ぞ擅まに無禮をなし、我が親類を此のごとく打けるぞや、我猶明日此つみを正すべきぞとて、諸の軍士を引て、門外に馳出頓て私宅へぞ歸りけり。劉高は已に花榮に宋江を奪ひ復され、大に怒り、二百餘人を催して花榮が方へ差向けり。此人數の内首たる兩人の新敎頭劉高が命を奉て、二百餘人を引率し、直ちに花榮が猶未だ花榮が武藝には如かざりしなり。此兩敎頭劉高が命を奉て、二百餘人を引率し、直ちに花榮が宅に寄來り、已に門前に至りければ、守門の軍士忙しく内に入つて、花榮に斯と報じける。此時天色未だ明ざりしかば、寄手の輩は多く火把を揮照し、衆皆門外に群て進み入らんとはしけれ共、花榮

が勇猛に怕れ、眞先する者なかりしかば、各徒に噪動して時を移し夜も漸々曉はなれぬ。此時花榮が軍士等自ら大門を推開いて、少しも恐るゝ氣色なし。花榮ははや弓箭搶取て廳前に躍り出で、忽ち大音を揚呼はつて云けるは、汝ら諸の軍士ども必ず劉高が爲に我を犯し、一命を失なふことなかれ。兩人の新敎頭も亦、いまだ我が武藝の程をしらずしてこそ、我を擊んと欲すらめ。汝等幾ばく來るとも箭の鏃も及の鋒も及ぶべき我にあらず、率爾に敵し非命の死を做さんより、速に人數を纏めて立回るべし。もし此言に背かば、壹人も生ては回すまじきぞと。兩人の新敎頭が云、我劉知寨の命を承はり乃ち汝を擊て賊を取復さんと欲す。いかんぞ私の思慮を以て、人數を退ぞけんや。唯快く一戰を遂て勝負を決すべきぞ。花榮是を聞て呵々と大に笑ひ、則ち弓に矢を搭て、滿月のごとく拽緊暫し熬つて兵と放ちければ、眞先に進んだる一人の新敎頭が、左の眼に射中、第二の箭を放て、又一人の新敎頭が喉に射中し處に、兩人の新敎頭忽ち地上に倒れ死にけり。諸の軍卒共是を見て、大に驚き、悉く四面八方に逃散て、再び取掛らん兵もなし。此時花榮諸の家人等に命じ、先づ門を閉さしめ、直ちに後堂に至り、宋江にまみえ云けるは、某誤て、長兄に苦みを受けしめまゐらせ、今更後悔止ざるなり。宋江が云、賢弟何ぞ反てかくのごときことを云給ふや、汝想はず我ために災を蒙り給ふこと、一家中の老少さぞこれを難義に思ふべし。彼劉高定めて、此仇を報せんとこそ圖るべきに、我が輩も又預かじめ、計を施こさば可ならんや。花榮が云、某此官職をだに棄て彼と理論せば、少しも難きことあるまじきに、長兄必らず憂ひ給ふことなかれ。宋江が云、劉高が妻はいかなる惡人なれば、かくのごとく恩を以て仇とし、我を再三打しめけるや。我もと實名を告げんと思ひしか共、只閻婆惜が事又もや發らんと怖れしまゝ、詐て鄆城縣の旅人張三といふ者なりと詐きければ、彼劉高鄆城縣の縣の字を改めて虎の字とし、乃ち鄆城虎張三と書て籤を挿し、已に囚車に載て州裡に送らんと圖りし處に、賢弟來り救ひし故、我先急難を免れぬ。花榮これを聞て云けるは、某向に想ひけるは劉高はもと讀書をしたる文墨の者なれば、定めて同姓を憐れむこともやあらんと量り、乃ち書簡の表に長兄の名を劉丈と書遣はしぬ。後日彼もし官司に訟へ事に及ぶとも、我又自ら分辨する所有るべければ、少しも怕るゝに足るまじ。宋江が云、賢弟の言差へり。古の語にも飯を吃するは噎ばんことを防ぎ、路を行くには跌んことを防ぐと云ことあり。もし自ら是を輕く看て防ぐこもをなさずんば却て災を脫かれがたかるべし。賢弟先に彼が家に踏込で、我を奪ひ復すのみならず、又今彼が家人等を追散せしことなれば、劉高いかんぞ肯てこれを忍びんや、必定文書を以て官司に訟ふべし。其時我尙此に在て、若し再び捉はるゝことあらば、賢弟始終抵賴給はんこと能ふまじ。しかじ我は今宵暗に淸風山に上つて躲るべき間、明日汝もし彼と共に官司に出て對決に及ばゝ、其證見を出せと責て、對決に贏給へ、是乃ち萬全の良計なり。花榮が云、某は唯これ一勇の夫なれば、原來長兄の高明遠見に及ばざる間、敢て長兄の計に從ふべけれ共、唯恐らくは長兄先に痛く打れ給ひぬれば、必らず路を行

くこと能ふまじ。宋江が云、縱ひ棒瘡痛むとも、何ぞ憂とするに足らんや。先づ足下州裡に至らん時對決に望んで、劉高斯いはゞ答は斯と慮り給へ、事已に危急に及びしことなれば、片時も逗留なりがたし。我は唯よろしく速に清風山に馳行べしとて、乃ち膏藥を求めて棒瘡の上に貼、其日晚昏に至て終に花榮に別れ、獨り自ら清風寨を打出て、直ちに清風山へと急ぎけり。扨劉知寨は戰ひいかゞと待居ける處、軍士ら盡く散々逃回り、劉知寨に告て云けるは、花榮が猛勇萬夫敵しがたき勢ひあり。是故に某らも勝を取ること能はずして引返しぬ。彼兩人の新敎頭も、已に花榮が一箭に各射殺されぬ。誠に花榮が働きは、等閑の及ぶ所にあらざるなり。劉高は兩腕とも賴み切たる新敎頭を殺され、大に驚歎せしが、原來文官なれば頗る計略智慮あり。花榮は又武官にて、勇猛藝術は人に過たりといへ共、智量に至ては却て劉高に及ばざりけり。此時劉高熟々想ひけるは、花榮必定今宵の內に彼賊を清風山に歸し、明日我と爭ひをなさんと圖るらめ。若し官司に至て事を正すとも、彼再三抵賴ば、我何を證見として彼に云勝つことを得んや。我今宵急に二三十人の軍士を、五里の外に遣はし、賊をだに擒とせば、早速人を州裡に遣はし、府尹に訟へ、又多くの官軍を催し花榮をも俱に生捉て、遂に彼が一命を害し、我獨り此清風寨を覇らば、諸事全く如意にして、快からんものをと、已に計を定め其夜二十餘人の軍士を催はし、四五里外の路上に遣し、宋江が獨り清風山に回らんとするを捕はしめける處に、二十餘人の軍士果して宋江を捕へ、遂に高手小手に絡めて引回りければ、劉知寨是を見て大に悅び、諸の軍士等に對して云ひけるは、我が察せし處毫髮も差はず、此賊清風山に馳回らんとして活捕る、亂りに沙汰して外に漏すことなかれ。且此賊を後院の內に入置て、牢く守るべしと嚴かに命じ、頓て狀子を修へ心腹の者兩人を、其夜青州に馳て此事を訟へけり。翌日花榮暗に思ひけるは、宋江ははや清風山に回しければ、我が心稍安んせり。唯しらず劉知寨は何ゆゑ兎角の言も云はずして、自ら靜まりけるや、嗚呼怪しいかなと、疑ひ更に晴ざりけり。彼劉知寨ははや、人を州裡に馳て此事を訟へしめたれば、心中甚だ大悅し、暫く先何事もしらぬ體にもてなし更に聲をも做ざりけり。扨青州の府尹覆姓は慕容、雙名は彥達と號し、乃ち其妹は、今上皇帝徽宗天子の御寵愛にあひぬる貴妃なる故、專ら妹が勢に倚て權威を振ひ、或は居民を殘害或は僚官を欺負、不仁不道の行跡多し。此時府尹後堂に座して在りける處に、左右の近習劉知寨が狀子を携さへ來つて府尹に呈す。府尹これを披き見て大に駭き、花榮はもと功臣の子孫なるに、何ゆゑに清風山の盜賊と通同するや。此の罪尤も重ければ、空しく捨置がたし。宜しく先づ花榮を捉へて、事を正さんと、乃ち當府の兵馬都監を呼んで、急に花榮を捉へ來るべきよし命じける。此都監姓は黃、名は信と號し、武藝高强にして青州を威鎭するに因て、人皆鎭三山と呼び慣はせり。又此三山と云緣故は、青州支配の內に三つの險山あり。第一はこれ清風山、第二は二龍山、第三は桃花山、這三つの山は都て强賊の住處なり。此黃信常々人に語て云けるは、我這三つの山を鎭守して、大

小の盜賊一々捉へ盡さんと誇言せしにより、人擧て鎭三山と諢名せり。此黃信は相貌凶猛にして虎豹のごとし。身軀長大にして蛟龍に似たり。平生能く夾門鈒を使ひ慣ぬ。此時黃信已に府尹が命を奉はり、頓て四五十人の精兵を催し、衣甲を着し鈒を取り、一疋の名馬に打乘て、直に淸風寨に馳來り、先づ劉知寨が門前に至て馬を下りければ、劉高忙はしく迎へて、後堂に入り、互に禮畢り、座已に定まりし處に、はや酒宴を美々しく設け、黃信を欵待、卽ち宋江を引出して黃信に見せしめければ、黃信が云、這賊を且囚車に入れ、紅絹を以て彼が頭を包み、其の上に一つの紙旗を挿し、旗の上には淸風山の賊首鄆城虎張三と書きて州裡に送るべしと、急に用意を調へけり。宋江は自ら分辨しがたきことを察し、敢て聲をも出さずあり。黃信又劉高に問うて云、知寨此の張三を捕給しこと、花榮も已にこれを知れりや。劉高が云、昨夜二更の時分張三を捕へ、暗に我家に藏し置きぬる間、花榮は曾て此事を知ざるなり。黃信が云、已にかくあらば又花榮を活捉んこと最安し。明日大寨の公廳に於て、酒宴を設け宴席の四方に二三十人の軍士を伏置、我自ら花榮が方へ往て、彼に對面し唯詐て云べきは、慕容相公頃日足下等兩人、文武知寨不和なることを聞及び給ひ、特々我を遣はし、已に兩知寨を和睦さすべきとのことなりと告て、宜しく彼を誑き終に賺して、公廳に誘引すべき間、既に飲酌始りなば、我が盞を擲るを以て相圖と定め、四方の伏勢一齊に出て、花榮を捉へ、早速綁めて州裡に送るべし。唯しらず此計はいかん。劉高これを聞き、再三讚嘆して云けるは、此計大に神妙なり、いよ〳〵此良計を行ひ給はゝ、花榮を活捉んこと、恰も囊の內を探りて物を取るがごとくならんと、其夜已に計を議定し、翌日大寨の左右兩邊に、豫じめ軍士を伏置、廳上には酒宴を設けて、諸事全く調へ朝飯後黃信馬に打乘、直ちに花榮の小寨に馳せ、門前に立ちしかば、守門の士內に入り、花榮に斯と告る處に、花榮は忙がはしく出迎へ、便はち延て廳上に至り、賓主の禮已に畢りければ、花榮先づ黃信に問て云、都監相公は何の公用に依て、此邊に來臨ありや。黃信答へて、某府尹の命を受て此處に來れり。乃ち是足下等兩知寨文武の官僚不和たるに因てなり。しらず何ゆゑ同僚不和にはなり給ひしぞ。府尹相公再三是を憂ひ慮かり給ふは、兩知寨已に不和なるは、必定私仇に因つて、公事を誤ることもやあらん。宜しく急に和睦の儀を調ふべしとて、乃ち某に命じて、今日大寨の內に酒宴を設けしめたまひ、則ち足下等文武の兩知寨を請て、和睦さすべきとのことなり。足下宜しく某に隨つて大寨の公廳に至り給ひ、劉知寨と和を調へ、共によく淸風寨を守り給へ。花榮此言を聞て、微しく打笑て云けるは、某豈敢て劉高を欺かんや、殊に彼は正知寨のことなれば、某常に諸事を讓りて其下知を受くるといへども、何ゆゑにや、劉高は唯某が過を見出して、是を責んとのみ欲せり。今日府尹相公、某らが不和のよしを聞給ひて、忝く足下を遣はし給ふのみならず。酒宴を公廳に設けしめ給ひて某らが爲に和睦を調へ給はんとの厚意、某何を以てか能くこれを謝せんや、誠に感激の至りなり。黃信又花榮に對して低言けるは、知府相公此のごとく懇請のこと、足下壹人を親切に想ひ給ひての

ことなり。若し萬一刀兵を動すことあらんときは、足下壹人こそ朝廷の御爲に力を用ひ、軍功をも建らるべし。彼劉高は本文官のことなれば、其節に及んでは曾て益あらじ。足下いよ〳〵府尹相公の、厚意を感じ給はゞ、早々某に隨ひ公廳に來り、宜しく先づ曲て劉高と和睦を調へ給へ。花榮これを謝して云、都監相公の好意別して感佩に勝ずとて、則ち酒食を設けて、先づ三盃を勸んとしける處に、黄都監これを辭して云、足下若し果して某に三盃を勸めんと思ひ給はゞ、和睦し給ひて後、某貴宅に至て欵待を請べき間、今日は先づ早々公廳に至り給ひ、只急に和睦の事こそ專要なれ。花榮是を聞て其言に服し、早速裝束を改て兩人馬を並べ、直に大寨を望て馳來り、遂に公廳の上に登りし處に、劉高は早來つて待居けるが、黄信花榮が至りしを見て、忙はしく出迎へ、三人座已に定まりしかば、黄信頓て酒宴を具へしめて、飲酌を催しけり。此時家人等は花榮が馬を寨外に索出して、牢く寨門を關さしむ。花榮は計たることを夢にもしらず、一向想ひけるは、黄信は我と同じく武官のことなれば、必定我を憐む心深し。誠に感謝に勝ずと、心中喜悅して毛頭疑ひをなさゞりけり。黄信先づ盃を把て劉高に勸て云けるは、府尹相公這回足下等兩知寨不和たることを聞及び給ひ、大にこれを憂へ、乃ち某を遣はし和睦のことを調へしめ給ふ間、足下兩人宜しく舊惡を念ずして、互に和睦を遂られ、向後諸事然るべき樣に商議をなし、朝廷の聖恩を報じ給へ、若し果して能くかくのごとくんば、乃ち忠臣とも謂つべきものなり。劉高が云、某らごとき不能不才の徒なるに、府尹相公互にかくのごとく尊心に掛給ひて、和事を調へしめ給ふこと、誠に懇切の存念なり。某ら兩人別に不和のこともなけれども、府尹相公外人等が云しを信じ給ひて、既にかゞ足下を遣して示し給ふ上は、向後別して睦じく交り、少しも私の恨を懷かずして、互に公用を專一に勤むべき間、足下某らがために、府尹相公に宜しく相達し給へ、黄信是を聞て呵々と打笑ひ、又第二の盃を以て花榮に勸めて云けるは、劉知寨今已に云給ひしは、足下と別に不和のこともあらざるとなれば、いよ〳〵悅ばしく思ふなり。府尹相公向に兩知寨不和たることを聞給ひぬるは、定めて外人等が妄りに傳へし所ならん。然れ共益親しく交り給ひて、互に公役を眞實に勤め給へ、是則ち官爵を受る者の本等なり。花榮頓首して盃を接へ、懇懃に深く謝して、終に飲乾ければ、劉高は又自ら大盃に酒を滿々と篩で、黄信に勸めて云けるは、今日都監相公此所に來臨を惠み給ひしこと、某ら兩知寨が爲には莫大の福なり。願くは此酒を勸めまゐらすべき間、若し我が輩を棄給はずんば、宜しく是を乾給へ。黄信急に盃を接へて云けるは、劉公何ぞかく懇懃の言を述給ふや。某敢て此酒を飲乾て、以て厚意を謝せんとて、乃ち盃を手に拿ち、能く四方を顧み、頓て相圖のごとく、盃を地上に擲去ければ、忽ち後堂大いに響て兩邊より、四五十人の軍士一齊に進み出、遂に花榮を押へ、高手小手に縛しめけり。花榮大に驚き、これは何事をなすぞと呼はりければ、黄信罵て云、汝尙あへて何事をなすぞと呼はるはいかん。汝擅まに清風山の盜賊と通同じて、朝廷に背くこと、罪正に九族を滅すに當れり。花榮が云、都監相公斯云給ふは定め

て證見あつての事ならめ。願くは其證見を見せ給へ、若し證見もなくんば、我決して足下を饒すまじ。黄信冷笑て云、汝は何證見を看せよと云よな、我今證見を出して見すべき間、必ず驚くことなかれとて、則ち左右に命じ、一兩の囚車を推出させければ、花榮惟みてこれをみるに、囚車の内には、宋江を入れ紙旗を挿し、旗の上には清風山の賊首郓城虎張三と書ければ、忽然として大に驚き、唯宋江と面を見合せ、呆れたる計りなり。黄信又呼て云、是都て我が干りしことにあらず。原告の對手劉高此に在り。花榮汝もし分説あらば、速に今これを云んや。花榮宋江を見て、黄信に對し云けるは、彼者は是我爲には親類なり。乃ち郓城縣より來れるに紛れなし。然るに彼を捕て賊とするのみならず、剩へ我を綁め同類と云は、甚だ以て非道なり。好遮莫我官司に至らば、自ら分辯すべき所あり。速に我を送て官司に至らしめよ。黄信が云、汝已に斯のごとくんば、官司に於て宜く分説せよ。我今汝を送て州裡に行くべしとて、則ち劉高と商議して、百餘人の軍士を催し、已に囚車を推しめて、青州府へ進發せんとぞ、議定しぬ。又此時府尹は專ら音信を待て、尙廳上に控へけり。花榮又黄信に對して云けるは、足下と我とは同じく武官なり。足下もし肯て其類を憐むの心あらば、我が衣服を除ずして囚車に載しめんや。黄信が云、此こと究て易し。何ぞ必ずしも衣服を除かんやとて、則ち劉高に對して云けるは、花榮が云には、官司に至つて自ら分説有りと申なれば、其内は決斷したる罪人にあらず、只宜しく衣服を着させて、州裡に送るべしとて、乃ち花榮宋江を囚車に載せ、百餘人の軍士等に命じ、これを擡せ、黄信は喪門劍を撫て馬に乘ければ、劉高同じく鎗を持て馬に乘り、遂に清風寨を離れて、青州府へと急ぎけり。

此途中に甲冑馬上の豪傑待て黄信を追走らせ、劉高を生捉、宋江花榮を救ひ、王英再び劉高が夫人を生捉、山陣に引來る品々、四編目を讀て知るべし。

四編卷之一

鎮三山大に青州道を鬧す

宋江は不慮に清風寨の正知寨劉高が手に活捕れ、小李廣花榮も黄信が計にて、酒宴の席に活捕ければ、青州に送らん爲兩人を囚車に入、百餘人の軍士を催し、鎮三山黄信、劉知寨共に清風寨を發し、青州路を望んで漸〻三四十里を馳、乃ち前面を見るに、大なる林あり。林の内に人あつて只顧窺ひ望みければ、諸の軍士これを怕れ、乃ち立住、林の内を指さして云けるは、怪かな、林の中に人在て再三我々を望むは、必定盜賊ならめ。しらず何を以てこれを追退けんや。衆皆進み難て控へたり。黄信此光景を見て、諸の軍卒等を責て云、汝等何ぞかくのごとく人を怕るゝや。必ず遲疑を休て、進發せよとて、當先に進んで馳ければ、軍士らも黄信が威勢に倚て二つ囚車を擡、大勢是を打圍で、一齊に咄と進みけり。既にして林の邊に至りし處に、俄に金鼓の聲大に響きしかば、諸の軍士ども聞て襲れ慄き、急に逃去んとせし處に、黄信怒て云けるは、汝等衆軍何ゆゑ、斯自ら頻りに恐懼するや。只宜しく列を堅固に備て馳往べし。少しも猶豫することなかれとて、又劉知寨に向て云けるは、足下は諸軍と共に囚車に從て、後へより進み給へ。我は試に敢て當先すべし。劉高は金鼓の聲に

驚いて魂魄已に散ければ、敢て返答にも及ばず、只口の内に再三再四念じていはく、大慈大悲の觀音菩薩、願くは此道を恙なく過らしめ給へとて、鎗を雙の手中に挾み、只合掌して觀念し、面の色は恰も土のごとくなり。黄信はもと有名の豪傑にて、兵馬都監の勤をなせば、少しも怯るる氣色なく、馬を躍せ劍を撚て、當先に進みける處に、林の内より五六百の小賊ども、喊き叫で斬て出、各〻頭には紅巾を卷、身には皂服を着し、腰には利劍を掛け、手に長鎗を持ち我劣じと先を爭うて、一齊に咄と馳來る。其内に三人の大王馬を並べ、當先にすゝむ。一人の大王は青き色の袍を着し、一人の大王は緑色の袍を着し、一人の大王は紅き色の袍を着しぬ。各〻頭には錦金の萬字巾を戴き、腰には皮鞘の腰刀を帶し、手には明晃々せし朴刀を提げ、三人同く路も窄しと馬を進めて蒐たりける。是則ち錦毛虎燕順、矮脚虎王英、白面郎君鄭天壽の三頭領なり。兩陣已に相對しける處に、三人の大王高聲に呼りけるは、今此に至る官軍は何國より來りぬるかはしらねども、若此道を過らんと思はゞ速に三千貫を出し路を買て過るべし。然らば我肯て汝らを饒さん。黄信馬上に在て此言を聞き、大に怒て云けるは、汝潑賊等必ず無禮をなすことなかれ。我を誰とか思ふらん。汝らも我名を聞こと久しからん。我は青州の都監鎮三山なり。汝等誤て我猛威を犯さば、後悔立處に至るべきぞ。三人の大王此一言を聞て大いに怒り、則ち眼を睜開て睡罵て云けるは、汝は何鎮三山とやらん云賊官よな。縱ひ鎮萬山にもせよ、三千貫の買路錢を償はずんば、我決して汝を饒すまじ。只速に路を買ひ馬を

下りて通るべし。倘然らずんば、三千貫の替りとして、汝が首を取べきぞ。黄信これを聞て、怒り骨髓に徹り、再び大音聲を揚て罵りけるは、汝奸賊いかんぞ敢て、自ら死を求んとするや。我はこれ官司の命を奉つて、死罪人を州裡に送る、朝廷の役人なるに、何ぞ官路を汝らに攔られて、三千貫を出さんや。汝若命惜くば速に衆を引て山に歸れ。三人の大王聞も敢ず大いに冷笑て云、汝は公用を掌を以て、權威を震はんと欲や。恐らくは這路を過らん者、誰か敢て三千貫を遺ざらんや。假如天子の御駕を移し給ふとも、三千貫の買路錢は是非これを求むべし。況や汝らをや。汝もし今三千貫の買路錢を携へずんば、其質として罪人を山陣に預け置け。若汝何れの日にても、三千貫だに持參せば我肯て罪人を還すべきぞ。黄信大に怒り罵つて云、汝死を招く强賊、いかんぞ斯朝廷を輕んじて無禮を云や。我が喪門劍の利害を汝らに知らせんとて、諸の軍士に下知して、金鼓齊しく鳴さしめ、忙しく馬を拍劍を舞して直ちに燕順等三人に斬て蒐りければ、三人の頭領も、同じく刀を揮て相迎へ、遂に鋒を交へて戰ひ、已に三十餘合に及びし處に、黄信三人の豪傑に、一人して敵しがたく、力漸々衰へぬ。況や劉高は本文官のことなれば、黄信を助け戰はんことはさて置き、先此光景を見て大に驚き、只逃走んとのみ欲しければ、黄信心中に想道、敵は三人我は一人、いかんぞ勝を取ことを得ん。若彼らに活捉れなば、是乃ち一生の恥辱たるべし。且暫く此所を脫れて、再たび計を施さんと思案を決し、忽ち馬を回して逃しかば、三人の頭領、勢に乘じて赶けれども、黄信重て跡をも顧ず、只馬を飛せて清風寨へ馳回りぬ。諸の軍士ども黄信が逃たるを見て、大に潰亂れ、遂に四車を棄、四面八方に散失けり。此時劉高は肝を消し魂を落し、忙しく馬に策うち逃回らんとせし時、小賊等頓て地上に鈎索を引、劉高が馬を鈎倒しければ、劉高眞倒に地に落ちける處を、數百の小賊一度に進で劉高を捉へ、又宋江が囚車を打開て、宋江を扶け出しければ、花榮は自ら囚車を、蹋破りて跳出ける に、綁の索盡く嚓喇喇と斷にけり。諸々の小賊ども劉高が衣裳を剝取て、宋江に着せしめ、衆皆劉高を大に罵て、緊しく高手小手に綁めぬ。三人の頭領は、宋江花榮を請て馬に乘らしめ、遂に同じく劉高を監押して山陣に歸りけり。此日三人の頭領、此處にて宋江、花榮兩人救ひし所以はいかなれば、向に上元の夜小賊等許多を清風寨に遣して、花燈を壯觀しめけるが、小賊ら幸ひ其夜宋江が活捕れけるを見屆け、急に馳回て三頭領に斯と告ける故、皆大に驚き早速物慣れる小賊四五人擇出し、清風寨に遣し置き、毎日宋江がことを窺しめ消息を求めしが、此日宋江、花榮兩人の者、果して青州府に送るを聞き、豫じめ此處に出張し、遂に官軍を追拂、兩人を救ける也。三人の頭領其夜宋江、花榮と共に、山陣に至りしかば、已に二更の時分なり。燕順はや聚義廳に於て酒宴を設け、乃ち宋江、花榮を請て客座に坐せしめ、三人の頭領は主席に坐を列ね、大いに飲酒を催して、宋江、花榮を欵待、山川の珍物品を盡し豐なり。花榮先燕順等三人の頭領に謝して云けるは、今日三頭領宋押司と某とが、命を救ひ給ひて仇人を活捕給ひぬること、某らが爲に洪大の福ひなり。誠に何を以てか、此恩を報せんや。

某今宋押司と共に、此山陣に逗留して身を躱さば、始終恙なくして寸心を安んずるに足るべし。然れ共某が身の上には尙一つの事有て、未だ全く心を安んぜざるなり。燕順が云く、知寨は何の事に心腑を惱し給ふや、願くは速に心事を語て某等に知しめ候へ。若し某ら力を用ひてなるべきことは、縱ひいかなる難事たりとも、敢て辭することなくこれを扶くべし。花榮が云、某猶妻と妹とを淸風寨の內に捨置たれば、必定黃信に活捕るべし。若し然らば我いかんぞよく、獨り心を安んぜんや。燕順が云、知寨必ずこれを憂ひ給はざれ。我熟これを想ふに、黃信敢て夫人を活捉ことあらじ。假令活捉て州裡に送るとも、必ず此邊の路を過るべければ、某ら三人これを奪ひ取て知寨に與へまゐらすべしとて、乃ち一人の小賊を山下に遣し、先づ消息を伺はしめければ、花榮大にこれを感謝せり。宋江此時三頭領に對して云けるは、賢弟等我爲に先劉高を引出させ給へ。燕順が云、劉高は今廳の柱に捆つけ置ければ、速に是を殺して、長兄の爲に仇を雪ぐべし。花榮が云、彼を殺さんには、我みづから手を下すべき間、各も宜く一覽せられよとて、頓て衆皆席を立て柱の邊に來りし所に、宋江は劉高を指さし、大に罵つて云、汝と我とは原來仇もなく寃もなきに、いかんぞ全く惡妻が言を信じ、我を害せんと圖りしぞや。今かく擒となりしは、天の責給ふ罰なり、汝猶此上にも分說ありや。花榮が云、彼が如き惡人に對して、言語んも汚はし。長兄宜しく問答を休給へ。我急にこれを殺して、尊覽に備へんと、乃ち明晃々する刀を用て、劉高が胸を裂開、頓て肝を拽出して宋江が前に獻じければ、小賊ども遂に屍を把て傍に拖搬けり。宋江是を見て云ひけるは、今日三頭領の力に依て、此惡人をば殺したれ共、猶いまだ彼惡婦を殺さゞるは遺憾なり。王英戲れて云けるは、我明日淸風寨に馳、彼女を捉へ回るべき間、這回は是非我に與へて樂しめ給へとて、各一笑を催しけり。翌日また五人の豪傑聚義廳に會合して、急に淸風寨を擊んと商議しける處に、燕順先言を開て云けるは、山陣の兵ども昨日戰ひをなし疲れたれば、今日は先彼らを賊ましめ、明日早々山を下て淸風寨を攻るとも、猶未だ遲かるまじ。唯しらず列位の尊意はいかん。宋江此議を聞て云けるは、燕賢弟の言究て可なり。先宜しく人馬を歇めて、氣力を增しめ、其後軍を發して一戰せば、必定戰ひに利有べし。只よく急に山前山後に觸、まつたく人馬の氣力を養はしめんとて、山中殘らず一々觸をぞ回しけり。扨かの都監黃信は一騎馳に淸風寨に跑回り、忙はしく寨中の兵を催して、緊く四方の柵門を守らしめ、頓て一封の文書を修へて、人を靑州に馳府尹へかくと訴へしかば、府尹大に驚き、先文書を見るに、花榮今淸風山の盜賊らと同じく山陣に在つて、淸風寨を犯さんと欲ふ意あり。賊もし急に推寄なば、淸風寨必定保ち難からん。事已に危急に及ぬる間、早々良將を遣して、淸風寨を堅固に守らしめ給へと有ければ、府尹これを見畢て益々驚懼し、速に人を馳て靑州の指揮使總兵管兵馬秦統制を請て、軍情の重事を商議すべしとて、頓て使者を遣しける。此秦統制は原山後開州の人にして、姓は秦名は明と號す。此人甚だ短氣急性にして、怒る聲は雷の轟に似たるゆゑ、人皆渾名を做て霹靂火秦明と呼慣せり。先

祖は乃ち軍官をなしたる人なり。此秦明よく一條の狼牙棒を使うて萬夫不當の勇あり。此日秦明府尹の招きに應じ、直ちに府尹の衙に馳至りしかば、彼慕容府尹急に迎へ對面し、乃ち黄信が遣したる文書を出しみせけるに、秦明是を見て大に怒り、盜賊等が分として、いかんぞかく無禮をなすや。相公必ず憂ひ給ふことなかれ、某急に人馬を發し、盡く滅すべし。若彼賊等を活捉ずんば、誓て再び相公に見えまじ。慕容府尹が云、將軍あへて此のごとく力を用ひ給ふならば、縱ひ賊勢幾千萬ありとも、何ぞ難しとするに足んや。然れ共、若將軍急に兵を起し給はずば、賊先清風寨を擊ことあらん。宜しく速に人馬を催し給へ。秦明が云、此事いかんぞ遲延に及ばんや。今宵の內に軍馬を催し、明日は早早發向すべし。府尹是を聞て大に悅び、豫じめ兵粮等の用意をなさしめけり。秦明は文書を見て、花榮が朝廷に背て、盜賊等と一所にあることを聞ければ、覺ず怒心頭より起て、頭髮倒に竪ち、忙しく府尹を辭して馬に乘り、直ちに指揮司の內に來て、一百の馬軍と四百の步軍を催し、先城外に遣し勢揃へをなさしめければ、此時慕容府尹は、先達て城外にあり、多く酒肉等を調へて三軍に賞しけり。今朝秦明も聲花に披掛、已に城外に打出、人馬を嚴に備へ、大文字に兵馬總管秦統制と、分明に書たる紅の大旗を當先に持せ、秦明は中軍に居して白馬に乘り、已に三軍を起して打立んとせし處に、府尹自ら秦明を請て馬を下さしめ、先出陣の吉兆を祝せずんば有べからずとて、頓て酒宴を具へ、盃を擧、再三秦明に勸めて云けるは、將軍宜しく、三盃を酌で出陣し、頓て凱歌を奏て歸陣し給へ。秦明これを謝して酒を酌了、遂に慕容府尹を辭し、再び馬に乘り、隊伍を嚴密に開て、三軍を催促し、直ちに清風寨に望て馳行けり。

霹靂火秦明夜瓦礫場に走る

秦明已に打立て、大勢の軍馬を領し、清風寨に至りしかば、四民ことぐ〳〵く秦明が威風凡ならざるを見て、迺無双の勇將ぞやと、各〻褒賞せざるはなかりし。清風寨と云ふは、青州の東南に在つて、清風山とは尤遠からず。秦明軍馬を引いて、清風寨の正南より進み、直ちに清風山の下に至りしかば、小賊どもこれを見て、急に山に上り、諸〻頭領にまみえて、此樣子を告げけるに、諸〻頭領は豫て申合はせ、兵を發し清風寨を打たん用意をなす所に、秦明先づ人馬を率し逆寄すと聞き、別位大に驚きこはいかゝの計を以てこれに處せんと、各〻面を見合はす計なり。此時小李廣花榮衆にぬきんで、列位十分驚き給ふべからず。いにしへの語にも、兵臨で急を告ぐるときは、必ず須く死敵すべしと云ふことあるに、何の遲疑する所かあらん。唯速かに山兵等に飽まで酒食を吃はしめ、某是を從へ、先づ戰に力を以てし後彼を敗るに智を用ゆべし。其計はかくのごとくかくのごとくと低言ければ、宋江此議に同意し、賢弟の奇謀圖に當つて覺ゆ。宜しく早々行ひ給へとて、宋江花榮豫じめ謀策を定め、乃ち山中前後に觸て、已に人馬をそろへける。花榮はやく、一匹の良馬を擇其外盔甲弓箭鎗等をしらべ、軍勢の揃ふを相待ぬ。さて又秦明は衆を從へ馳せ來り、清風山の下より十里を隔て陣を取、

翌日五更の頃、軍勢に食せしめ、一つの大炮を放て、一時に鯨波の聲を吐と發し、清風山に寄せ來り、要害の地を見立てて、軍馬を備へ金鼓盛んに打鳴す、其響天地も震ふばかりなり。清風山にも、又金を鳴し鼓を擊ち、鬨の聲山谷に響かせ、一彪の人馬麓をさして馳せ下る。此時秦明馬を勒へ、狼牙棒を横へ敵の勢ひを伺ふに、諸の小賊ら小李廣花榮を中央に引きつゝみ、各勇を逞しうし我劣らじと馳せ進む。花榮已に麓迄下り、諸軍に鑼を鳴らさしめ、遂に敵陣相對し、双方鬨を合はせ暫く亂聲止ざりけり。時に花榮鎗を輪し、馬を陣前に駐寄、秦明に對つて恭しく禮を行ひければ、秦明これを見て大いに怒り、花榮汝は本將門の子孫ならずや。今知寨の職として、一境の地を掌に握て祿を食み、何の乏しき所有つて盜賊と合體し、朝廷に背くや。我今上命を奉つて、汝を捉へんため、此所に向うたり。汝速かに馬を下手を束て縛を受けば、却つて手を腥くし、脚を汚すの羞辱を免かるべし。量るに汝がごとき匹夫、縱ひ幾千萬の賊兵を引き來る共、いかんぞよく我が天兵に敵することを得んや。早々今日を省て、死を朝家に順せよ。花榮これを聞き、笑を帶し言を下げていはく、願はくは總管某が分説を聞き給へ。某豈敢て朝廷に背かんや。唯彼劉高が故に、私の仇を以て世を逼られ、家あれども回りがたく、國あれ共入りがたし。かるがゆゑに、暫らく此山に入つて難を避、災を遁れんと欲ふのみ。仰冀くは總管明察あつて、某が逆臣の汚名を再び淨からしめ給へ。秦明が云く、汝猶自ら捉れに就かず、かゝる巧言を吐て他を煽惑んとするや。我今汝を生擒、朝家に一人の逆臣を除くべしとて、左右に命じ金鼓齊しく鳴さしめ、狼牙棒を揮て花榮を望み擊つて蒐る。花榮は却つて呵々と打咲ひ、罵つていはく、秦明汝は眼ありながら、善人を識認す劉高ごとき惡人を羽翼く、汝今皇帝の命を奉つて來りし官人なればこそ、我多く言を卑うして敬ひしに、汝は誤て我が怕をなして敬ふと思へり。今我汝に一棒を與へ、魂を消さしめんに、必ず一歩も逃ることなかれとて、棒を輪し馬を躍せて相迎へ、兩將清風山の下に在つて戰を交へ、一往一來勇を奮つて、恰も南山の猛虎北海の蒼龍、ともに勢ひを比べ鬪ふに異ならず。龍怒れば頭角崢嶸、虎戰ふときは爪牙躍閃。誠に一對の敵身方適の勇將ぞと、兩軍鳴を靜め見物し、手に汗を握つて勝敗を伺ふ。已に其戰五六十合に及びしが、更に贏輸みえず。時に花榮故意馬を回し、山下の小路を望んで逃走しかば、秦明怒つて、汝何國に逃がすべきぞとて、後に從ひ忙はしく追ひ來る。花榮其圖を窺ひ、急に棒を甲の上條に挿、左の手に弓を拈、右の手に箭を拔出し、打搭へて滿月のごとく拽て切つて放せば、其箭過たず、秦明が盔の頂に中つて、頭腦に響きこたへしかば、秦明大に驚き、速かに馬を回して引退き、未だ暫くもせざるに、再び又追擊せんと衆軍を進め跳來しが、小賊共は早盡く山陣に引回へりしかば、花榮も又徑路より山に上りたり。秦明これを見て、大に怒り、乃ち兵に下知を傳へていはく、盜賊等今我が兵に敵し戰んとする尤これを惡むべし。若し今日此山陣を踏破らずんば、さらに何れの日をか期さん。衆軍力を併せて山上に攻上るべしと、其身當先蒐ければ、諸軍大將の勇に倚て、おの〳〵勢ひ

を増し力を扶け金鼓一齊に打ちたて、一同に鯨波の聲をあげ、山をさして攻上り、段々に二所三所の山を繞り出で、猶も喚き叫び馳上る。其山の上より一時に檑木砲石を雨のごとく打ち下しければ、官軍忽ち途を失ひ、木石に中て死する者五六十人に過たり。これによつて進退こゝに谷り、諸軍漸々山を下り、再び引き退くを見て、秦明は原來短氣急性の生質なれば、大いに怒りてさらに忍ぶに勝ず、復た道を求めて山を上り、賊徒共一人も餘さず、都て滅し盡さんに諸軍我爲に力を用ひ、進めや〳〵と再び兵を引いて山を繞り、彼よ此よと道を尋ねんとせしに、西山の邊に金鼓の聲大いに響き、林の中より一對の紅旗閃き出でければ、秦明これを見て、急に兵を引いて馳向ひし處に、金鼓の聲も忽ち止み、紅旗も亦見えずなりぬ。秦明此處の路をみるに、都て樵夫等が往來する砍柴路にして、唯一節も大路なし。況んや此邊の路は盡く亂木亂石をまじへて、路口を塞ければ、さらに上るべき樣なかりけり。秦明三軍に下知して、路口の木石を取らしめ、道を開かんとせし處に、一人の哨者來つて秦明へ申て云く、東山の邊に金鼓の聲大きに響き、一彪の兵紅旗を閃して馳せ出でぬ。秦明是を聞いて急に兵を引き、飛ぶがごとく東山に馳せ至り、賊を一人も漏さず、ことゞく討取よと下知して、四下を顧るに、金鼓も鳴らず紅旗も見えざりしかば、秦明又三軍を率し四面八方を搜し繞る所に、此邊にも同じく幾筋の砍柴路ありけれ共、是又多く木石を亂して通路を塞てあり。かゝる處に又一人の細作の兵來り、西山の邊に又金鼓を鳴らし、紅旗の兵出來りぬ。秦明聞きもあへず、再び鞭を揚馬を跳せ、西山の邊に跑來り、乃ち諸軍と俱に此處を見るに、又紅旗もみえずして、一人の敵兵もあらず。秦明は元來短氣急性の大將なれば、敵兵の見えざるを憤り、牙を咬齒を切て恚れる兩眼日光のごとくなるに、又東山の邊に金鼓の響き大に起り、萬千の軍馬一齊に進む勢ひ聞こえしかば、秦明限なく怒り、此回こそ必定賊らが隱れ所を索得て、一々これを討るべし。諸勢いよ〳〵力を竭せと下知を傳へ、又も馬の彊繩を挽回して、東西へ馳せ來り、四方を跑繞て山兵を尋ぬれども、賊兵も紅旗もさらに影も形もなかりけり。秦明ます〳〵怒りに勝ずして云く、好し遮莫、我今道を求めて山に上り、終に强賊らを活捉んものをと、又三軍を二手に分此かしこに馳せて、路を尋ねしめける處に、西山の邊に又人馬の音聞えしかば、秦明は熬へぬ烈士にて又馬に策うち西山に馳せ至り、遍く四方八面を搜して、賊兵を需れども、只一人の影もあらざれば、秦明今は自ら大に吼り、忙はしく兵に下知し亂木亂石も引退るに及ばず、直ちにこれを踏越え〳〵、せひ山に上らんとせし處に、一人の兵進出て申しけるは、此邊の路は都て樵夫等が往來する徑路にて、山陣へは通ずまじ。況んや木石多く交へ積て路口を塞ぎければ、恐らくは此を越えんこと難かるべし。然らば勞して功なからん。只東南の方にこそ一筋の大路ありと聞き及びぬ。宜しく彼所より攻上り給へ。若し只管此處より上らんとせば、かならず過ちあるべし。秦明が云く、東南の方に若し果して大路あらば、今宵の內に諸軍を引いて進み上るべしと、遂に諸軍を引いて東南の方に馳せ來れば、はや紅日も西に傾き晩に及ばんとす。人馬齊

しく大に疲れ、やう〳〵山下に至り、まさに陣を取りて、一同食をなさんとするに、山の上に火把亂れおこり、金鼓亂れ響き、鬨の聲天に震ひ、砲の音地を動かす。秦明これを聞いて、怺り得ず大いに怒り、自ら四五十騎を引いて山に跑上り、纔に半里許り馳する處に、林の内より亂箭雨のごとく射出し、官軍忽ち五六騎箭に中て馬より眞倒に落ちて死しにけり。こゝに於て諸勢進みかねしかば秦明も止ことを得ず、再び山の下へ引き退ぞき、諸軍ひたすら飯を吃し、まさに火を擧し處に、山の上に又八九十の火把一連に揮照し、馳せ下る軍勢あり。秦明急に兵を引いて、相迎へんとすれば、火把はや一時に滅て、齊しく靜まり何の音もなし。此夜は月光ありながら陰雲に遮り掩はれ、唯朦々朧朧として十分明らかならず。秦明此光景を見て、怒り甚しく、諸軍に下知し火炬を點させ、樹木を盡く燒拂はせんとするに、俄に山の上に鼓笛の聲大に響きしかば、秦明馬を進め又も山を馳せ、乃ち頭を擡げ山の頂を見れば、二十四五の火把を照し、宋江悠然として酒を飲んでありの。花榮又安々と傍に陪侍して酒を酌めり。秦明此體を見て、忽然として怒り骨髓に徹し、馬を山下に勒へ、大音聲に呼ばはり罵つて、只顧惡口せしところに、花榮呵々と大に笑つて答へけるは、秦統制汝再三無益の怒りを起さんより、先づ本陣に回り自ら保養を加へ、宜しく氣力を堅固にして明日の參會を待て、毎日今日のごとく費骨折しめんも不便なれば、明日は我決して汝が心窩の上に、三百の明窓を開べきぞ。然らば汝が一命は只今宵を保んのみ、早々回り酒宴を設け、冥途の旅出留別に三軍を聚め、宜しく飲酌を催せと、猶いまだ云ひも罷らず、聲を放つて絶倒す。秦明是を聞いて臍を咬み兩眼を睜開き、恰も奔雷のごとく吼り喚て云ひけるは、花榮汝敢てかくのごとく我れを欺くや。汝もしよく我が胸の上に三百の明窓を開んとならば、何ぞ必ず明日を待んや。宜しく今早々山を下て雌雄を決せよ。汝もし我を恐れて山を下らずんば、汝が先祖の武名此時に當て穢るべきぞ。花榮冷笑て、汝今日東山に走り西山に馳せ、嘸身體も疲たらんに、我縱ひ今汝を殺すとも、疲れたる者に勝なば聊功名とするに足ず。人を食ふ惡馬も斃ては誰れか策たん。汝疾回て明日來れ。今宵は我汝が一死を饒し、明日まで命を慥に預るぞ。秦明此言を聞いて益大いに狂ひ、只顧山下に在りて、唾ばきし罵り、已に路を尋ね跑上らんと思へ共、又暗に花榮が弓箭の術細かなるに怕れ、只山坡の下に馬を勒へ、再三惡口しける處に、忽ち親方の諸軍大いに噪動しければ、秦明急に馬を回してこれを見るに、山の上より火炮火箭煌を飛ばせ、雨のごとくに打ちかけ、又背後の方には、三四十の小賊一處に群り、弓弩齊しく發して、散々に射たりしかば、官軍大いに亂れ、悉く皆鋒を倒にして逃走り、山の傍の深坑の内に身を躲れて這々命を脫れぬ。此時已に三更の前後なり。諸の軍馬弓箭を持ち、坑の内に避けて纔に息を續んとせし處に、坑の四方より俄に大水發り、逸參に坑の内に滾入しかば、諸の人馬盡く溪の中に亂れ入り、皆々命を免かれんと欲ひ、岸の上に上りし者共は又都て小賊らがために鈎索に纏れて擒となり、溪の内に在りし者共は、皆々水に溺て死しにけり。此時秦明は怒れる氣天に衝て、吼る聲地に透り、獨自

ら小路に倚て馬を飛ばせける處に、纔四五十歩に至つて忽ち馬人共に陷坑の内に眞倒に落ち入りければ、兩邊の伏兵一齊に並び起り、つひに鈎索を用て秦明を搭住、乃ち坑の内より拽上て、衣甲を剝取、頓て高手小手に綁めて清風山に引回りぬ。這ら陷坑等都て宋江と花榮とが計にて、晝の戰にも小賊等を東西の兩山に藏し置き、或は西山に金鼓を鳴らして秦明を誘引し、或は東山に紅旗を現して秦明を僞引、かく敵を賺し兩山の間を數遍奔走せしめけるゆゑ、寄手の人馬大いに疲れ、遂に溪の内坑の中に躱れ、弓箭を避けんとせし處又四方より水を流しかけ、五百の官兵過半を水に淪し死なしめ、其餘百六七十人の官軍共はことゞく擒となり、七八十疋の良馬は皆奪取つて山陣に牽けり。小賊共、秦明を引いて廳前に至りしかば、花榮忙はしく出迎へ、親自秦明が綁の索を解き、則ち廳上に扶け上り、身を翻して拜をなしぬ。秦明これを見て、忙はしく禮を還して云ひけるは、我は是擒となりし者なれば、身を臊子に切まれても死すべきに、何ゆゑ却つて我を拜し給ふや。花榮恭しく跪ていはく、山兵等都て貴賤を見分くること能はず、誤て總管の尊威を冒せり。願はくは罪を免し給へとて、頓て衣服を將て、秦明に着さしめければ、秦明深く謝し畢て、又花榮に問うていはく、清風山の主三人の頭領は、我原來これを識認れり。只しらず第一位の椅子に座し給ひぬる豪傑は、是何等の人なるぞや。花榮答へて、彼豪傑は原鄆城縣にて押司の職をなせし、宋江と云ふ人なり。其次三人は總官も亦これを識認たまひつらん。是則ち燕順、王英、鄭天壽なり。秦明がいはく、山陣の三傑は先きにも云ふごとく、我もと是を識れり。彼押司宋江と云ひ給ひしは、山東の及時雨宋公明と云ふ人にはあらずや。宋江先づ急に答へて、某乃ち宋公明と申者なり。秦明聞きも敢ず、忙はしく下拜をなして云く、押司の芳名を聞きしことは、恰も雷の耳に轟くごとくなりし。今日何の幸ひにや、尊顏を覩奉ること誠に欣躍に堪ざるなり。宋江も又忙はしく拜を還し、大禮を行はんとしけれども、兩足不自由にして、殊更難義に見えしかば、秦明又問うて云く、押司は貴足を痛め給ふと見及べり。何爲拜を還し給ふに及ばんや。しらず貴足を痛め給ふは、疔瘡にても生じけるにや。若し然らば、某幸ひに妙膏を以てこれを癒しまゐらぜん。宋江が云く、某が賤足を痛めぬるは良以あり。いざ語り聞け申さんとて、鄆城縣にて閻婆惜を殺したることを始めとして、前後のこと一々詳に語り、又向に劉高に擒れ、兩足を痛く策れ、終に皮開肉綻れ、今に痛疼止ざるとて、劉高夫婦が不善の事具さにこれを告げければ、秦明此言を聞いて大いに悔て云ひけるは、某只一方の言をのみ聞きしゆゑ、多く辜なき人を惡みぬ。願はくは、列位某が過ちを宥し給へ。且某は急に馳せ回つて、慕容府尹に此ことを告げ知らしめ、再び宜しく商議をなすべし。燕順が云く、總管先づ五七日は山陣に滯留し給へとて、早賊等に命じて牛を殺し馬を宰しめ、大いに酒宴を設け飲酌を催し、又彼活捉たる官軍にも多く酒肉を惠みて食せしめけり。此時秦明數盃の酒を酌畢恭しく身を起して云ひけるは、衆位の豪傑いよいよ肯て某が一命を助け給はんとならば、某が彼衣甲、馬、軍器等を還し給ひて、青州府へ回らしめ

給へ。燕順が云く、總管の言差へり、總管肇五百の兵を引いて、青州城を打ち出で給ひ、今敗軍に及んで、只一騎回り給ひなば、必定府尹これを罰せられん。まづ宜しく山陣に逗留し給へ。尤も馬を歇め給はんには足るまじけれ共、權く此處に在つて某らと心を合せ、志を同じうし給へ。然らば互に力を一ツにして、當世の賊官らが、專ら民を剝で集めぬる不義の財を奪ひ取つて、公にこれを分納し、共に浮生を樂しまば、彼大頭巾等が下に在つて、差辱を被らんよりは、猶莫大に强ならめ。願はくは總管時を察し意を決し給へ。秦明是を聞いて忽ち廳を下つて云ひけるは、某は是當朝大宋の臣なれば、死すとも又大宋の鬼とならん。況んや朝廷某を擧給ひて兵馬總管となし、統制使の職を兼しめ給ふ。是則ち朝廷の聖恩深き所なり。某いかんぞ此宋朝に背いて山陣に留らんや。若し列位これを惡みて某を殺さんとならば、某樂しみ甘んじて死に就べし。某列位に隨順せんこと、決して承允致すまじ。望らくは明らかに是を察し給へ。花榮これを聞いて、忙はしく秦明を扶け、再び廳上に上り、乃ち座をなさしめて云ひけるは、總管怒りを憩て我が一言を聞き給へ。某も又是朝廷の舊臣が孫なり。然れども無實の罪を被りて世を逼られ、身を安立すべき所なきが故、已ことを得ずして今此山陣に跡を留め、乃ち諸〻の豪傑と共に强盜の頭領となりぬ。是皆一命を全うして、再び朝廷の聖恩を報じ、以て新たに先祖の家風を振はんが爲なり。總管已に心を決し、山陣に留まり給ふまじきとならば、我が輩豈敢て再三留め申さんや。先づ心を寬げて酒を酌み給へ。酒宴了りなば某速かに衣甲馬等を還しまゐらせんまゝ、必ず尊慮を安んじ給へ。秦明いかんぞ肯て心を安んずべき。只頻りに回へらんことを乞ければ、花榮又いはく、總管昨日より多く神を勞し、力を費し給ひぬる上は、嘸辛苦たらん。然れ共總管は原强勇の大將なれば、十分のこともあるまじけれども、只痛むらくは彼馬なり。一日一夜東山に跑、西山に馳疲れ、旁いまだ喂も養はざれば、焉んぞよく今日の用に中らんや。且よろしく飽まで馬に秣を飼、其後山を下つて青州に回へり給へ。秦明これを聞いて心中實にもと思ひ、漸漸思慮を安んじて座を定め、又盃を擧て酒を酌みければ、五人の豪傑輪番相勸め、酒闌に至りける處に、秦明は疲と云ひ、殊更五人の豪傑に勸められしかば、就中大いに爛醉しける故、花榮自らこれを扶けて帳中に入り、遂に宜しく歇ましめ、各同じく廳を出でて各己が房間にぞ歸りけり。扨秦明は其夜熟く睡り、翌日辰の刻に起きて山を下らんと欲し、諸〻頭領に別れを告げしかば、宋江等再三留めて朝飯後に打ち立ち給へと云ひけれども、秦明は本短氣の人なれば、決してはや下るべしと頻りに辭しければ、諸〻の豪傑忙しく酒宴を設けて、秦明を欵待、頓て衣甲軍器を取り出して、これを還しける處に、秦明遂に衣甲を着し、軍器を提げ五人の豪傑に別れて山を下りしかば、宋江等五人の頭領相送つて山の麓に至り、則ち彼馬を小賊に牽せて秦明に乘しめ、互ひに依々として已に一別に及びけり。秦明は馬に乘り棒を拿、獨自ら清風山を離れ、飛ぶがごとくに青州に望て馳回り、幾十里許に至りしかば、はや巳の刻の前後なり。秦明馬上に在つて遙に對面を望み見るに、烟塵大いに

起つて、一人も往來する者なし。秦明甚だ是を疑ひ怪しみ、遂に城外に至つてこれをみるに、此處には原數百間の人家ありけるに、何ゆゑにや一宇も殘さず悉く燒盡し、猶且つ斬殺されたる男女の屍瓦礫場の上に横へて、其幾何と云ふ數をしらず。秦明此體を見て大いに驚き、忙はしく馬に策うつて直ちに城の邊に至り、大音聲に門を開けと呼ばはりて、正手の方を見るに、濠に架たる吊橋を高く拽起、城中には都て旌旗砲石檑木等を嚴密に備へ、若干の軍士衣甲の袖を連ねて充滿せり。秦明此光景を見て、心中益常ならず、又高聲に呼ばはり、早く吊橋を下して我を渡せと云ひける處に、城中に早く一人の兵秦明を見て、忙はしく攻鼓を打つて大いに喊び呼ばはりければ、秦明駭き、我は是秦總管なるに、何ゆゑ城内には入れずして、斯のごとく躁動するや。斯かる處に慕容府尹城樓の上に躍り出て、大いに怒り罵りて云く、汝反賊いかんぞかく羞恥を知らざるや。汝昨夜多くの賊兵を引來つて我が此城を攻、餘多の百姓を殺し若干の房屋を燒、今又來つて我を哄騙、此城門を開かせて城中に攻入らんと思ふや。朝廷も汝を重く用ひ給ひ、これまで疎略の御事少しもあらざりしに、汝は何ゆゑ朝恩を忘れ、義を負て朝敵とはなりたるや。我汝が謀反のよしを帝に奏聞せんため、今朝老早使者を都に馳せけるぞ。我必ず近々汝を捉へて骨を削り肉を切んで、天罰立處に思ひ知らせんぞ。秦明大いに驚き暫く呆れたるが、漸心を靜め、又大音聲に呼ばはつて云く、相公いかんぞ誤ち給ふや。某は是清風山の戰に打負、五百の兵悉く賊徒に殺され、某も終に活捉れ山陣に在りしかども、寸歩も出づることなく、今朝一命を脱れ再び回りぬ。昨夜は某清風山に在りけるに、何ぞ來つて此城を攻んや、相公宜しく僉議を加へ給ふべし。府尹益怒つて云く、我何ぞ汝が衣甲馬軍器等を識らざらんや。殊に城中の諸軍も、又皆汝が賊兵を引來つて人を殺し火を放ちたるを見屆けぬ。汝此上にも猶あへて抵賴んや。汝もし實に戰ひに敗れたるならば、五百の兵の内などか一人は逃回りて戰の動靜を報るものなからん、汝が僞たること、是を以て知るべし。汝今又こゝに來るは必定我を賺し城門を開かせ、急に進み入つて己が眷族を奪取らんと圖るなり。我豈汝が爲に誣れんや。汝が妻子は我已にこれを殺せり。汝もし全く信せずんば、汝に首を與へて見せしめんとて、頓て軍士に命じ、彼妻子が首を鎗尖に刺貫き高く挑げ出して、秦明に見せしめけり。秦明は原短氣の勇士なれば、妻子の首を見て忽ち怒り心頭より起り、其瞧眼は日月に異ならず。此時府尹兵に下知して、矢石雨のごとく投かけ射出させければ、秦明敢て分説するに及ばず、急に矢石を避けて跑開き、猶城外を繞て此邊を見るに、焰燒せし地面未だ餘火消えず、燼の消烟所々に起りぬ。秦明こゝに於て心神大いに繚亂し、只自害せんと欲ひて、再び馬を舊路に馳せ、わづか十里ばかりに至りし所に、忽ち林の内より五人の大將當先に進んで一彪の軍馬馳せ出でぬ。彼五人の大將は、乃ち清風山の豪傑、宋江、花榮、燕順、王英、鄭天壽なり。相從ふ小賊總べて二三百も有るべし。宋江馬上に在つて秦明に對面し、則ち身を曲めて云けるは、總管何故青州には歸らずして、只一騎何國に往き給ふや。秦明これを聞いて、自ら怒つて云

く、しらずいかなる奸賊の所爲やらん。昨夜我が形に假て此青州城を攻め良民を殺し、房屋を燒き、剩へ我が妻子を府尹が手に殺させぬ。我今家あれども奔りがたく、國あれども投がたし。天に上らんとすれば路なく、地に入らんとすれば門なし。我もし彼我が形を假粧たる奸賊らに尋ね遇ば、這狠牙棒を以て骨を微塵に打碎き、方に這恨を雪んに、尙未だ彼賊らを分明に知らざるこそ遺憾なれとて、眼を怒らし牙を咬で罵りけり。宋江此の言を聞いて、又云ひけるは、夫人已に殺され給ふならば、今更悲歎益あらじ。先づ宜しく怒りを息給へ。某自ら總管の爲に新たに媒をなし申さん。願はくは總管再ひ我山陣に至り給ひて、某が存念をも具しく聞き給ひ、兎も角も好るべき商議をなし給へと、再三諫めければ、秦明其言に服し、乃ち宋江等に從ひて再び淸風山に歸り、早く山亭の前に至つて馬を下り、諸〳〵豪傑齊しく山陣に入りけり。

論者云、此標目に夜瓦爍場に走と云ふは、秦明が似せ武者と思へば、此似せ武者が瓦爍場となしたる也。實の秦明が走りたるは、翌日晝なれば夜と云ふ處叶ず。且秦明が五百の軍勢戰死もあり。過半水に溺たれ共、百六七十人の官車山陣に生捉と成、此者共にも酒肉を惠むと有りて、翌朝秦明青州へ馳歸る時は、從ふ人も無唯一人歸りたるは、此官軍は山陣に捨置たるにや、不審と云々。且三國志に劉玄德の詞、妻女は衣服の如しと云ひしは、娶りたる毎に新に覺ゆるを云うて、薄情を好む義に非ず。秦明が妻府尹に殺されたる上は歎て益なし。新に媒せんとは愛情を捨たる詞なり。天下に高名の豪傑の言語にはあらざるべし。

四編卷之二

石將軍村店に書を寄す

霹靂火秦明は五人の豪傑とともに山陣に入しりかば、小賊ら已に酒宴を設け聚義廳の上に備へり。五人の頭領共に秦明を請て廳に上り、各〳〵讓りて、秦明を上座に座せしめ、五人一度に地上に跪て慇懃に禮を行なひければ、秦明忙しく禮を復し、同じく地上に拜伏す。宋江先づ言を開いて秦明に云ひけるは、總管必ず我輩を恨み給ふ事なかれ、昨日再四總管を山陣に留めけれども、意を決して留り給はざりしゆゑ、某一ツの計を設け、山兵等が内より總管の容貌に似たる者を擇み出して、足下の衣甲を着せしめ、又彼馬に乘しめ狠牙棒を持せ、直ちに青州城の正手を攻させ、多く軍民を殺しぬ。又燕順王英別に五十餘人を領して、副手の門に推寄、詐り呼つて秦總管が眷族を速に城外に送り出せ、もし然らずんば、忽ち此城を踏潰し、一片の平地にすべしと罵りければ、府尹大いに怒り、却て總管の夫人を殺せり。是則ち某ら總管一向家に歸んと欲給ふ念頭を、豫じめ先づ渴是を絶さんがため、斯計を行うて府尹が怒りを惹出し、乃ち府尹が手を假て尊夫人を殺さしめぬ。尤も不仁不義の所爲なれ共、只々いかにもして、總官を此山陣に留たく已ことを得ずして、かゝる詐の謀を施し畢ぬ。偖して願くは、總管某らが斯まで慕ひ敬ふの誠を察し給ひ、只曲て罪を免し給へ。然らば某らが幸ひ何事か是に過ん。秦明此言を聞き心中甚だ怒り、宋江等を厮併さんと欲ひけれ共、又却て熟〳〵想ひけるは、今彼等が所爲尤も毒惡たりといへども、原我を山陣に留んと思ふ好意より出し所なり。況や我今厮併さんとせば、必ず非命の死を遂て一生の豪傑武名益なく廢れなん。先づ曲げてこれを忍びんと、則ち怒を納めて云ひけるは、諸豪傑さまで我を山陣に止めんとの好意は、我も又深くこれを感激とす。されども我が妻子を府尹が手に殺さしめ給ふこと、甚だ以て不仁不慈なり。我悲歎の思ひ何を以て保んじ慰むべき。宋江が云く、某らもかくのごとき計を行なはずんば、總管豈あへて心を傾け意を投て我が輩と共に山陣に足を留め給はんや。夫人已に死し給ふ上は、空しくこれを悲み給ふとも益あらじ。幸ひ花知寨の妹は賢にして美なり。我此婚禮を主つて花榮が妹を總管に嫁せしめん。しらず總管我輩一點の眞誠を顧て、此義を承引し給はらんや。秦明此の時宋江等が他念なく、愛敬するを見て、方に心を安じ乃ち其議に應じけり。諸の豪傑こゝに於て大に悅び、遂に宋江を請て中央に座せしめ、秦明を左に座せしめ、花榮を右に座せしめ、燕順等三頭領は其次に座を列ねしかば、小賊ら噴て美酒佳肴を携へ廳上に設け、笛を吹鼓を擂て大いに酒宴を催しけり。扨又宋江は諸〳〵の豪傑に問うて、清風寨を擊んと其計を商議しける處に、秦明が云く、清風寨を打んこと極て易し。何ぞ必ずしも諸豪傑の心力を費さんや。幸ひ彼黄信は某が武藝の弟子にして、交り尤も

厚ければ、某明日先づ清風寨に馳て黄信に寨門を開かせ、又宜しく彼を諫め、我輩に降らしめ、則ち花知寨が眷屬をも取り出すべし。且又劉高が妻を捉へ、宋長兄の爲に仇を報い恨を雪ぎ聊以て進見の禮を表すべし。只しらず列位某が所存に從ひ給ふべきや。宋江大に悅び、總管もしいよ〳〵肯てかくのごとく計を施し給はゞ、莫大の幸ひなり。明日宜しくこれを行ひ給へとて、衆皆喜悅して酒を酌酒宴已に了ければ、其夜は各房間に入つて歇み、翌日早飯後より諸〳〵の豪傑甲を着し盔を戴き、結束嚴に裝ひ、秦明先づ馬に乘て山を下り彼狼牙棒を提て、飛がごとくに清風寨に馳來りぬ。時にかの黄信は嚴密に清風寨を守り、多くの兵を備へて晝夜緊しく防せけり。此日一人の兵黄信に告げて云く、秦總管唯一騎寨外に馳せ來て、門を開けと呼はり給ふ。黄信是を聞き忙しく馬に乘、直に門の邊に來て門外を望み見るに、果して秦明只一騎寨門の外に在り。黄信兵に命じ吊橋を下させ、門を開かしめ、自ら秦明を迎へて寨中に至り、直ちに大寨の公廳の前に至て馬を下り、兩人手を携て廳に上り、賓主の座已に定まり互に禮を叙畢りしかば、黄信先づ問うて云く、總管は何ゆゑ只一騎こゝに至り給ひしぞ。此時秦明清風山の戰ひに打負たる次第、ならびに山東の及時雨宋公明義を重んじ財を輕んじ、專ら天下の豪傑と交りを結び、さらによく人の危急を救ふゆゑ、人皆是を敬ふ。今此の人難を避災を脫れ、清風山に在り。我も此回禍を蒙り身を立て命を安んずべき所なく、宋公明が德を慕ひ終に清風山に入つて、宋江等と大義を結びぬ。足下は幸ひいまだ妻子もあらざれば、何の礙もなし。唯宜しく我言に從ひ、共に清風山に入て一處に豪傑をなし、彼文官等が欺きを免れ給はんや。黄信が云く、長兄今清風山に足を留めて宋江等と義を結び給ひしこと、誠に豪傑の交りなり。某豈あへて長兄の敎へに從はざらんや。扨かの宋公明の山陣に居給ふことは、曾て是を聞かざりしに、しらず、及時雨はいつの時清風山に來り給ひしぞ。秦明打笑て云く、汝先日清風山にて奪ひ取られし罪人彼鄆城虎張三と云ひぬるは、乃ち及時雨宋公明なり。其節本姓本名を隱して云はざりしは、閻婆惜と云ふ女を殺したることあれば、もし又此こと發んを恐れ、唯僞て張三と名を報たりしなり。黄信これを聞き大に悔て云ひけるは、某もし夢にだも宋公明たることを知りしならば、宜しく放ち免んずるものを、唯劉高が一片の言を聞て、已に義士を害せんとせしこそ恐なれ。今更後悔何の益かあらん。秦明が云く、汝もと宋押司を知らざりし事なれば、何ぞ再三悔るに及ばんと、兩人まさに公廳の內に在つて議論して居ける處に、忽ち一人の兵來り報じけるは、寨外に兩路の軍馬金鼓の響き有つて寄せ來りぬ。早々防ぎの備をなし給へと。秦明是を聞き、必定宋江等が人馬ならん。少しも驚くことなかれとて、黄信と等しく馬に乘寨門の邊にかけ來り、門外を望み見るに、兩路の軍勢はや近々と馳至りける。其一隊は宋江、花榮、又一路は燕順王英、おの〳〵百四五十人を引率せり。黄信これを見て心中に悅び、則ち兵に命じて吊橋を下し、寨門を開かせ自ら兩路の人馬を迎へ、寨中に進ませければ、宋江諸軍に號令を下し、一人の百姓一箇の寨兵をも傷はしめず、先づ南寨に兵を進め、劉高が眷族一

一都て斬盡せり。此時王英は自ら先づ劉高が妻を奪取しかば、小賊らは皆家内を搜し金銀財寶悉く奪取りて車に載、又花榮が妻子妹を轎に乘しめ、ならびに家財等悉く車に載せ、諸事全く調りしかば、諸の豪傑と再び清風山に馳回り、遂に山陣の聚義廳に於て會合しける處に、黄信頓て諸の豪傑と禮を叙、則ち花榮が次に座を定めぬ。此時宋江懇に花榮が眷屬を一軒の房間の内に歇しめ、又劉高が財寶を分ち、諸の小賊共にこれを褒美し、各欣々然として喜びけり。宋江又左右に問うて劉高が妻は今何れの處にありや。王英答へて、劉高が妻は某これを捉へ歸りぬ。此度は我に與へ妻たらしめ給へ。燕順が云く、汝に與へんことはすべからく商議を容て與ふべし。先宜しく彼を呼び出せ、我彼に遇て一言を云はん。宋江も亦云く、我また彼にまみえて問ふべきことあり。早々彼を呼び出さんや。王英これを聞て、乃ち劉高が妻を廳前に呼び出しければ、彼妻泣然と涙を浮べ、只顧饒し給へと叫びけり。宋江大に怒て云く、汝惡婦我向に好意を以て汝を救ひぬるに、汝なんぞ恩を仇となして我を害せんとはしけるぞ。汝今日天罰を蒙むり、再び活捕れ猶敢て分説有りや。燕順これを聞いて忽ち躍起て云ひけるは、これらの惡婦に對して何事をか問はん、只速に頭を刎て恨を雪んにはしかじとて、刀を拔てはや首を落しければ、王英これを見て大いに怒り、忽ち刀を揮て燕順に斬て蒐るを宋江等急にこれを諫めて、燕順此女を殺せしは良に理あり。汝彼女が毒惡なるを見ざるや。我向に汝を勸めて彼女を救ひけるに、彼却て夫劉高をして我を殺さんと圖りぬ。汝もし彼を留て身邊にあらしめば、畢竟損有つて益あらじ。我他日聰明の佳人を擇み出して配すべし、必ず早まつて兄弟の好みを壞ふことなかれ。燕順云く、王賢弟もしよく宋長兄の言を曉らば、彼女を殺したること尤も怨とするに足らず。若彼を饒して妻とせば、久しうして後必ず彼に害せらるべし。よろしく怒りを忘て我を恨ることなかれ。王英諸人に諫言せられ、唯默然として言ず。燕順又小賊に命じ、惡婦が屍を取り棄さしめ、頓て酒宴を設け飲酌を催し、其夜三更の左側に至て盃を收め、各まさに歇みけり。翌日宋江は黄信と同じく婚禮の主となりければ、燕順、王英、鄭天壽三人は媒となり、花榮が妹を秦明に嫁せしめ、一連に三五日酒宴を設け、山陣大に熱鬧けり。既にして又五七日を過しけるに、哨の小賊山に上り來つて宋江等に告けるは、青州の慕容府尹文書を朝廷に献り、秦明黄信花榮等謀反を企て清風山に陣柵を構るよし、奏聞するに依て、近々大軍を發し、清風山を攻破らんと風説專らなり。宜しく官軍を防ぐの計を施し給へ。諸豪傑是を聞き、各商議して云ひけるは、此山は原來小陣なれば、永く止らん地にあらず。若し京より大軍寄せ來て、四方を取り圍ば進退意に任せず、防戰叶ふべからず。若し一旦兵粮盡ば必定脱れがたからん、豫じめ先づ謀を定めば可ならんと、評議區々なる處に、宋江が云く、我已に思ふ所あり、諸豪傑の意に合んや。各是を聞き、長兄已に良計あらば速かにこれを告げ給へ。宋江が云く、是より南に梁山泊と云ふ地あり、方圓八百餘里、其中に宛子城蓼兒洼と云ふ最も堅固の要害あり。今晁天王と云ふ人、三五千の軍馬を集めて嚴かに水泊を守りける

ゆゑ、官軍共大に恐れ、敢て來り犯すこと能はず。我輩宜しく人馬を引て、梁山泊に上り、晁天王等と勢を合せて官軍を防ば、まさに保て恙なからん。秦明が云く、若かくの如き要害の地あらば、縱ひいく千萬の官軍來るとも、何ぞ憂る所あらん。只恨らくは我が輩を薦遣はす人なきに、いかんぞ無緣にして卒爾に往べき。もし往きたり共、彼又いかんぞ我が輩を留んや。すべからく有緣の人を求めて導を賴み往くべし。宋江笑を含て、彼生辰の禮物十萬貫の金銀珠玉の事、並に劉唐が持參せし書簡を閻婆惜に奪取れ、遂に止むことを得ずして、閻婆惜を殺したること、一々詳に語りければ、秦明大に悅んで云く、已にしからば、長兄は梁山泊の大恩人なり。若し事延引に及ばゝ不可ならん。早早此處を收拾めて、梁山泊へ赴くべしとて、乃ち其日商議を定め、山陣の金銀米錢十餘輛の車に載、又諸豪傑の眷族共を都て轎に乘らしめ、都合三百餘疋の戰馬を牽せ、凡そ五六百の小賊共を三手に分ち、路すがら言を詐て梁山泊を攻る官兵なりと稱へしめ、已に山陣に火を放て、房屋盡く燒拂ひ、宋江はまづ花榮と共に八九十の軍馬を領し、第一番に山を下りければ、秦明黃信も同く八九十人の軍馬を引て、第二番に山を下り、燕順王英鄭天壽等三人は二三百の人馬を率し、第三番に山を下り諸の豪傑已に淸風山を離れ、梁山泊へ急ぎけり。諸州諸府に許多の軍馬を備へ其防ぎ緊しかりけれ共、宋江等當先に大旗を持せ、旗の上に大字を以て收捕强賊官軍と書し故、敢て咎る族一人もなかりけり。されば已に五七日計馳ければ、青州を離れしこと甚だ遠ざかりぬ。宋江等三路の人馬其間わづか二十里ばかりを隔て、隊伍を堅固に列ねけるに、路を遮らるゝこともなく、はや對影山と云ふ處に至りぬ。此間は兩邊都て險阻の地勢なり。かゝる處に前山の內より金鼓の聲大に響きければ、花榮がいはく、前面には必ず强賊有べしとて、乃ち弓に箭を搭へ、急に一人の騎兵を後軍に遣はし、早々馳せ至るべきことを催促させ、宋江花榮先づ二十餘騎の軍馬を引て向ひ前み、半里ばかりに至て路を尋ける處に、忽ち一彪の人馬馳出でぬ。凡そ其人數百十餘人ばかりあるらんと見えて、紅旗を持せ年若の大將當先に進み來る。宋江等遙かに彼大將を見るに、頭には三叉の冠を戴き、身には團花の甲を着し、威風堂々として赤馬に乘り、方天戟を橫へ、大音聲に呼はりけるは、今日は必ず勝負を決すべきに、早く出よと云も罷らざるに、又山の背より一彪の兵馳せ出ぬ。其勢同じく百十餘人ばかりにして、年若の大將當先に跑來る。其裝束をみるに、頭には三叉の冠を戴き、身には鎧鋏の甲を着し、手には方天戟を提げ、白馬に乘り威風凜々として好き一人の豪傑なり。左右には白旗を風に飜して、金鼓をしげく打ち鳴らし、兩軍閧の聲を發し、已に陣勢を對しける處に、彼兩人の大將馬を近々と進めて、互に方天戟を輪し、各威を爭ひ鋒を交へ、一往一來祕術を盡し相戰ふは、龍虎の爭ひも斯あらんと思はれ、刺ば躲し刺るれば閃き、精神益盛にして鬪已に五十合に及べども、更に勝敗分たざりしに、宋江花榮は馬上に在て此戰ひを見て、大に感歎に堪へざりしが、花榮漸馬を近く寄せ、これを見るに、彼兩將戰ひ已に神妙に入りける處に、兩將が戟の上に附けたる號、一ツは金錢豹子の尾、一ツは金錢五

色の旗、遂に相攪れ扯分つこと能はざりしかば、兩將互に焦燥けり。花榮これを見て、忙しく弓箭打搭へ、豹子の尾を嚮て恰も滿月のごとく拽て兵と放てば、其箭忽ち豹子の尾に中て、根もとより射斷しかば、二本の戟忽ち雙に分れぬ。此時兩陣の軍士共一齊に聲を揚て譽にけり。彼兩將これを見て大に驚き、各々且戰を休て、直ちに宋江花榮が馬の前に馳至り、身を屈て云ひけるは、將軍の神箭人の及ばざる處なり。願くは大名を知らしめ給へ。花榮馬上に在て答へて云ひけるは、我が此義兄は則ち鄆城縣の押司たりし及時雨宋公明と云ふ人なり。我は又清風寨の知寨小李廣花榮と云ふ者なり。那兩人の豪傑此言を聞くと等しく、馬より跳下り恰も金山を推し玉柱を倒すごとく、身を翻して地上に拜伏し、共に慇懃に云ひけるは、兩位の大名を聞くこと久し、何の幸ひに今日尊顏を拜するや。宋江花榮これを見て、同じく急に馬を跳下り、兩人の大將を扶け起して問ひけるは、各は誰人なれば斯我が輩を敬し給ふや。望らくは尊名を告げ給へ。彼花團の甲を着たる大將先づ答へて云く、某が姓は呂名は方と號す。原潭州の者なり。某平生武藝を好み這方天戟を使ひ慣ひぬ。人皆某を稱して小溫侯呂方と申す。某向に藥種を運て山東に到りし處、商賣に本錢を失ひ、故鄕に歸ること能はずして權く先づ此對影山に足を留め、獨り自ら强盜の頭領となり、若干の人馬を集め、專ら家を打ち舍を刼して多くの金銀財寶を奪取、今日の營極めて豐なり。然るに此豪傑擯に此處に至て我此山陣を奪ひ取り、各二ッにして互に其一ッを守んと欲す、我肯てこれを讓らず。毎日戰をなすといへ共、いまだ雌雄を分たざれば此のごとし。今日天良緣を假し給ひ、及時雨の尊顏を拜し、殊更花將軍の神箭を一覽し、喜び望外に得たり。願くは向後教を垂給へ。宋江又彼鎧鐵の甲を着たる豪傑に問て云く、足下の尊姓大名はいかん。答へて某が姓は郭名は盛と號す。本西川嘉陵の者なり。某初め水銀の商賣をなし遍く諸州諸府を回りぬる處に、前年黃河を渡らんとして大風に船を翻され、這々一命のみ脫れしゆゑ、故鄕に回ること能はず、唯客路に流落て日を徒に過しぬ。某幼き時より我鄕の兵馬提轄に從つて方天戟を擧び、漸々これを練熟しぬ。人皆某を呼んで寒仁貴郭盛と云ひ慣せり。世間に沙汰しけるは、對影山に一人の豪傑來て强盜の頭領をなし、究て能く方天戟を使ひ熟せりとて、嚇怕るゆゑ、某これと武藝を試て方天戟の高下を比べ、もし我彼に勝ことあらば、山をも奪ひ取て我が住所にせんと思ひ、斯く毎日戰ふといへども、更に雌雄を分たざるなり。今日上天佳緣を賜うて宋押司の高風を接へ、且つ花將軍の神箭を一見し、大悅雀躍のみならんや。兩公もし某が卑賤を厭ひ給はずんば、某あへて兩公の下風に順ふべし。宋江大に悅んで云く、我今兩豪の爲に和睦のことを調んに敢て承知あるべきや。兩人の豪傑是を聞て大に悅び、早速領承に及びし處に、後軍の人馬盡く皆已に到りしかば、各悅んで一々對面し、呂方先づ諸の豪傑を請て山陣に上り、牛を殺し馬を宰しめて大に酒宴を設け、飲酌已に半夜に至つて罷りければ、其夜は衆皆呂方が山陣に休みけり。翌日郭盛も又席主となつて、酒宴を設け諸の豪傑を欵待しけり。宋江やがて彼兩豪を諫め、同じく梁山泊に誘引

しければ、兩人の豪傑大に悅び、早速其諫めに從ひ各〳〵人馬を聚め、財寶等を收拾め用意を調へ、山を下らんと商議する處に、宋江が云く、權く先づ兵を起すことなかれ、我れ今數百の人數を引て梁山泊に赴ば、彼地の哨の者共我が假旗の文字を見て、誠の官軍と思ひ、急に馳て晁天王に報せん。是忽ち一騷動に及ぶべし、然らば我輩彼地を鬧しむるに似たり。我は先づ燕順と共に、先に馳せて梁山泊にかくと告しらせん。足下らは都で後より進み、猶三手に分れ來るべし。花榮秦明が云く、長兄の言尤も可なり。既に斯くのごとくんば、長兄は速に燕順を引て先に往きたまへ。我が輩は後より進發すべし。宋江此時燕順と俱にわづか十餘人を從へ、馬上にて路を行くこと已に兩日にして、此日午の刻に及んで小賊共甚だ疲れしかば、宋江是を憩しめんと欲し、燕順と共に酒店を尋ね求め、馬を下りて酒店の內を望み見るに、先達て一人の大漢子店の內の大座の上に座しけるゆゑ、宋江此漢子をみるに、頭には猪嘴巾を戴き身には皂袖衫を着し、腰には白搭膊を結び足には八答鞋を穿、座の傍には短棒を置きぬ。凡そ身の丈八尺計にして眼の光は恰も明星のごとくなり。宋江先づ酒店の小厮を呼んで云ひけるは、我が同行の者多人數なるに、大座を借て座せしめんや。小厮が云く、此の事極めて易しとて、宋江燕順を延て內に入りければ、宋江小厮に命じて云く、我が家人等もこと〴〵く此處に呼び入れて酒を飲しめよ。小厮答へていはく、前面に猶大座あり、彼所にて酒を飲しめ申さんとて、前面に走り出で、宋江が家人共をみるに盡くみな爐の邊に在りければ、小厮頓て彼先達て來りたる漢子に對し、貴客の座し給ひぬる大座には、此多人數の客を座せしめん、貴客は宜しく小座に移り給はんや。彼大漢子甚だ焦燥て我は是先に來りし者なるに、何ぞ後より來たる者に座を讓らんや。我決して座を移すまじとて、大に小厮を白眼けり。燕順此體を見て、宋江に對して云ひけるは、長兄彼漢子が言を聞き給ひしや。甚だ以て無禮と思はる。宋江が云く、彼無禮をなさば、彼に任せ無禮をなさしむべし。何の咎るに足らん。燕順是を聞き、自ら忍び居たる處に、彼漢子又宋江燕順を見て、一向あざ笑ひけるに、小厮猶慇懃に彼漢子に對して云ひけるは、願ほくは貴客某が爲に座を換給ひて某に商賣を遂しめ給へ。彼漢子大に怒きて、汝なんぞかく人を欺くぞ、我れ此座を換さしめん人は當世に三人とはよもあらじ。汝無益の言をいはんより、宜しく嘴を閉ぢて聲を出すことなかれ。若し再び言を以て我を犯さば、此拳汝を饒すまじきぞ。小厮が云く、我かつて貴客を犯さゞるに、何ゆゑ斯のごとく罵り給ふや。彼漢子彌怒て云く、汝猶聲を側るや、必ず拳を請て後悔すな。燕順これを聞いて怒りに忍びず、忽ち聲を放て呼りけるは、汝は何者なれば再三無禮を云ふや。必ず我が怒りを惹出して悔ることなかれ。彼大漢子大に怒り、傍に置たる棒搶取躍出て燕順を睨て云ひけるは、我れ自ら小厮を罵るに、汝これに干て我を犯すはいかん。我普天の下に於て唯兩箇の人に讓るのみ。若し此兩人を除きて其餘の人は都て我が脚底の泥のごとし。汝無用の威を振て、災を受ることなかれ。燕順大に怒り、急に凳を取て只一打と跳出ぬ。宋江は暗に彼漢子の言の俗ならざるを聞て、心中に

愛し、忙しく走り出で、兩人が中に身を横たへ諫て云ひけるは、兩人必ず手足を動すことなかれ、我先づ旅客に問はん。汝が今云し普天の下に於て、只兩箇の人に讓るのみとは誰をさして云ふぞや。彼漢子が云く、我もし彼兩人の名を云はゞ、汝も必定大に驚くべきぞ。宋江が云く、願くは其兩人の名を聞ん。彼漢子が云く、汝頻りに聞んとならば、我敢てこれを聞しめん。兩人の内一人は乃ち滄州横海郡の柴世宗の孫小旋風柴進、柴大官人と云ひ慣す人のことなり。宋江是を聞て暗に頭を點き、乃ち再び問うて云く、又今一人は誰なるぞ。彼漢子が云く、彼一人の名を云ふべき間、汝かならず恐懼して眼を眩すことなかれ。此人は是名は天より高く德は地よりも厚し。乃ち鄆城縣の押司山東の及時雨宋公明と云ふ人なり。定めて汝らも聞き及びつらん。宋江是を聞て燕順を顧み、暗に唉を含みけり。燕順はや凳を棄てゝ怒を息ければ、彼漢子又曰く、我は今云ふ兩人だに除きなば、縱ひ當朝の大宋皇帝たりとも、又是を怕じ。汝何ゆゑ凳を棄けるや。宋江が云く、汝怒りを息よ。我且汝に問はん。此兩人は我爲には原來朋友なり、汝は又何れの處にて此兩人に遇けるぞや。彼漢子が云く、汝既に此兩人を知たるならば、實に語るべし。前年我れ柴大官人の館に四五ヶ月逗留して、柴進とは尤も親しけれども、及時雨には未だ對面せざるなり。宋江が云く、然らば汝は未だ宋江には遇ざるよな。彼漢子が云く、我一ツの事有て、今急に宋押司の居給ふ所に尋往んと欲す。宋江問うて云く、汝は何等のこと有て宋江を訪ふや。彼漢子が云く、宋押司の弟鐵扇子宋清我を賴で、一封の書簡を寄せぬる故

これを屆ん爲なり。宋江是を聞て大に悅び、忙しく向ひ進んで云ひけるは、諺にも緣あれば千里來りて相見え、緣なければ面を對して相逢ずと云ふは、果して其言のごとし。其宋公明とは乃ち某がこゝとなり。彼漢子これを聞て大に驚き、忽ち地上に拜伏して云ひけるは、今日は我が爲には大吉辰にて、想はず長兄の尊顏を拜し、大いに平生の渴想を慰めぬ。もし天此良緣を假し給はずんば、空しく孔太公が館に尋ね行くべきに、此處にてまみえ奉ること、誠に莫大の大幸なり。此時宋江彼漢子が手を携へ内に入り、則ち問うて云ひけるは、足下の大名は何と號し給ふや。彼漢子答へて云く、某姓は石名は勇と號す。原大名府の者なり。某常に博奕を以て過活とす。人皆某が諢名をつけて、石將軍と稱ふ。某前年賭博の上にて爭ひを惹出し、只一拳に人を打殺して故郷を逃出、直ちに柴大官人の館に身を躲して難を脫れぬ。世間の人多く長兄の大名を吹噓して德を稱するを聞き、某大いに長兄の高風を慕ひ、這般特々鄆城縣に馳て長兄を訪ひぬる所に、長兄も又事を惹出し給ひ、他郷に出で給ひしと聞き、甚だ憂に逼りぬ。然れ共令弟宋清公に對面しける處に、宋清公いはれしは、長兄は白虎山孔太公が館に居給ふ間、若し某彼所に尋行ば幸ひ急事の書簡を寄すべきとの事なりしゆゑ、某乃ち其の書簡を携へて孔太公が館へ尋ね往んと思ひ、まさに今此處に至れり。宋清公再三申されしは、何やら急用ある間、長兄縱ひ何等の事有りとも、必ず一刻も早く回り給へとのことなり。宋公此言を聞て心中に疑ひ、又問うて云ひけるは、足下我が家に幾日逗留有りけるや。又かつて我父に遇給ひぬ

るや否や。石勇答へて云く、某只一夜貴宅に歇しかば、尊父宋太公にも終に見えざりしなり。宋江又此回梁山泊に上らんとする次第詳に語りければ、石勇がいはく、某向に柴大官人に離れてより以來諸州諸府に徘徊して長兄の仁名を聞しこと、恰も雷の耳に轟く如くなり。這遭長兄梁山泊に入り給ふならば、某をも携へ往き給はんや。宋江が云く、此の事尤も安し。先づ宜しく燕順に對面し給へとて、頓て燕順を呼んでまみえしめ、則ち主に酒を求めて暫く飲酌に及びけり。此時石勇宋清が書簡を出し、宋江に渡しければ、宋江是を接り、先づ上包をみるに逆に封じ、曾て平安の二字なきまゝ、甚だ心中疑ひ忙しく披き讀むに、其書に父宋太公、今年三月五日に病死あり。然れども猶喪を停て家にあらしめ、未だこれを葬らず。長兄早々歸り給ひて、共に喪を行なひ宜しくこれを葬り給へ。專ら長兄の歸り給ふを待のみなりとありければ、宋江これを讀みをはり大に驚き、忽ち聲を放つて再三哭悲み、涙は袂を濕しけり。燕順石勇齊く諫んとせし處に、宋江哭の餘り、遂に眼を眩し地上に倒れければ、燕順石勇大に慌悵、急に水を灌ぎ口に入れ、漸々甦醒しめたり。此時宋江涙を拭て云ひけるは、兩人の賢弟某が一言を聞かるべし。我聊寡情薄意を以て云ふにはあらず。實は只一人の老父ありしゆゑ、獨りこれのみ心に懸りけるゆゑ、常に寢食を保せざりしに、這遭終に死去ありしが、宋清禮を我に讓りて擅にこれを葬らず。專ら我回るを待ちて、兄弟同じく禮を盡し共に葬らんとなれば、我宜しく急に回らずんば有べからず。足下らはまづ梁山泊へ上り給へ。燕順諫めて云く、尊父の逝去に依て家に回らんとならば、重て梁山泊に上り給ふことも有まじければ、我輩再び長兄に會合せんこと極めて難かるべし。世上の父母都て死せざるはなし。先づ心を寬げ給ひて、某らを梁山泊に引きつれ給へ。已に其期に至りなば、某もともに長兄に從て鄆城縣に回り、宜しく出喪の儀を調ふべし。古の語にも蛇頭なければ行かずと申なるに、長兄もし此より回り給ひなば、我輩のみいかんぞよく梁山泊に上らんや。晁天王等も又いかんぞ敢て快く我輩を留めんや。願はくは長兄明らかにこれを察し給へ。宋江が云く、我もし足下等を引きて、梁山泊に上り而して後家に回らば、許多日の差あり。是則ち孝を缺に似たり。千里にして喪に走り難に走るは、子たり臣たる者の據なき天理なり。我只一封の書簡を修へて、備細を晁天王に云ひ遣はすべき間、汝宜しく此書札を携へて石勇と共に先づ梁山泊に行るべし。我れ今老父の死去を聞しかば、日を過すこと年のごとし。已に眉を燒の急に遭、いかんぞよく日を延んや。此上は我れ獨り自ら連夜に馳せて一刻も急に家に回らん。必ず誤て我を怪ことなかれ。燕順石勇再三留しかども、宋江終に留らず、頓て紙筆を索て梁山泊への書簡を修へ、乃ちこれを燕順に與へて收しめ、はや打ち立つべしと急ぎしかば、燕順が云く、長兄先づ暫く待給へ。秦總管花知寨も小刻此處に至るべきに、再び相見の上、發足し給ふ共何の遲きこもかあらん。宋江が云く、何ぞ再び相まみゆるに及ばん。梁山泊へは、我が書簡だに携へなば、曾て異議あらじ。汝兩人我が爲に宜しく諸豪傑へ言を傳へらるべし。我今燃眉の急に遭只一歩も早く家に

回り、老父の喪を勤んと欲す。必ず他日の參會を期すべし。互に悲なからん事こそ專要なれとて、遂に酒錢を償しめて酒店を出で、宋江又自ら乘し馬を石勇に與へて云く、汝は原來馬なければ、宜しく此馬に乘て梁山泊へ馳行るべしとて、又三人手を携へ涙を泣然再三依々として別れを惜みしかども、宋江今は已ことを得ずして、遂に燕順石勇に別れ、直ちに故郷へと馳行けり。されば燕順石勇思はず宋江に別れ大に愁へ、漸四五里許馳せて旅宿を求め、其夜はこゝに獄で後軍を待ちけり。翌日辰の刻秦明花榮諸〳〵の人馬悉く此處に至りければ、燕順石勇これを迎へて相まみえ、宋江此度父宋太公の死去故、遂に歸郷したること詳に通じければ、諸の豪傑燕順を怨みて云ひけるは、足下は何ゆゑ宋押司を留めざりしぞ。宋押司歸り給ふ上は、我輩梁山泊へ行くこと能ふまじ。石勇分説して云く、宋押司這次宋太公の死去を聞き給ひて、已に自殺をも遂給ふべき模樣なりけるに、我輩いかんぞ能く留むることを得んや。必ず誤て我ら兩人を恨み給ふことなかれ。猶幸希に宋押司一封の書簡を遺し云ひ給ひぬるは、此書札だに梁山泊に携へなば、晁天王ら必定我輩を山陣に留めん間、先づ早早梁山泊へ馳行けとのことなり。花榮秦明其書簡を見、乃ち諸人と商議して云ひけるは、我が輩已に途中にあり。回るにも又回られず、散にも又散れず、進退兩ながら難し。只宜しく宋押司の書簡を携へて、先づ梁山泊に上るべし。もし晁天王ら肯て留めずんば、別に又商議有べしとて、總て九人の豪傑兵を一所に合せ、數百の人馬漸く梁山泊へと進みけり。

小李廣梁山に雁を射る

偖も諸〳〵の豪傑梁山泊へ入らんとて一ツの大路を求め山に上り、已に蘆の内を過らんとせし處に、忽ち水面の上に金鼓の聲大に響しかば、秦明ら諸〳〵の豪傑これをみるに、山に漫野に遍く色々の旗を建てならべ、水泊の中より二艘の快船を漕來り、當先に進みぬる一艘の上には、三五十の小賊袂を連ねて群り乘り、船頭に一人の豪傑凳の上に高座せり。是則ち豹子頭林冲なり。後より進む一艘の船の上にも、又三五十の小賊群り乘て、船頭の凳に高座するは、是れ赤髮鬼劉唐なり。此時林冲先づ秦明等が人馬を見て、忽ち呼はり吼て云ひけるは、汝らは何れの州より來れる官軍ぞや。敢て我輩を捕へんとこそ思ふらん。去來汝等を一々殺して、我此梁山泊の利害を知らしめんと罵りける處に、秦明花榮等忙しく馬を下り、岸の邊に立注り、乃ち答へて云ひけるは、我輩皆官軍にあらず。山東の及時雨宋公明の書簡を携へ、山陣に加らんことを願ふ者共なり、必ず疑ひを起し給ふことなかれ。林冲が云く、もし果して及時雨宋押司の書簡を携へ給ひなば、須く前面の朱貴が酒肆に入つて、先書簡を山陣に遣はし見せしめ給へ。此上にて宜しく相見すべしとて、則ち青旗を把て、只一麾招きける處に、蘆の内よりはや一艘の小船漕出けるが、船の上には三人の小賊あり。一人は船を守りしかば、二人は岸の上に跳上り、頓て秦明等衆人を引いて、朱貴が酒肆を望んで馳ける處に、水面に二艘の哨船と又一艘の快船漕出けるが、船の上に白旗搖動し、金鼓齊しく鳴しければ、二艘の哨船飛がごとく

に漕回り、行方知れず隠れけり。秦明花榮の諸豪傑此處の要害を見て、大に駭て云く、誠に希有の嶮所かな。官軍いかんぞよく此所を犯し得ん。我輩もし此山陣に足を留めなば、究竟禍を免かるべしとて、遂に彼二人の小賊に引れ、朱貴が酒肆に至りしかば、朱貴自ら出て秦明ら衆人を迎へ相見し、則ち書簡を乞ひ取てこれを見、頓て響箭を放て蘆の内に射入しに、はや一艘の快船箭の響に應じ漕來りたれば、朱貴書簡を小賊に與へ、先山陣に屆けけり。朱貴又小賊らに命じて豐に酒宴を設け、九人の豪傑を欵待、其夜は皆々朱貴が後廳に欵けり。翌日辰の刻に、軍師吳學究自ら山を下り、朱貴が店に至り、則ち九人の豪傑を請て一々相見え、各〳〵禮を叙了て來意を詳に問ひける處に、はや二三十艘の小船を漕來り、吳學究朱貴幷に九人の豪傑を請て船に乘しめ、諸の眷族其餘人馬迄船に乘しめ、諸船一齊に漕出し、直に金沙灘に至り、此處より衆皆岸に上りし處に、晁蓋は諸の頭領と共に此邊に出て秦明ら九人を迎へ、直ちに延て關を越え山を過て、陣中の聚義廳に至り、各皆賓主の禮を了りしかば、左の方には晁蓋、吳用、公孫勝、林冲、劉唐、阮小二、阮小五、阮小七、杜遷、宋萬、朱貴、白勝等の豪傑椅子を並べて列座せり。扨此白勝は原濟州の牢中に在りしかども、數月以前牢を越て逃出、直ちに此梁山泊に來りて身命を安んぜり。是本吳學究が計に因て、白勝遂に一命を脱れたりとかや。又右の方には花榮、秦明、黄信、燕順、王英、鄭天壽、呂方、郭盛、石勇が椅子を並べ、連り坐せり。總て二十一人の豪傑兩邊に相對し、座の中央に一爐の香を燒各誓ひをなし、笛を吹鼓を擂牛を殺し馬を宰しめ、大に酒宴を催しけり。此時秦明花榮宋公明が德を稱し、清風山にて劉高を殺したること、逐一明細に說話けるに、梁山泊の豪傑ひとしく是を歎ぬ。其後又呂方郭盛互に方天戟を以て鬪しを和談せしめ、且花榮戟の號、金錢豹子の尾を射斷たることまで語りけるに、晁蓋心中に未だ全く信ぜずして云ひけるは、花知寨若し果してかく弓箭の達人たらば、當山陣にも聊射藝の族あり。異日必ず射術の比試を一見すべしとて、又盃を執て相勸め、酒已に數遍順逆に巡列位醉を發しければ、諸の頭領等が云く、先づ山前に出て風景を遊覽し、再び來つて飲酌を催さんと、總て二十一人互に相讓て階を下り、直ちに山前に馳て四下の風景を一覽し、第三の關上に至り し處、空中に數行の賓雁嘹喨飛ければ、花榮是を看て暗に想道、先に晁蓋我が弓箭の覺えを信ぜず、改日比試せしめんと云ひけるに、今此飛雁の内其一ッを射落し、晁蓋等に我神妙の藝術を信服せしめんものと、心中に込め小賊等に問うて、一張の弓一枝の矢を乞ひ取り、晁蓋に對して長兄嚮に某が金錢豹子の尾を射切りたるを、全く信じ給はざる樣に見及びぬ。今空をみれば、屢旅雁飛渡れり。今又來らば第三の雁の頭を射て、尊覽に入んと欲す。若し萬一射損ずることあらば、必ず笑ひ給ふなと云も終らざるに、一群數十の雁列を亂さず飛び來る。忙しく弓矢打搭へ滿々と拽緊、ねらひは第三番目の雁に候ぞとて、漂と放てば、其箭過たず第三の雁を射貫て遂に山坡の下に墜にけり。小賊これを取て晁蓋に献りければ、晁蓋等是を見て盡く皆駭然入り、都て花榮を稱して神臂將軍と號せり。

就中吳學究再び讃嘆して、花將軍かく弓箭の達人たるに因て、人皆漢の李廣が神箭に比して、小李廣と稱しけれども、我今其神妙をみるに、猶李廣が上にあつて楚の養由基たりとも、いかんぞ能く花將軍の上に出ん。是則ち當山陣の福なりとて、此より梁山泊の豪傑等擧て花榮を尊び敬ひけり。此の時諸頭領再び廳上に回り入つて飲酌をなし、晩に至つて酒宴罷り、各退散して歇みけり。翌日晁蓋再び酒宴を設け、其坐位を議定し、秦明は花榮に三歳の長なれども、花榮は秦明には大舅妻の兄なれば、花榮に讓て林冲が次ぎ第五位に座せしめ、秦明を六位とし劉唐を第七位、黄信を第八位に座せしめ、阮小二、阮小五、阮小七が下に燕順、王英、呂方、郭盛、鄭天壽、石勇、杜遷、宋萬、朱貴、白勝と序、總て二十一人の豪傑一行に座を定め、大いに飲酌を開き、互にこれを賀しけるが、是より梁山泊いよ〳〵威勢を增、大船房屋鎗刀鎧甲頭盔弓箭旗等を造らしめ、防ぎを堅固に構へけり。扨宋江父の喪を聞て故郷へ歸り、思ひの外父宋太公は一點の病もなく、宋江却て禍に遭ふ次第、次の卷に明らかなり。

四編卷之三

梁山泊に吳用戴宗を擧ぐ

偖又宋公明は父太公死去の訃音を得て不慮に燕順石勇に別れ、故郷を望で連夜に馳回りし程に、日を累ねて故郷の村口に馳着たり。此所に張社長と云者が酒店に至てまづ此に憩しかば、張社長は原來宋江と知音なるが、宋江一向兩眼に涙を含、悅びざる色ありければ、乃ち問て云く、押司は已に一年半の餘、客路に在て故郷に回り給はざりけるに、今般再び回り給ふは大悅の至りなり。然るに何故押司尊顏を煩惱しめ、悅び給はざるや。宋江答て、足下は未だ知り給ふまじ。我が一人の老父已に死去たるに依て旅先へ訃音到來し、連夜に馳回る次第なり、依て心神の惱勞少々ならず。張社長是を聞き、大に笑て云、押司は何を戲れてかくのごとき事を言ふや。尊父宋太公先刻我店に來り酒を酌で回り給ひぬ。いかんぞ其後頓死し給はんや。宋江が云、足下我を誑き給ふことなかれ。我弟宋清が方より書簡を寄せて老父の死去を告越たるに依て、回り來ては義理を缺ことあれ共、父の喪には易がたく、萬障を閲て歸郷せしなり。足下もし疑ひ給はゝ、是を見給へとて、宋清が書簡を出し見せければ、張社長大に笑て云、いかんぞ是らのことあらんや。尊父宋太公は今日午の剋の前後東村の王太公と共に、我

店に來て酒を酌給ひぬること彰けし。宋江これを聞、心中甚だ疑ひ、日も漸々晩しかば、頓て張社長に別れ直ちに家に回り、已に門内に入て窺ひ見るに、何の動靜もあらざりしかば、はや家僕等宋江を見て盡く皆拜をなして悅びぬ。宋江先問ていはく、我が父太公幷に弟宋清何も恙なきや。家僕答て云、太公毎日押司の事のみ渴想し給ひぬるに、今日歸り給ひしこと誠に家の福也。太公はさきに東村の王太公と共に張社長が店に於て、酒を酌給ひ回り給ふより、房間の内に熟く睡入居給ふなり。小刻對面なし給へ。宋江これを聞て大に驚き、遽に草堂の内に進み入しかば、宋清悅び迎へて拜をなしぬ。宋江此時宋清が素服を着せざりしを見て、いよ〳〵其僞を知り、宋清を罵りけるは、汝忤逆の徒老父恙なく在ますに、いかんぞ死給ふと詐て書簡を寄せ、已に我を自殺なさしめんとはからひしぞや、これ莫大の愆なり。汝直ちに此のごとく不孝を行ふやと、未だ云も終らざるに、屏風の背後より宋太公走り出呼り云けるは、宋江誤て宋清を罵ることなかれ。是原宋清が愆にあらず。我毎日汝が事のみ憂へ慮り、再び對面せんことを欲し、乃ち宋清に命せ、我已に死たりと書簡を修へしめ、一日も汝が早く回らんことを圖り、斯は行ひしなり。我又人の云を聞しに、白虎山の邊には多く强賊あり。汝をも擯掇て同じく强盗の頭領をなさしめ、共に不忠不義の事のみ行ふとなり。此ゆゑに別して汝を呼回さんと、彼柴大官人の方より來りたる石勇と云者に、書簡を寄て汝を尋しめぬ。是都て我がなす所にしてさらに宋清が預りしことにあらず。必ず誤て宋清を怒ることなかれ。宋江是を聞地上に拜伏して云けるは、大人斯のごとく逆子を憐み給ふこと、誠に感佩骨髓に徹せり。先尊體恙なきを見奉り、何の悅かこれにしかんや。唯しらず某が閻婆惜を殺したること、官司猶これを捨ずして、某を尋ね求め候や。太公が云、宋清が未だ回らざりし時よりも、多く朱同雷横兩都頭の力を得て、官司の事は漸々緩になり、今時分は汝を尋ねん者一人もなし。殊更頃日朝廷に皇太子を立給ひし故、天下の罪人を御赦免あると風聞す。是に因て彌汝を賺して急に呼回しぬ。必らず誤て怒りを起すことなかれ。宋江また問うて云はく、朱同雷横兩都頭は曾て我家に往來すること有や。宋清が云、我前日人の沙汰しけるを聞けるに、兩都頭各公用に因て他州に出たるとなり。朱同は東京に馳しと聞しかども、雷横は何れの處に往たるにや、未だこれを聞ず。今縣裡には只兩人の新都頭のみ有。此兩人共に姓は趙にして、專ら公事を攝るなり。宋太公又云、宋江汝遠路を來り嘸疲あらん、先宜しく房間の内に入て休息せよ。宋江父の命を受け遂に房間の内に入て歇みけり。此時一更の時分にて、家人等も盡く歇みける處に、俄に火把の光り四下に明亮、大勢の人馬宋太公が館を取圍み、一齊に咄と喊き叫んで云けるは、必ず宋江を走しむることなかれとて、各頻りに噪ぎけり。宋江父子三人此光景を見て大に驚き、互に面を見合せ呆れ果たる計りなり。凡そ一百有餘の人馬とみえけるが、大將は鄆城縣の新都頭兄弟にて趙能趙得と云者なり。大音に呼りけるは、宋太公もし上の法度を知らば、宜しく速に兒子宋江を出して、我が輩に與へよ。然らば我肯て汝を傷ふことあらじ。若又彼を

隱し出さずんば、汝ら父子三人渾てこれを捕ふべきぞ。宋太公が云く、宋江は未だ家に回らざるに、何ゆゑ宋江を出せと云給ふや。趙能呵々と打笑て云、汝必ず僞を構へ、我を誑くことなかれ。已に一箇の人有りて、宋江嚮に張社長が店にて、酒を飲たるを見屆け、尙且汝が家に跟込ぬ。いかんぞこれを抵賴んや。只速に宋江を出して、汝が禍を免れよ。此時宋江梯子の上に在て見合せ居しが、父宋太公に對して云けるは、大人彼らと爭論し給ふことなかれ。我先自ら出て彼らに捉るべし。縣裡の役人共は、原來我と親しければ、縱ひ官司に出たりとも、我を助んと欲ふ者多からん。殊に朝廷より天下の罪人を御赦免あらんとならば、必定其時に遭て罪を免るべし。彼新都頭は僥倖に依て、今此都頭の職をなしぬるゆゑ、己が勢ひに傲て必ず我を捉へんと欲す。我徒らに彼等と爭論するともいさゝか益あらじ。しかじ自ら出でて擒となり、明日官司に於て罪を免されば、却て兩都頭が掩膚の氣を請まじ。大人明かにこれを察し給へ。宋太公忽ち泪を泫然て云けるは、我汝を呼回し難を受しむること、今更後悔いかがせんやとて、一向哭き悲しみけり。宋江が云く、大人必ず憂へ給ふことなかれ。我明日官司に出なば、却て幸ひ有るべし。某向には旅中に有て人を殺し火を放つの豪傑らと交りを結び、ともに山陣に入て身を躱さんと圖りし。若さもあらば、再び大人に見えんこと難からんが、今幸ひ又官司に出て、何國に流さるゝことあらば、其限の滿るをだに待ば、再たび歸參し、重ねて大人にまみえんこと、却て易からん。然らば我宋清と共に、日夜大人の左右に侍て一點の孝を盡し、聊か以て大恩を謝し奉らん。宋太公云、汝已に此のごとく主意を定めなば、ともかくも汝が所存に任すべし。汝明日官司に出なば、我多く金銀を以つて諸役人に送り、宜しく汝がことを賴み、然るべき決斷を賴べき間、必ず心を惱すことなかれ。宋江頓首して是を謝し、乃ち梯子の上に登て、高聲に呼はり云けるは、汝ら先噪動することなかれ、我罪はもと死にあたるにあらず。必ず御赦免を蒙ることもあらん。先兩人の都頭寒舍に入て、三盃を酌給へ。明日我都頭に從つて官司に赴くべし。趙能が云、汝計を以て我ら兄弟を家內に賺し入、暗に我らを圖らんと思ふ共、我何ぞ白々と汝が計に中らんや。汝徒らに無益の心を費すことなかれ。宋江が云、我何ぞあへて老父舍弟に禍を蒙らしむることをなすべき。宜しく疑ひを休て家內に入給へ。我恭しく三盃を勸めんとて、急に梯子を下りて、自ら大門を推開き、則ち兩人の都頭を引て堂上に至り、座已に定りしかば、頓て酒宴を設け珍物數を盡し、兩人の都頭幷に百人餘の兵共を懇に款待し、尙錢財を分ち諸〻の兵共に施し、又二十兩の白銀を以て兩人の都頭に送り、再三酒を勸め、夜已に更しかば、兩人の都頭其夜は宋太公が館に歇み、翌日五更の時分、兩人の都頭遂に宋江を引て縣裡に馳せ、夜已に明なんとせし時、はや到着しかば、知縣もやがて廳上に出し處、兩人の都頭趙能趙得遂に宋江を引て廳前に出たり。知縣時聞彬これを見て、早速宋江に白狀を書しめけるに、宋江乃ち筆を揮て白狀を書て云、前年秋七月より、閻婆惜を妾として外宅に養ひ置たる處、此婆惜不賢不禮なるに依て、不圖爭を做乃ち酒興に乘じ想はずこれを殺

害し、久しく罪を避け故郷を逃出しか共、這般兩都頭趙能趙得に捉れぬ。縱ひ何等の罪過に行はゝ共、少しも怨ることなしと寫て知縣に呈しければ、知縣是を見て先宋江を牢中に遣しけり。滿縣の貴賤こと〴〵く宋江が捉れたると聞て大に憐み、諸の役人共都て宋江が德を知縣に告、免されんことを求めて云けるは、宋江もと已ことを得ずして、閻婆惜を殺せしこと明らかなり。殊に閻婆惜には公事の相手となるべき者もあらざれば、相公宜しく憐を垂て宋江が罪を免し給へ。知縣此言を聞て大に悅び、同じく宋江を免さんと欲し、先宋江が頸枷を除て牢中に入置けり。宋太公多く金銀を上下の役人に送て、宋江を救はんと圖りしかば、役人ども皆悉く其意を得て、各心を用ひるに、閻老婆は死してはや半年餘に及び、彼張三も又再び此事に干からざりしにぞ、宋江が對手となつて、訴訟を成者一人もなかりしかば、直ちに六十日の限り滿るを待て、知縣文書を修、則ち宋江を濟州府に送て決斷を求し處に、知府文書を看て宋江が罪を正し、只二十杖策ち面に刺を加へ、兩人の下官を監押として、宋江を江州に流しけり。役人共宋太公が賄賂を請しのみならず、宋江とは原來交り厚かりしかば、殊更懇情を垂、頸枷も別して輕きを用ひけり。兩人の下官張千、李萬遂に宋江を監押して、州衙の前に至りし處に、宋江が父宋太公弟宋清と共に此邊に出て相迎へ、多く酒食を設けて、宋江幷に兩人の下官を請て食せしめ、又若干の白銀を出して張千李萬に與へ、又新しき衣服を以て宋江に着せしめ、旅粧已に調りしかば、宋太公自ら宋江を引て僻靜なる處に至り、乃ち命じて云けるは、我聞

宋江故郷ニ
敵ヲ
値フ

江州は是富饒なる地にして、魚米多き所なり。是に依て我這回金銀を諸役人に送て汝を彼所に遣すなり。汝宜しく心を寛げ、自ら重く保養せよ。我頓て宋清を馳て汝を訪すべし。若好便あらば毎度書簡を寄て、我を安せしめよ。汝今江州に行ば、必ず梁山泊の下を過るべし。若梁山泊の豪傑ら、汝を奪て山陣に留るとも、必ず彼らと一所に在て強盗の頭領を做ことなかれ。此一言は第一肝要の事なれば、牢く心に記して忘るべからず。汝若配所に赴きなば、只宜しく時の至るを待つべし。上天もし憐を垂給はゞ、何條か父子再會の期なからんや。必ず自ら焦燥て心を惱し、且病を作ことなかれ。宋江父が敎訓を聞て、感懷肝に銘じ、覺えず涙を洒ぎ深く哭き、遂に父宋太公に別れ、江州を望で進發す。舍弟宋清は猶一程の路を送りしかば、宋江別に臨で再三宋清に命じて云く、汝必ず我がことを以て、憂へとすることなかれ。唯よく老父に事へ孝を盡すべし。我想ず事を惹出し數度老父を患はしめ、半點も孝道を行ざりしこと誠に以て我が一生の憂へなり。汝いよ〳〵我に替て朝夕老父の左右に侍り、何事も老父の心に從つて晩年の餘命を娛しめまゐらせよ。汝我を訪んとて、遠く江州の配所などへ至ることなかれ。若老父汝に撇られ給ひなば、誰か肯て老父に事る者あらん。もし又父の命にて配所へ訪らはしめんとならば、かたく諫め止めよ。我僥倖諸州諸縣に知人多ければ、我を助けんとする者又多し。少しも汝が憂に預らじ。若天我を棄給はずんば、改日必ず歸鄉して父子兄弟重て遇ん。只宜しく時の至るを待て、再會の期を測るべし。是則專要のことなり。宋清益〻涙を流し、遂に宋江

に別れ私宅へぞ歸りける。扨宋江は兩人の下官とともに旅路に向ふ處に、兩人の下官張千李萬宋江の父宋太公より、多く錢財を惠れ心中悅ぶ事限なし。況や宋江は忠義の士たることを知たれば、路すがら慇懃に宋江を敬ひ、いさゝか疎略のことなかりける。一日三人旅宿を求て歇みし處に、宋江先兩人の下官に對して云けるは、我が輩明日は梁山泊の下を過るべきに、若山陣の豪傑ら我が名を聞ことあらば、必ず山を下つて我を奪取り、汝兩人を驚しむることあるべければ、我が輩明日は常よりも早く打立、小路を求て馳行べきに、汝ら兩人宜しく此議に同じ給へ。兩人の下官がいはく、押司もし自ら是等の事を語り給はずんば、某ら必定梁山泊の麓を過り禍を受べき所に、押司是を告知せ給ひしこと、莫大の福ひなり。明日は尤早天より打出小路を求めて馳行べし。然らば梁山泊の禍を免れんと、已に其夜議を定め翌日五更の一點に起て飯を食し、三人旅宿を立出で小路を行くこと、纔二三里許せし處に、山坡の背後より一彪の兵馳出けり。宋江是をみるに、其内の大將は乃ち是赤髮鬼劉唐なり。劉唐四五十人の小賊を引て馳來り、彼兩人の下官を殺さんとしければ、張千李萬大に驚き、忽ち其色土のごとくになつて、半は死人と等し。宋江劉唐を見て問けるは、賢弟は誰を殺さんとせらるゝや。劉唐が云く、此兩人の下官を殺さんと欲す。宋江が云く、汝若果して兩人の下官を殺さんとならば、我肯て自己にこれを殺さん。其刀を我に與へよ。汝自ら彼等を殺して手を汚んや。劉唐が云く、我これを殺さずして、長兄に手を下さしめて殺すは却て無禮たりといへ共、敢て尊命に背ず刀を奉る間、宜しく兩人の下官を害し棄給へとて、遂に刀を宋江に與へしかば、宋江刀を取て又劉唐に問て云けるは、汝今兩人の下官を殺さんと欲する其意はいかん。劉唐答ていはく、山陣の主晁天王の命に因り、多くの人を鄆城縣に馳て、長兄のことを伺はしめける處に、長兄又官司に捉はれ牢中に居給ふと聞えしかば、晁天王已に計を以て急に長兄を救ひ出さんと計りけるに、諸人凡て風說しけるは、長兄此度諸役人の憐れみを受給ひ、牢中殊に寬鬆にして苦みをも蒙り給はず。遂に死罪を免れ流罪に決斷すべしと謠言專らなりしゆゑ、且事を延て動靜を伺ひし處に、果して此回江州に流され給ふよし聞えたるにぞ、晁天王諸〻の頭領を四方に分け遣し、長兄を迎へしめけるに、某が手にて長兄を接へしこと、尤も是を欣べり。某今長兄を請て山陣に上らんに、彼兩人を活し置て何の益かあらん。是故に是を殺さんと欲す。宋江が云く、賢弟等已に此の如くんば、其志尤も切なりといへ共、却て是我を救ふにはあらずして、我を不忠不義の地に落すに似たり。若彌我を迎て山陣に上らんとならば、是則我性命を害せんとするに等し。しかじ我此處にて自殺を遂、猶清名を末代に遺さば家門の譽れ此事なりとて、已に刀を喉に當て自殺せんとしける處に、劉唐是を見て慌て忙き推住め、頓て刀を奪取て云けるは、長兄果してかく心を決し給ふ上は、別に又宜しき商議も有べきに、必ず誤て尊體を傷ひ給ふことなかれ。宋江が云く、賢弟信實に我を憐むの心あらば、這次は我を放て江州に往しめ給へ。此後配所の日限滿て再び回ることあらば、必ず先山陣に來て足下等と會合すべき

間、賢弟明らかに是を察せよ。劉唐が云く、某は晁天王の命を受て來りし故、擅に主意をなすこと能す。幸ひ今大路の上に軍師吳學究花知寨と同く出て、長兄の至り給ふを待ち居ければ、長兄先速に彼兩人を此處に呼寄て、宜しく商議を遂げ給へ。宋江云く、已にかくあらば快く此兩人を請て商議をなさんとて、則一人の小賊を馳しかば、吳用花榮轡を並べ跑來り、頓て宋江が前に至て馬を下り、恭しく禮を叙畢りし處に、花榮先云ひけるは、いかんぞ宋長兄の頸枷を除かざらんや。我あへてこれを除んとて、己に左右を顧みて、小賊らにこれを命せんとせしに、宋江慌て云けるは、花賢弟何ゆゑかくのごとき言をいふや。此頸枷は是國家の法度にして、私のことにあらず、いかんぞ擅に是を除んや。必ず卒爾のことをなし給ふな。清風寨にて劉高が設し、囚車とは一列ならず。吳用此言を聞て大に咲て云けるは、某已に長兄の尊意を察せり。縱ひ頸枷を除きたり共、長兄だに山陣に留すんば、何の妨かあらん。且晁天王、久しく長兄に見えざる故、朝夕長兄のことをのみ渴想す。願くは長兄片時山陣に上て心腹のことをも語り給へ。宋江が云く、唯吳先生は、よく我が意を知り給ひぬるゆゑ頗る安心す。彼兩人の下官は、官司の命を奉て、我を監押すといひ、殊更我を敬ふの心深し。縱ひ我が命を果すとも、彼兩人が命は扶んと思へり。願くは吳先生我が爲に彼兩人を饒し給へ。此時兩人の下官心中に宋江が此一言を悅び、只顧宋江に向て哀告けるは、某ら兩人が命は、全く宋押司の扶を蒙るのみ、憐みを垂れて救ひ給るべし。吳用是を聞き打笑ひ、頓て宋江を導て漫々と蘆葦の茂たる岸邊に至りしかば、はや數艘の船來り相迎へ、乃ち諸の人を載て山前に漕つけ、此處より又岸に上り、直ちに斷金亭の上に至り、吳用已に小賊らを四下に馳て諸の頭領に斯と告ければ、衆皆斷金亭に至て宋江を迎へ、直ちに聚義廳に導て、各相見しける處に、晁蓋先宋江に對して云けるは、我が輩鄆城縣に於て、押司に一命を扶られてより以來、日として押司の大恩を想はずといふことなし。向には又諸の豪傑を山陣に薦め遣はされ、彌嘗陣の光を增ぬること大いなり。彼此の洪恩何を以てかこれを報せんや。誠に只心に銘じ骨に鏤むのみなり。宋江が云く、某向に閻婆惜を殺して より、故郷を走り出で凡半年餘り異郷に流落して、再び又禍を被りし故、山陣に來て身を躲さんと已に花榮秦明等と議定して、山陣に赴かんとしける處に、半途に於て不圖石勇に遇ひ、則弟宋清が書簡を接へて、これを披見するに、老父死去し未だ葬ず、專ら某が回るを待つとの訃音を得て、一刻も早く回るべしと有けるゆゑ、中途より馳回りぬる處に、老父が死去と云は都て僞りにて、某若し諸の豪傑に隨て、山陣に足を留ることもやあらんと、老父偏にこれを怕れ、かくのごとく詐の書簡を修へ、我を故郷に呼回しぬ。然るに又官司へ捉はれ、數十日在牢しけれ共、諸役人都て某とは原來交り睦じかりし故、衆皆憐を垂情深かりしかば、在牢の內少しの苦みを請ず。今又江州に流さるゝといへ共、此處は原富饒なる土地にて、他の配所とは大に同じからず。先互に一命恙なく相見えしこと、何の喜びかこれにしかんや。某猶暫く山陣に在て、別離の患をも語り慰んと想へども、

配所への日限定めあつて、已に逼りしかば久しく留りがたし、則是より辭別致すべし。晁蓋が云く何ぞかく甚だ急ぎ給ふや。先暫く座し給へとて、乃ち晁蓋宋江同じく中央に座しければ、兩人の下官は宋江が椅子の背後に跪きぬ。晁蓋諸〻の豪傑を呼で左右に座せしめ、各々宋江に對し一禮畢りし處に、晁蓋頓て盃を把て宋江に勸めしかば、其次に吳用公孫勝を始として白勝に至るまで、一々盃を取て宋江に勸め、酒已に數遍巡りける處に、宋江慇懃に謝して云けるは、諸〻豪傑我を愛し給ふ志深きこと感佩に勝ざるなり。某は是罪を犯したる流人なれば、久しく住るに宜しからず。願くは速に山を下り申さん。はや盃を收め給はんや。晁蓋が云く、押司は何故斯我山陣を見外にはし給ふや。願くは先山陣に止り給へ。押司もし兩人の下官を殺すに忍び給はずんば、我多く金銀を彼等に與へ回らしめ、則彼官司へは、梁山泊の豪傑等大勢山を下て押司を奪ひ取ぬといはしめん。然らば罪彼等が身に及ぶまじ。唯宜しく意を決し給へ。宋江が云く、長兄必ず是等のことを云ひ給ふことなかれ。是則我を救ひ給ふにはあらずして、却て我を苦しめ給ふに似たり。我が家には尙一人の老父あれ共、某かく禍ひを蒙りて異鄕に徘徊しぬるゆゑ、老父の左右に侍て孝を盡すこと能はず。これを憂ることは萬千なり。今我もし山陣に留らば、父が敎訓を背くのみならず、禍必定老父が身に及ぶべし。我這遭故鄕を出し時、老父再三此事のみを叮嚀にす、我いかんぞあへてこれを背んや。向には我いまだ老父が心を知らざりしゆゑ、一時の興に乘じて山陣に加はらんと欲しぬ。然れ共這次は父が敎訓を受て

配所に赴くことなれば、前遭とは等しからず。我もし長兄の諫に隨て山陣に留らば、上は天理にそむき、下は父の敎に違く者にして、不忠不孝の徒とならん。若かくのごとくんば、縱ひ榮華にして百年の壽を保つとも、畢竟何の益かあらん。長兄いよ〻我を饒し給はずんば、今玆にて一死を乞ふべしとて、忽ち地上に拜伏して深く涙を洒ぎしかば、晁蓋吳用公孫勝等一齊に宋江を扶起して云けるは、長兄決して山陣に留り給はずんば、某ら豈敢て苦に留ることあらんや。必ず憂ひ給ふべからず。しかれども今宵は心を寬げ、山陣に一宿し給ひ、明日早々山を下らせ申さんとて、再三再四留て又大いに飮酌を催しぬ。宋江は今は止ことを得ず、一日の酒を酌良興に乘じけるが、其夜は兩人の下官と共に、一處に在て歇み、翌早天に起てはや山を下らんと、別れを告しかば、吳用が云く、某一人の知己今幸ひ兩院押牢節級となつて江州に居住す。乃ち姓は戴名は宗と號す。人皆彼を稱して戴院長と申。彼又道術を善して一日の中に八百里の道を行により、人皆彼を稱して神行大保とも諢名せり。此人原來財を輕んじ義を重んじ、よき一人の大丈夫なり、某昨夜一封の書簡を修へて此にあり。今押司にこれを渡さん。江州に至り給はゞ、早速これを戴宗に屆け給ひて、彼とも宜しく交りを結び給へ。總じて何等の事有とも、速に我が輩に告知せ給へ、必ず隔心有べからず。宋江是を聞て感謝に堪ず深く禮しけり。此時晁蓋諸〻の頭領迄、深く宋江が別を忍びず。頓て酒宴を設けて宋江を欵待、又餞として一盤の金銀を宋江に送り、別に二十兩の銀を兩人の下官に與へ、酒宴も罷りければ、諸〻頭領

皆盡く宋江を送て山を下り、各別れを惜みけり。吳用と花榮とは、共に宋江を送り、二十里外の大路に至り、頻りに依々戀々一別に及びけり。扨宋江は梁山泊を去て兩人の下官と共に江州へと赴きける。此兩人の下官は、梁山泊人馬多きを見て、心中驚き猶且諸の頭領共專ら宋江を敬ふを見て、是又奇異の思ひをなし、殊さら山陣に於て、二十兩の銀を得たりしかば、天に歡び地に悅び、ことに宋江を敬ひ尊ぶことといやましける。

揭陽嶺にて宋江李俊に遇ふ

宋江配所への道を馳することは、はや半月餘なりしが、一ツの高嶺ある所に至りぬ。兩人の下官宋江に對して此嶺を過れば、則ち潯陽江と云ふ所なり。此より江州に到るには總て水路にして、其間遠からず。宋江が云く、今天色大いに熱して、日中は殊更勝がたし。此朝涼に乘じて、嶺を過らば可ならん。兩人の下官の云く、押司の言極めて然り。速に今早涼に嶺を過るべしとて、三人同じく峰に馳上り、方に半日ばかり往て嶺頭を過りし處に、此邊に一軒の酒店あり。前は侘樹に眺み、後ろは顚崖に靠り、左右は都て草屋なり。彼樹陰の下に一ッの帘ありければ、宋江是を見て心中に悅び、乃ち兩人の下官に對して云けるは、我輩已に飢渴に及んで疲れけるに、此嶺上酒肆有こそ幸ひなれ。且酒食を求めて是を用ひ、益精神を補なひ嶺を下らんとて、三人等しく酒店に入つて座をなし、良久しく待けれ共、更に一個の人も出ざりしかば、宋江呼つて云く、此店には何ゆゑ一人の男女も見えざるや、もし内に人あらば速に出よと、未だ云も罷らざるに、内より一人の大漢子出來りけるをみるに、色赤く鬚亂れ眼圓く口方なり。此漢子卽ち宋江三人を見て恭しく問けるは、貴客は幾ばくの酒を索め給ふや。宋江が云く、我輩遠路を馳て頗る飢に疲れしかば、先宜しく肉を求めてこれを食せんに、汝はやく肉を持て我に賣れ。彼漢子が云く、我店には只牛肉と白酒とを買ふ。しらず是を用ひ給ふべきや。宋江が云く、是尤もよし。汝先二斤の肉と一角の酒とを拿來れ。彼漢子が云く、貴客我いふことを怪しみ給ふべからず、我此嶺の上にて酒を賣ふには、先に價を得て後に酒を量るの例なり。願くは貴客先酒錢を償ひ給へ。然らば早速酒を量り出すべし。宋江が云、先に價を償ひて後に酒を得は同じ事なり、然らば先酒錢を償はんとて、急に包袱蘊を開いて銀を取出しければ、彼漢子傍らに立て暗に包の內に物あるを見て、先虛華地に之を悅びけり。宋江遂に銀をもつて彼の漢子に與へしかば、彼漢子大に悅んでこれを收め、頓て一桶の酒と一盤の肉とを携へ出て、宋江が前に置、自から大盃にこれを釃て宋江等三人に勸めし處に、宋江等是を飲で云けるは、當世略平らかならざるにより、諸方に惡人多く縱橫して、動不動酒の內に蒙汗藥を入、乃ち萬千の豪傑を殺して財寶を奪ひ取と云事、專ら沙汰す。然れ共我が輩は全く是を信せず。故に到る所に於て酒を飲ずといふことなし。此處の酒も定めて異事有まじ。彼漢子打咲つて云けるは、貴客の言尤も當れり。今時は道中に多く惡人有て、麻藥を酒の內に和し、まゝ旅人を害し、財寶を劫ひ取ことあり。我が此酒の內にも麻藥を入けるに、貴客卒爾

にこれを用ひ給ふことなかれ。宋江も同じく咲つて云く、汝今我が云し戯れ言を聞て、汝も又戯れを云ふや、遮莫我何ぞ麻藥を怕れんや、我反つて毒の試に、是を飲んと思ふとて、又一笑を催ほしけり。此時兩人の下官が云けるは、白酒は原盪めて飲ときは味いよ〳〵美なり。押司宜しく盪めて飲み給はんや。宋江が云く、是誠に味ひ美ならん。汝早く盪めて來れとて、彼の漢子に命じければ、彼漢子心中暗に悅び、想道、凡そ蒙汗藥は盪めたる酒の内に用ゆるときは、其驗甚だし。彼の輩今酒を盪め來れと云は、是我に禍を與へて己れが死を急がんとするなり。今麻藥を用ひずんば、更に何れの時をか待んとて、頓て麻藥を把て酒の内に入れ、遂に熱く盪めて再び宋江等三人が前に持ち出しかば、宋江等三人は今麻藥を加へたるを夢にもしらず、又大盃に滿々と釃、一連に三盃を酌乾ける處に、先兩人の下官、忽ち涎を流して地上に倒れ、更に身をも動かす事叶はざりしかば、宋江これを見て、急に扶け起さんとして云けるは、汝兩人僅かの酒を飲で、何ぞはやかく大醉せしやと、いまだ云ひも了らざるに、宋江も等しく忽然として眼を眩し、覺えず地上に撲倒れ、三人只面を覩合せ、さらに動くこと能はざりけり。彼大漢子歎息して云けるは、嗚呼辱ないかな。頃は曾て得采のことあらざりしに、今日天より此三人を我が家に得せしめ給ふこと、是まづ莫大の吉兆なり。速に此輩を殺して喜び酒をも酌べしとて、先宋江を倒に拖て、人を殺す草房の内に入て凳の上に載置き、又兩人の下官をも同じく拖入て凳の上に載せ、かの包袱蘊を取て是を開き見るに、都て皆金銀なり。彼漢子打咲つて云けるは、我多年酒肆を開き或は商客を害し、或は流人を殺し、餘多の人を剝取しかども、いまだ曾てかくの如き流人を見ず。量るにこれらの罪人、いかんぞ若干の金銀を携へけるや。誠に我が禍ひ望外に出ぬ。昨夜燈花の報あり。今朝喜び鵲の噪ありけるが、果して此客來りぬるこそ、靈驗なれとて、再び包袱を蘊で、門前に走り出、專ら家僕らが回り來るを待わびて、嶺の上を望で居けれども、只一人の家僕も回らざりける所に、三人の漢子來りて嶺に望て上りしかば、彼酒店の主誰なるにやと忙しく出て是をみるに、原識たる人なりしゆゑ、乃ち相迎へて云けるは、長兄らは何れの處に、遊行し給ふや。かの三人の内、一人の大漢子先答へて云く、我が輩は嶺の上に登つて一個の人を相迎ふ。頃日はやこの邊に來るべき時節ゆゑ、毎日此邊に出て待つといへども、いまだ其來るをみず。しらず何ゆゑ斯遲滯なるやとて、一向嶺の上を伺ひ望みければ、彼の酒店の大漢子又問ていはく、長兄らの待給ふ人は、原誰なるぞや。彼の大漢子が云く、我輩が待つ人は名高き大丈夫なり。酒店の大漢子が云く、其名高き大丈夫とは又是誰が事ぞや。彼の大漢子が云く、定めて足下も聞及びつらん。世間の人皆山東の及時雨宋公明と稱す、鄆城縣の押司宋江なり。酒店の漢子又問うて云く、其宋公明は何ゆゑ此嶺を過るや。彼大漢子が云く、我ももと是を知らざりしが、頃日一人の朋友濟州より回りけるが、則ち語つて云く、鄆城縣の押司宋公明何等の罪を犯したるかは知らざれ共、濟州府の決斷に依て、近々江州に流さるゝと告しゆゑ、我熟々是を料り想ふに、若江州に赴むなり。彼漢子打咲つて云けるは、我多年酒肆を開き或は商客を害し、或は流人を殺し、餘多の人を剝取しかども、いまだ曾てかくの如き流人を見ず。量るにこれらの罪人、いかんぞ若干の金銀を携へけるや。誠に我が禍ひ望外に出ぬ。昨夜燈花の報あり。今朝喜び鵲の噪ありけるが、果して此客來りぬるこそ、靈驗なれとて、再び包袱を蘊で、門前に走り出、專ら家僕らが回り來るを待わびて、嶺の上を望で居けれども、只一人の家僕も回らざりける所に、三人の漢子來りて嶺に望て上りしかば、彼酒店の主誰なるにやと忙しく出て是をみるに、原識たる人なりしゆゑ、乃ち相迎へて云けるは、長兄らは何れの處に、遊行し給ふや。かの三人の内、一人の大漢子先答へて云く、我が輩は嶺の上に登つて一個の人を相迎ふ。頃日はやこの邊に來るべき時節ゆゑ、毎日此邊に出て待つといへども、いまだ其來るをみず。しらず何ゆゑ斯遲滯なるやとて、一向嶺の上を伺ひ望みければ、彼の酒店の大漢子又問ていはく、長兄らの待給ふ人は、原誰なるぞや。彼の大漢子が云く、我輩が待つ人は名高き大丈夫なり。酒店の大漢子が云く、其名高き大丈夫とは又是誰が事ぞや。彼の大漢子が云く、定めて足下も聞及びつらん。世間の人皆山東の及時雨宋公明と稱す、鄆城縣の押司宋江なり。酒店の漢子又問うて云く、其宋公明は何ゆゑ此嶺を過るや。彼大漢子が云く、我ももと是を知らざりしが、頃日一人の朋友濟州より回りけるが、則ち語つて云く、鄆城縣の押司宋公明何等の罪を犯したるかは知らざれ共、濟州府の決斷に依て、近々江州に流さるゝと告しゆゑ、我熟々是を料り想ふに、若江州に赴む

かば、必定此邊を過るべし。彼の宋江鄆城縣に居給ひし時だにも、我れ何とぞ彼を訪うて相見えんと欲しけるに、今幸ひ此邊を過り給ふに、我何ぞ是を迎へて相まみえざらんや。此ゆゑに、我毎日此邊に出て待ぬれ共、未だ曾て來るをみず。今日は此兩人の兄弟と共に、嶺の上に登つて相待んと欲し、直ちにこゝに至りぬ。且汝が商賣頃日は得采いかゞぞや。酒店の大漢子が云く、某此數月かつて好き得采にも遇ず寂寞かりしに、今日天より偶幸ひを賜はりて、三人の男子を捉へし處に、包袱の內大いに實有て、想はぬ大利を得たり。彼の大漢子これを聞て、忙はしく問て云く、汝の捉へぬる男子はいかなる模樣風俗ぞや。酒店の漢子が云く、兩人は監押の下官、一人は流罪人なり。彼の漢子大いに駭き、其流罪人は身材矮くして面色黑きにあらずや。酒店の漢子がいはく、長兄の云ひ給ふごとく、彼の流人身の丈極めて矮くして、面色尤も黑し。彼の漢子慌て忙き問けるは、汝未だこれを殺さゞるや。酒店の漢子が云く、我早速にこれを殺さんと思ひしかども、折ふし家僕等いまだ回らざるに依て、尙草房の內に入れ置ぬ。彼の大漢子が云く、我其罪人を試に一見せんに、汝導けとて、四人竟に草房の內に入つてこれをみるに、危かな宋江は今もや殺されんとみえて、凳の上に載置けり。彼の大漢子も亦いまだ宋江に對面せざりしかば、分明にこれを識認こと能はず、只躊躇して決せざりしが、忽想ひ寄けるは、兩人の下官が包袱蘊の內に必定公文あらん。此公文をだに見ば、立地にこれを知るべしとて、乃ち酒肆の漢子に對して云ひけるは、我未だ宋押司に遇ざりしゆゑ、今此流人をみるといへ共、分明に是をしらず。唯此下官等が包袱づつみの內の公文を取出し見ば、彼の流人が姓名明らかに知るべし。酒店の漢子が云く、長兄の言尤然りとて、頓て下官等が包袱蘊を開き內をみるに、一錠の大銀並びに若干の碎銀あり。彼の大漢子先文書を取て、これを披讀し、四人齊しく大いに歎じて云く、危急かな宋押司已に非命の死をなさんとし給ひぬるよな。今不慮の命を脫れ給はんこと是天の祐けなり。彼の大漢子又云く、我已に四五日此邊に出て、此押司を迎へしかども昨日迄は嶺の下に在て待けるに、今日不思議に嶺の上に登つて押司の命を救ふこと、我平生押司を慕ふの誠天に感通したるに疑ひなし、速に解藥を用ひて、宋押司を甦生なさしめ進らすべしと、未だ云も了らざるに酒肆の漢子頓て解藥を把て、宋江が口に灌ぎ入しかば、宋江漸甦て身を動かし、乃ち眼を開いて左右を見るに四人の漢子双方に幷び立ぬ。宋江は原來これを識認す。誰なるにやと思ひける處に、彼の大漢子先宋江に向つて、慇懃に拜をなしければ、宋江呆れて、足下は誰人なれば我を拜したまふ。疑らくは是夢にはあらざるや。又彼の酒店の漢子も、同じく身を翻して宋江を拜しければ、宋江も又兩人の男に禮を還し、足下兩人は實に誰なれば、某を斯愛敬し給ふや。願はくは高姓大名を聞ん。彼の大漢子答へて云く、某は姓は李名は俊と號す。原盧州の者にして專ら揚子江の內に在て船を撑す水主なり。某別して能水性を識たる故、人皆某に綽名し、混江龍李俊と稱す。又彼の酒店の主は、乃ち此揭陽嶺の人にして、專ば酒の內に麻藥を入るの商賣をなす。このゆゑに人皆彼を稱して、

催命判官李立と申す。又彼の兩人の者は同胞の兄弟にして、乃ち潯陽江の邊の者なり。專ら官司の法度を背て、私に鹽を此の處に運び來つて、これを商賣にす。乃ち某が家に倚て身を安せしむ。彼の兩人原江邊に住しゆゑ、能水に伏し善船に駕す。兄が名を出洞蛟童威と號し、弟が名を翻江蜃童猛と號す。願はくは押司彼等が拜をも受給へと、未だ云も罷らざるに、兄弟の者忙はしく、地上に伏して拜をなしぬ。宋江が云く、既に今麻藥を用ひて、某を殺さんとし給ひけるが、いかんぞ又某が名を知て、斯憐みを垂給ふや。李俊が云く、某が一人の朋友頃日濟州より回りて、某に語りけるは、宋押司事を做出し給ひて、江州に流され給ふと告しらせぬ。某いまだ押司の尊顏を拜せざるゆゑ、常にしも何とぞ鄆城縣に馳て、押司を訪はんとこそ思ひぬれども、只恨らくは緣薄うして徒に日を延しける處に、此たび押司江州の配所へ赴き給ふと聞しにより、定めて此邊を過り給はんと推察し、凡そ五七日嶺下に出て押司を待しかども、曾て消息も聞ざりしに、今日想はず天の引合せを蒙りて、彼の兩人の兄弟等と倶に嶺に上り、幸ひ李立に遇て、押司の噂をせしに、李立又三人の男子を麻藥に中らしめ遂に是を捉へりと告し故、某深く是を疑ひ、此處に來つて押司の尊顏を見奉りしか共、某素より押司を識認ざりしゆゑ、分明に知がたく、只顧躊躇に及びしに、不圖彼の文書あらんことを思ひ出し、則ち文書を改見るに、果して押司の姓名有しかば、我が輩忽然として、半は悅び半は駭然、忙しく解藥を取て押司の口に沃ぎ納しかば、漸々甦らせ進らせぬ。只知らず何等の事にて江州に流されさせ給ふや、願はくは詳にこれを知せ給へ。宋江是を聞て大いに悅び、彼の閻婆惜を殺せしこと石勇に遇て弟宗清が書簡を得て家に回り、今また江州に流さるゝ次第、一々委しく語りければ、四人の者感歎止ざりけり。

舶來の本に、宋清の事を四郎と書り。もと宋太公の四男なりし義なり。又論者云く、趙氏の都頭宋江を捕へん爲に來り、其席に饗應賄賂を請剩一宿せしは、捕盜やら珍客やら分別しがたく、互に悠長なる次第なり。

四編卷之四

沒遮欄及時雨を追趕

催命判官李立又宋江に對して、長兄今江州の配所に行て苦しみを受け給はんより、宜しく此處に留まり給ひて、身を安んじ命を立給へ、宋江が云、向に梁山泊の豪傑等再三再四懇に我を山陣に留めしかども、我唯老父の命に背かんことを恐れて、終に辭して止まらず。今又いかんぞ此所に留まらんや。某原來心を決せしことなれば、朝に配所に至て夕に死すとも可なり、大丈夫何の悔ることかあらん。李俊が云、押司は是當世第一の義士なれば、必ず官司を誑くことをなし給ふまじ。李立汝早く彼兩人の下官をも同じく解藥を灌てこれを助けんや。李立忙しく解藥を把つて下官らが口中に灌ぎ入れしかば、二人の者夢の覺たる心地して起上り、互に面を覩合せて、只惘然として呆れ在りけるが、良久しうして後、兩人同じく宋江に對して云けるは、此店の酒はいかなる美酒なれば、僅か數盃にして斯く人を醉しめけるや。我人俱に酒を飲は、原醉しめん爲なれば、よく人を醉しむる酒を以て美酒とも名酒とも謂つべし。我が輩他日又此邊を過ば、必ず此店に倚て、宜しく三盃を酌、再び百念を忘れ醉臥すべし。宋江等衆人此言を聞て、各〻一笑を催しけり。其夜は李立酒宴を設けて、衆人を欵待、夜も

更ければ、皆々此家に一夜を過しぬ。翌日李立又酒食を具へて、宋江等衆人を欵待、頓て包袱蘊を取出して、宋江幷に兩人の下官に還しければ、宋江深く是を謝し、乃ち李俊等とともに嶺を下るべしとて、李立に別れを告し處に、李立深く別れを惜み、暫らく路を送りて立歸りぬ。宋江は李俊童威童猛兩人の下官らと嶺を下り、遥ちに李俊が家に至て先づこゝに休みけるが、李俊悅ぶこと限りなく、早速酒宴を設けて宋江を欵待し、乃ち義を結で八拜の交りを誓ひ、遂に宋江を兄とし己を弟とす。李俊悅びの餘り、再三苦に宋江を留めて數日憩しめ、宋江も其志の切なるを感じ留まり、互に睦じきこと同胞のごとく、既に宋江ははや發足せんとて、李俊に別れを告げしかば、李俊今は留めがたく、再び酒宴を設け別の盃を勸め、又碎銀若干を出して兩人の下官に與へ、宋江が事を懇に賴みしかば、兩人の下官大いに悅て領承せり。宋江旅粧調のひ、李俊童威童猛等に別れ、揭陽嶺をはなれ、江州を望て進み行き、兩人の下官は宋江が斯く人に敬はるゝを見て暗に是を感じけり。其日宋江下官ら共に、半日計り馳て未の上刻に一ツの街に至り、宋江此處を見るに、人煙輳集て房屋並び列なれり。宋江又百步計行て對面を見るに、一夥の人群り圍で、何やらん見物して在りければ、宋江も又下官らと共に群人の內に挨入てこれを見けるに、乃ち一人の漢子鎗棒を使うて、膏藥を賣者なり。宋江暫く是を見ける處に、彼漢子はや鎗棒を使ひ休、又拳を擧脚を飛せて打拳の神妙を使ひしかば、宋江覺えず聲を放て大に喝采にけり。此時彼漢子一ツの盤を拿て四面八方に繞り、乃ち見物の人に向て云ける

は、某は此度遠方より當所に至り、偏に諸主顧を頼で今日の營を做んと欲す。某が鎗棒拳頭原來未熟にして、人目を驚かしむるに足らず。然れども諸主顧を慰さめんが爲、浪りにこれを使うて尊覽に備へ奉りぬ。もし筋重膏の入用も候はゞ、數錢を投てこれを求め給へ。我が此筋重膏は、是双びなき名膏なり。必ず世間の膏に比して一列に見給ふことなかれ。縱ひ膏の入用あらずとも、某が乏しき營を助けんと思はゞ、一錢半錢を論せず盤の内に投入れ給へ。某幸ひ諸主顧を集めて膏を賣はんとするは、恰も寶の山に入りたるがごとし、何ぞ手を空しうして回らんや。願はくは諸主顧、我が此盤の内に錢を滿しめ給へとて、累に六七遍繞りしか共、錢を投る者一人もなし。彼膏を賣漢子又呼て云けるは、望らくは見物の諸主顧高く尊手を擧給ひて、志しの一錢半錢を丟り給へ。此時見物の者どもは尙眼を白々として曾て一錢をも賞せざりけり。宋江此光景を見て、心中に想ひけるは、彼漢子空しく錦棒を使ひ、虛しく言語を盡し、唯一錢の賞をも受ざるは、嘸自ら是を慚らん。我もろ〳〵の見物人に替つて彼を賞せんと、則はち一錠五兩の銀を取出して膏を賣漢子に對して、高聲に呼り云けるは、我は是罪を犯して、配所に赴く流人なれば、敎頭を賞すること能はず。只此五兩の銀を足下に送る間、もし輕少を嫌はずして、これを收め給はゞ、我大悅すべしとて、則はち銀を與へしかば、彼漢子此五兩の銀を得て恭しく頓首して云けるは、かく大いなる揭陽鎭にだも、唯一人も人を識る豪傑あらざるに、貴客はもと身に官司の事を預かり、配所に赴むき給ふ過往、却て某に五兩の銀を惠み給ふ事他の五百兩よりも猶是を忝なうす。願くは某貴官の高姓大名を承て德を天下に傳へんとす、宜しく尊姓名を知らしめ給へ。宋江が云、敎頭は何ゆゑ再三慇懃の言を云給ふや。這等の薄儀何の謝する所あらんと、未だ云ひも罷らざるに、一人の大漢子忽ち群人の内より躍り出、乃ち宋江に向て呼はりけるは、汝は何れの所より來れる罪人なれば、あへて我が揭陽鎭の威風を犯して、傍若無人の擧動をなすや。彼膏藥を賣ふ漢子只這等の武藝を知るのみにして、我此揭陽鎭に來て鎗棒を使ふは、甚だ以て惡んずべし。此ゆゑに我諸人に云含めて、一錢半錢も施さしめざる處に、汝罪人の身分として、當地の人を欺き擅に銀を以て彼に與へしこと、分に過ぎたる賊配軍、我決して汝を饒さじとて、拳を輪し宋江に打つて懸りしかば、諸人これを見て、すはや事を惹出せりと、衆皆手に汗を握りける。此時宋江は早くこれを避ていはく、某自ら銀を以て彼に賞するに、汝何ぞ干ることあらん。無益の怒りを起すことなかれ。彼大漢子益怒て又拳を擧足を飛せ、宋江に打て蒐りしかば、宋江今は止むことを得ず、同じく拳を輪し相迎へんとしける處に、彼膏藥を賣ふ敎頭背後より走り來りて、彼大漢子が頭巾と上繩とを揪へ、地上に痛く投しかば、彼漢子大に吼り再び起上らんとせしかども、彼敎頭又脚を擧て蹋倒し、尙痛く打んとせし處に、兩人の下官忙がはしく勸解、敎頭を抱住ければ、彼漢子漸々扒起て宋江敎頭二人を見て罵りけるは、汝兩人好も我を打ちぬるよな。少刻我が手段を見せんに、必ず此を走ることなかれとて、南を望んで馳行けり。宋江頓て彼敎頭に問て云けるは、願くは敎頭の姓名

を報じ給へ。答へて云く、某は本河南洛陽の者にして姓は薛名は永と號す。某が祖父は老种經略相公の幕下にありし軍官なりしかども、不幸にして浪々の身となり、某今錦棒を使ひ、膏藥を以て渡世の營とす。人皆某を稱し、病大蟲薛永と云慣はせり。貴官の高姓大名はいかん。宋江が云、我は是姓は宋名は江と號し、鄆城縣の者なり。薛永が云、貴官はもし山東の及時雨宋公明と云人にはあらずや。宋江が云、某則ち宋公明なり。薛永聞も敢ず忽ち地上に拜伏して云けるは、名を聞しは面を見るに如かず、面を見るは名を聞よりも勝似。誠に希有の大丈夫かなと感歎轉頻なり。宋江忙しく扶け起して云けるは、敎頭いかんぞ我を拜し給ふや。宜しく先づ酒店に至て三盃を酌ん。もし我を棄て給はずんば、早々來り給へ。薛永が云、某久しく華顏を拜せんと願ひしかども、緣熟せずして日を延しけるに、今日高風を覩奉るは、是天の賜ものなり、豈あへて尊命に違はんやとて、忙しく錦棒膏藥等を收拾め、乃ち宋江に隨つて一軒の酒店に至りしかば、酒店の小厮出迎へて云けるは、貴客我店に至り給ふは、定めて酒肉を求め給はんとのことならん。されば共我が店の酒食は、貴客に賣り與ふまじ宜しく他の店に行きてこれを求め給へ。宋江問うて云、何ゆゑ酒食を我に賣らざるや。小厮が云貴客先に爭ひをなし給ひぬる大漢子、人を馳せて云けるは、若し貴客ら此處に來て酒肉を求め給ふ共、必ず賣ることなかれ。又もし賣與へば、酒店を微塵に踏碎かんと、緊しく申し越ぬ。我が此所の者共は都て彼大漢子を怕る。其故いかんとなれば、彼此揭陽鎭を覇るに依てなり。宋江が云、彼必定來て我輩を鬧すべきに、しかじ早々此所を立ち去らば可ならんや。薛永が云、押司の言極めて明けし。某も旅宿の主に房錢を償ひ、一兩日中必らず江州に至て長兄を訪ふべき間、長兄は先づ速に先達て江州に往給へ。宋江其議に同じ、乃ち又二十兩の銀を取出して、薛永に與へしかば、薛永深く拜謝し、先づ旅宿へぞ歸りけり。宋江は二人の下官と共に、酒店を出てまた一軒の小酒店に入て、酒を求めければ、酒店の主が云、貴客先に爭ひをなし給ひぬる大漢子、遍く酒店中に人を馳て、貴客等に酒を賣るべからずと命じけるに、貴客必ず酒の望を休給へ。此處の酒店に於て貴客に酒を賣らん者、恐らくは唯一人も有るまじ。宋江は下官と共に此言を聞て、敢て再び聲をも做ず。遂に此店を去つて、又數軒の酒店に至て酒を求んとするに、果して賣らんと云店一家もなかりけり。宋江力及ばず、漸々市梢に至て此處をみるに、數間の打火店ありければ、旅宿を求めて歇まんとせしか共、此處の家々も彼大漢子が命を受しゆゑ、宋江に宿を借す者一人もあらざりけり。宋江此光景を見て、大に興を失ひ、是非なく大路を望で馳し處に、はや日も落て天色晩んとすれば、宋江等三人心慌てける時に、兩人の下官が云押司素より來歷樞機もあらざりしに、多くの銀を敎頭に與へ、剩事を惹出して、旅宿をも借受ず、今更何れの處に至て宿を求めんや。誠に後悔これに過べからずとて、唯顧躊躇して憂へける處に、遙か對面樹林深き内より、燈の光閃き見えしかば、宋江是を見て、此林の中必定人家有と覺えたり。宜しく是へ馳て旅宿を借らば可ならんか。兩人の下官が云、彼所はもと道中の馬驛にあらざれば、暇

令旅宿を租たりとも、頗る心を安んじがたし。宋江が云、馬驛の打火店にはあらざれ共、別に宿を求めん所なければ、曲て彼所に一宿せんに、我に隨がひ來り候へとて、三人齊しく馳て二里計りの路を來りしかば、はやくも林の背後に、一間の大家聳え見ゆ。宋江此大家を見るに、前は村塢に臨み、後ろは高き岡に倚り、數行の楊柳緑にして煙りを含み、百頃の桑麻靑くして雨を帶し、高瓏の上には牛羊陣をなし、芳塘の内には鵝鴨群をなす、眞に富饒なる光景なり。此時宋江兩人の下官と丶もに家の前に至て門を敲きしかば、一人の家僕門を開きて走り出で、乃ち宋江等に問て云けるは、汝らは誰人なれば、夜中來て門を敲くや。宋江恭しく答て云けるは、某は是罪を犯したる流人配所江州に赴くものなり。今日は想はず馬驛を馳過て、旅宿を求むるに所なし。このゆゑに貴宅を借て一夜を過さんと欲す。望むらくは憐を垂れ給へ。家僕が云、已にかくのごとくば、少しくこ丶に待ち給へ。我まづ主の太公に告げて來らんとて、再たび内に入り、未だ暫らくもせざるに、又走り出て云けるは、主の太公に告けるに、肯て一宿を借まゐらせんとなり。宜しく我に隨て入り給へとて、遂に宋江等三人を延て、草堂に至りし處に、主の太公はや出て宋江に見え、乃ち家僕らに命じて、宋江下官らを房間に導せ、又酒食をも進めよと命じけるゆゑ、家僕等頓て宋江等を引て房間の内に至り、則ち瑠璃燈を點じ、宋江が前に設け、また酒食を出して三人に食せしめ、遂に器を收拾めて外面に出でければ、兩人の下官宋江に對して云けるは、此處は殊更人なければ、彌々よく押司の頸枷を除くべき間、身を寬げ緩々歇み給へとて、頸枷を取りしかば、宋江大に悅び、頓て兩人の下官とともに、淨手に出て天を見るに、星光雲を披いて明なり。宋江又房間の外をみるに、此處に一つの小路有りければ、宋江此路を眼の内に看置けり。三人又房間の内に入て門を關し、各〻床の上に登て打臥尙閑談して云けるは、幸ひに主の太公我が輩を留たればこそ、今宵は斯く心を安んじて睡るなり。却つて馬驛の打火店よりも大に勝似とて將に眼を合せんとせし處に、房間の外大門の前に火の光見えて人音有りしかば、宋江暗かに戶の縫間よりこれを望み見るに、主の太公二三人の家僕に把火點させ、親自四方八面を揮照して逼く見廻り、用心緊しき光景なり。宋江低言て、兩人の下官に語りて云けるは、主の太公全く我が老父に似て家内の用心究めて嚴かなり。我が老父も亦今時分は自ら火把を照し家内を見廻るべしとて覺えず涙を含みけり。斯る處に門外に數人の聲として門を開けと呼はりしかば、彼家僕忙しく門を開きし處に、五六人の漢子門内に進み入りぬ。其内の頭と覺えし大漢子は、手に朴刀を提げ、其餘の者共は每手に棒を拿ぬ。宋江再たび大漢子を好みるに、彼頭たる大漢子は今日揭陽鎭にて爭ひをなしたる漢子なり。此時太公かの大漢子に問て云、汝は何れの處にて、誰と爭ひをなし、夜中に斯棒を拽刀を提噪動するや。彼大漢子が云、大人は我が兄の居給ふ所は知り給はぬや。太公が云、汝が兄は老早歸りしかども、大に酒に醉卽ち前後も省らず後亭の上に打臥ぬ。若し事あらば明日の沙汰にせよ。彼大漢子が云、某急に兄を呼び起し、共に馳て仇人を追かくべし。太公が云、汝は誰と爭ひを惹出

して、兄を呼起さんとするぞや。若し汝が兄これを聞ば、必定人を殺し火を放て大事を做出すべし。汝まづ爭の所以を我に告げ知らせよ。大漢子が云、大人は未だ聞給ふまじ。今日鎮上に於て一人の漢子鎗棒を使て、膏藥を賣ふ者あり。惣じて是らの商賈をなす者は、先づ我等兄弟にまみえ、其後揭陽鎮に於て鎗棒又は打拳にもせよ人を集めて商ひをすることなるを、今日膏藥を賣し男子は、曾て我等兄弟を訪ず。擅まに揭陽鎮にて鎗棒を使ひし故、我鎮上にて命じ、諸人に半錢も賞を惠ましめず。然るにいづれの所より來れる流人なるにや、傍若無人に唯獨出失、乃ち五兩の銀を以て彼鎗棒を使ふ漢子に賞し、我が此揭陽鎮の威風を滅しぬ。このゆゑに我かの流人を打んとせし處に、鎗棒を使ふ膏賣暗かに後ろより來つて、我を踢倒し大に辱しめを蒙らせり。我是を憤ること骨髓に徹し、終に仇を報いて恨を雪がんと欲し、揭陽鎮の酒店大火店等に觸て彼流人に宿を借さしめず。彼今宵路に迷はん所を追詰て討んと圖り、健なる漢子共を催し、先づ膏を賣る漢子は、方々客店を搜して遂に尋ね出し、痛く數十鞭打て今都頭が家の梁に吊置ぬ。明日彼を粽のごとくに捆り、卽ち江中に沈めて這恨を雪ぐべし。唯流人が行方をしらず、未だこれを捉す。遍く酒店打火店等を搜しけれども、曾て其消息なし。此故に我兄を呼起し、共に追かけ行んと欲す。太公の云、汝何ぞかく非道をなすや。彼流人自ら銀有て膏を賣る漢子に惠ぬるは、是一點の厚意なり、汝何ぞこれに關らん。汝今日彼に打たれたりといへ共、身體傷なはず、唯宜しくこれを忍びて穩便に靜るべし。汝が兄若し萬一汝が人に打たれたることを聞かば、立處に汝が相手を搜し出し、性命を害すること有らん。汝宜しく我が諫めに隨づて今宵は快く歇むべし。必ず半夜三更に馳て、門を敲き戸を打ち、妄りに村中の人を鬧がすことなかれ。汝もすべからく陰德を積べし。陰德あれば陽報あると云ぞや。彼大漢子父が諫言を耳にも聞入す、則ち朴刀を提げて後亭を望て入しかば、父太公も同じく後へに隨つて馳入けり。宋公此言を詳かに聞て大に驚き、則ち兩人の下官らに對して云けるは、我が禍いかんぞかくのごとく毒惡なるや。たまたまに仇を免れんとして、却て仇人の家に宿を借ぬること命の拙なき所以なり。然れ共三十六計走るを上計とすと云なるに、我が輩唯宜しく此處を逃出でん。もし彼漢子我が輩此に在る事を知らば、必定性命を害すべし。縱ひ父太公我が輩がことを云はざるとも、家僕等いかんぞこれを云はざらん、畢竟此處に懇ひがたし、早々用意を調へ走るべし。兩人の下官らが云、押司の言尤も可なり。事已に此に到る、一刻も遲疑すべからず、速に忍び出て逃げ行かん。宋江が云、我が輩若し大路より逃ば、必ず過有らん。唯此壁を鑿ち孔を明、此處より出で小路を馳んとて、宋江自ら枷を提げ、下官兩人は包袱裝を負ひ、三人暗に用意を調へ、遂に壁の上に大いに穿を開け、三人相續いて鑽り出で、一時程にして前面を見るに、蘆葦茫々と茂りて江中に充滿しぬ。此處は則ち潯陽江なり。斯る處に遙か背後より若干の人の聲として、賊配軍走ることなかれと呼はり、毎手に火把を揮照して飛がごとくに赴來る。宋江是を聞て云、上天某を棄給はずんば、一命を救ひ給へとて、三人同じく蘆葦の內に入て身を躲し、

暗に頭を轉して背後の方を望みみるに、火把漸々近づきしかば、宋江等三人いよ〳〵肝を消し魂を落し、又蘆葦の内を爬廻りて、隱に身を藏さんずる處もやあると只顧尋ねけるに、此處は本大江の側の灣港にして、尤も希有の惡所なり。此時宋江大に嘆息し云けるは、我早くもかゝる禍あることを知らば、唯梁山泊に留り、一命を全うして再び時を得ば、老父へも孝を盡さんものを、誰か識らん、今此處に於て非命の死を遂んとは、嗚呼時なるかな、嗚呼命なるかなと、頻りに心を惱ましけるに、彼追て趕のものども、はや前面に至りけり。宋江已に危急に臨みし處に、忽然として一艘の小船蘆葦の内より漕出しかば、宋江忙がしく向ひ進みて云けるは、いかに船家長、我が輩三人を其の船に乘らしめて危き命を救ひくれんや、然らば我重く汝を賞すべし。船家長が云、汝三人は原何人にて何れの處よりいづれの地へ行かんとて此に至るや。宋江が云、背に强盜有て我が輩を追ぬるゆゑ、直ちに走りてこに至れり。汝早く船を貸て我輩を渡らしめよ、我多く金銀を以て此勞を謝せんぞ。船家長此一言を聞て心中に悅び、則ち船を漕て岸邊に着ければ、宋江等三人忙がしく船の上に跳乘り、先づ吻と息を續けり。此時二人の下官包袱蘊を把て、船艙の内に投入、又一人の下官は水火棍を以て急に船を挽開きければ、船家長は櫓を搭て船を搖し、暗に彼包袱裝を投たる音、好く響きたるを聞て、心中にこれを奪ひ取らんと圖りて大に悅び、遂に船を江心に搖出せし處に、岸の上の一夥の人早く灘の邊に追至て、十四五の火把を揮照し、頻りに喊き叫んで躁動す。其内首たる二人の大漢子は各手に刀を提げぬ。其外二十餘人の者共は都て鎗を拿棒を拽口々に大音揚て呼り云けるは、汝船家長早く其船を漕回せ。もし然らずんば汝も共に殺すべきぞ。宋江は兩人の下官と俱に艙の内に隱れ居て云けるは、船家長必ず船を漕回すことなかれ。然らば我重く汝に金銀を與へて此恩を謝せん。船家長只頭を點て口に應へず、只顧上流を望んで漕ぎ行きけり。岸の上の諸人これを見て、大に呼はつて云、船家長汝いかんぞ船を回さゝるや。必ず汝も共に殺さんに、其時後悔することなかれ。船家長これを聞て大に冷笑ひ、尙船を漕て上流へと走りければ、岸の上の者共大に焦燥て呼はりけるは、汝船家長直にかくのごとく大膽なるや。速に船を漕ぎ返し禍を免れよ。船家長冷笑つて答へけるは、我はこれ張船家なり。必ず來て我を犯すことなかれ。上の大漢子が云、もし果して張船家なれば、我等兄弟を見たるや。船家長が云、我原來眼明かなり、いかんぞ汝らを見ざらん。岸の上の大漢子が云、汝既に我を見たるぞならば、我爲にはやく其船を漕回せ。我汝に一言を語らん。船家長が云、汝若し事あらば明日來てこれを語れ。今宵は我急事有りて急がしく船を進む。再び漕返さんこと能ふまじ。岸の上の大漢子又云く、汝忙しく船を進むと云は、其流人等三人に賴まれてならん。我急に其賊配軍を捉へんと欲して、此處に馳至りぬ。汝よろしく其三人を我に還せ。船家長が云、此三人は我が爲には親類なり、汝必ずこれを望むことなかれ。彼大漢子が云、汝先づ漕ぎ回せ、我宜しく汝と商議せん。船家長が云、我偶此親類を接へ夜飯の助けを求めんと欲するを、何ぞ汝に送つて汝を樂しましめんや。汝

兩人必ず我を恨ることなかれ。他日對面致さんとて、一向船を漕上る。宋江艙の内に在て暗に兩人の下官に對して云けるは、此船家長我が輩三人が命を救はんと欲して、斯彼等に對ひ分說をなすこと此恩尤も大いなり。若這船に遭はずんば、終に一命を害せられんに、天の佑を蒙て幸ひ急難を免れたりとて悅ぶこと限なし。此船家長は再び跡をも顧みずして漕ぎしかば、岸を離れしこと漸〻遠かりけり。宋江艙の内より頭を出して岸の上を望見るに、十四五の火把盡く皆蘆葦の内に亂れ入り、猶紛々として明かなり。宋江心中に深く天地を謝しにけり。是時船家長歌を唱ていはく、

老爺生長在二江邊一　不レ怕二官司一不レ怕レ天
昨夜華光來慈レ我　臨レ行奪下一金磚

宋江等三人は艙の内に在て此歌を聞き、各心大に驚きて云けるは、此船家長が歌の意は必定蹊蹊あらん。最疑しきことなりとて、三人暗に議論區々なる處に、彼船家長俄に櫓を拖起て艙の前に走り寄り、則ち宋江等三人に對して云けるは、汝等三人、一人は流人、二人は監押の者と見えたり。先づ汝兩人の監押のものは常に罪人をつれて、多くの賄賂を貪り、專ら不仁のことをなして己を利せんと欲す。是大惡人なり。又一人の流人は原官軍とみえけるが、這回罪を犯して流人となるも、定めて不善のことをなしたるに疑ひなし。三人板刀麵を食せんと欲ふや、又餛飩を食せんと思ふや。宋江打笑つて云、足下は何の戲れを云給ふや。其板刀麵と餛飩とは世人皆これを好んで食する者多しといへ共、船中に於て焉んぞよくこれを得んや。船家長大いに怒て云く、我が云ふ所の板刀麵と餛飩とは、世間にある所と同じからず。我に一挺の名刀あり。乃ち此刀を以て汝らを水中に斬込を名づけて板刀麵と云。又汝等が衣裳を剝取赤條になして江中に推込を名づけて餛飩と云。汝らが望に依て是を行なふべきぞ。宋江此言を聞て大に驚き、卽ち兩人の下官に對して云けるは、誠に古の語にも禍雙び至ることなし。禍單り行かずと云は、今宵我身の上に知りぬべし、嗚呼拙なき運命かなとて、嘆息して止ざりしかば、船家長又怒て云、汝三人宜しく商議を遂て死を速にせよ。宋江が云、我は是罪を犯して江州に流さるゝ罪人なり、汝もし一點も惻隱の心あらば、我が輩が一命を饒せ。船家長眼を睜開て云、汝何ぞ面皮厚きことを云や、三人は扨置て半人も饒すまじ。我は是張爺々と云者にして、專ら人を殺し火を放ちて浮世を樂しむ、汝かならず妄想を起して命を助からんと欲することなかれ。宋江又哀しみ告げていはく、我們が包袱の内の、金銀財帛衣服等數を盡して汝に與ふべき間、唯命計を助けよ。船家長聞も敢ず、則はち明晃々する刀を拔出し大に怒り吼ていはく、汝三人多く詞を費さんより、快く死を被れ。此の時宋江天を仰ぎて歎じけるは、我素より天地を敬せずして父母に孝ならざりしゆゑ、罪を犯し身を亡すと云ひ、殊さら辜なき兩人の下官に連累を蒙むらしむること、我あにこれを忍びんやとて、流るゝ泪は恰も降る雨のごとくなり。兩人の下官宋江に向つて云けるは、押司悲しみ給ふことなかれ、我が輩押司と一處に死なば、是則はち今生の本望なり、何ぞ再三これを痛まんや。船家長

又大に呼つて云、汝三人はやく衣裳を脱で水中に跳入れ。もし然らずんば我此刀を以て水中に斬込んとて、手中の刀を輪して閃かしければ、宋江等三人互に相抱き、已に江中に跳入らんとせし處に、江面に櫓の音響きて忽ち一艘の小船飛がごとく漕來りける。其船の上には三人の漢子あり。其内一人の大漢子は船の表に立ければ、二人の漢子左右に分れて櫓を搖し、はや宋江が乘たる船の前に至り、彼大漢子先づ大音聲に呼はり云けるは、其船は誰船なれば、此處に於て私に商賣をなすや。船の上の貨我もこれを分べきぞ。這船の船家長暫く頭を擡げ、彼船の大漢子を見けるが、忽ち打笑て云けるは、我は只誰なるらんと疑ひしに、李長兄の船なるよな。長兄も定めてよき商賣有りてこそ、此邊には出給ひつらんに、何ゆゑ我を携へ給はぬや。彼大漢子が云、かく云給ふは張大哥敬ふこ　にてはあらずや。汝此處に在つて獨り自ら福ひを得給ふよな。船中の貨嘸重からんと戯れけり。

船火兒夜潯陽江を鬧す

宋江を乘せし船家長答て云、今宵不圖福ひを求めけるが、若しこれを語りなば長兄も掌を敲て咲ひ給ふらん。我頃日博奕に輸て半錢の下稍もなく、獨り寂寞にして灘の邊に漂ひける處に、岸の上に一夥の人來て、三人の漢子を尋ねけるに、這三人の漢子蘆葦の内より出て、我等に乘らしめよと佗しゆゑ、我これを許して乘らしめけるに、頗る物有りと覺えて包袱裝を投たる響き、凛々と耳に轟ぬ。かの大漢子また問て云、其三人はもと何者なるや。船家長答へて、兩人の下官一人の流人を監押して來りけるが、原何國の者かは知らね共、江州に流さるゝよし語りぬ。又彼を追て來りし岸の上の者共は、乃ち揭陽鎭の穆家兄弟兩人なり。彼ら兄弟も必定此流人が物あるを見て、奪ひ取らんと計りしに疑ひなし。彼大漢子これを聞き、忽ち驚て云、其江州に赴く流人と云は、恐らくは我義兄にはあらずや。何とやらん疑はしと云ければ、宋江船艙の内に在て、彼大漢子が聲を聞しに、少し聞慣たる聲なりしかば、忙はしく呼はつて云ひけるは、其船の豪傑は誰人かはしらね共、願くは宋江が一命を救ひ給へ。彼大漢子宋江と云し二字を聞て、大に驚き慌てゝ云けるは、扨こそ我が義兄宋押司なり。誠に危き急難かなと、いまだ云も終らざるに、宋江はや艙の内より走り出、星の光明かなるに乘じて彼船を見るに、果して一人の大漢子船の頭に立出ぬ。是則混江龍李俊なり。兩人の艫を搖漢子は、乃ち一人は出洞蛟童威、一人は翻江蜃童猛なり。此李俊宋江の二字を聞て大に驚き、忙はしく此船に乘移りて、則ち宋江が手を携へて云けるは、長兄危き難に逢給ひて、嘸恐怖を受け給ひつらん。某今少し遲く至りなば、必定長兄の性命を誤まつべし。今日某家に在りしかども頻りに胸躍つて坐立安んぜず。自ら心を慰さめんが爲に、一葉の船に棹さして此邊に漂よひ來り、想はず長兄に遇て此急難を救ふこと偏に天の引合せなり。先づ宜しく心を安んじ給へとて、悅こぶこと限りなく、彼船家長此光景を見て、只惘然と呆れ、暫く聲をもなさゞりけるが、漸く心を納めて李俊に問て云けるは、李長兄此流人を呼で宋江と云給ふは、但し山東の及時雨宋公明にてはあらずや。李俊が云、這人其及

時雨なり。卽ち彼船家長これを聞て、忽ち榧に拜伏して云ひけるは、及時雨宋長兄にてましますならば、などはやく姓名を知らしめ給はざりしぞ。已に仁兄の命を害せんとせしこと、全く知らざるの過ち、願くは罪を宥し給へ。宋江是を聞て、則ち李俊に問て云けるは、此豪傑の高姓大名はいかん。李俊が云、長兄は未だ知り給ふまじ。則ち此豪傑は某と義を誓ひし兄弟なり。原來小孤山の下の人にして、姓は張名は橫綽號は船火兒と申。專ら此潯陽江に在て、これらのことをのみなして過活とす。宋江此時兩人の下官と共に覺えず一笑を催しけり。こゝに於て二艘の小船繩を引て相攏ひ、直に漕ぎて灘の邊に至り、則ち宋江並に兩人の下官を扶け岸に上らしめ、李俊又張橫に對して云けるは、我常に賢弟と語りぬる、天下第一の義士山東の及時雨鄆城縣の宋押司に、今日天より良緣を假し給ひて相見えけるに、好々面を識認置かんや。張橫これを聞て、再び沙の上に拜伏して云けるは、某常に李長兄と共に押司の大德を稱して仰ぎ慕ひけるに、今日偶尊顏を見奉ること喜び望外に出て雀躍に勝ざるなり。伏して望むらくは、無禮の罪を免し給へ。宋江忙はしく禮を還して張橫をみるに、身の丈七尺餘りにして兩眼の光りは星のごとく、鬚は左右に別れて腮に垂れ、相貌凜々として威風堂堂たり。張橫又宋江に問て云けるは、長兄は何等の罪を犯し給ひて江州に流され給ふや。李俊此時宋江が罪を犯したる次第を備細に語りて張橫に聞かしめければ、張橫大に歎じ、心中いよ〳〵宋江を憐み、乃ち又宋江に語て云けるは、某同胞の弟一人有りけるが、尤も勇にしてしかも相貌賤しからず、

全身雪よりも白うして言語さわやかなり。水の上に浮むこと四五十里にして、尙ほ倦ます。水の底に沈むこと七日七夜にして更に疲ず。武藝は名ある師に從がつて全く練熟せり。人皆彼に綽名をつけて浪裡白跳張順と稱す。當初某兄弟は唯此潯陽江に在つて、世にまれなる業をなして錢財を求めぬ。宋江がいはく、世に稀なる業といふはいかん。願はくはこれを聞くべし。張橫が云、某兄弟兩人若し博奕に輸たる時は、某先づ一艘の船に乘つて岸邊に來り、乃はち船賃を輕く定めて乘合の客を渡すに、彼慳客商人等船賃の輕きを悅んで盡々く先を爭うて群り乘せ、此時弟張順も詐て旅客の體に粧ひ、同じく乘合の客に雜て船に乘り、客已に滿ぬる時、某船を半江の內に漕出し、乃ち右の手には刀を拔き持ち左の手には籃を提げ、諸〻の客に對し三貫文の錢を求めて云ぬるは、今日は船賃を輕く定めしか共、船を急ぐべき間、此賞として乘合中より三貫文の錢を輳めて賜はるべし。若し然らずんば、決して船を動かさじとて、先づ張順に問て錢を求む。張順詐て大に某を罵り、旣に爭を惹出して互に拳を擧て打合、某頓て張順を捉へて江中に投落し、尙眼を怒らし諸〻の客を嚇し、是非三貫文を求むるに、一船の商客等張順が今水中に投落されたるを見て大に驚き、忙はしく三貫文を輳て我に與ふ。我此時船を岸に着て客らを上げしむ。張順は水底に淬入してはや岸に上り、暗に乘合の客等が四方へ散て去るを待て、兄弟公けに此錢を分取、各又博奕の宿に行きて賭をなす。是れ則ち世に稀なる業なり。宋江是を聞て又問て云、足下兄弟今に此商賣をなすや。張橫が云、今は某ら

此業を改め某は唯潯陽江の内にて海賊をなす。弟張順は今江州に在て魚を商賣す。長兄果して江州に到り給ふなら、某一封の書を寄、弟張順にも押司のことを告げ知らせんと欲へども、只恨むらくは某文字を知らざるゆゑ、書簡を修ふる事能はず。李俊が云、我が輩村里に馳て一人の先生を頼み書簡を修ふべきに、宜しく我に隨て來り給へとて、則ち童威童猛を留めて船を守らせ、李俊は張横とともに、宋江ならびに兩人の下官を引て、五人同じく村里を望んで馳來り、纔か半里計に至て對面をみるに、若干の炬火猶岸の上に在て明亮なり。張横これを見て云けるは、岸の上に火把あるは必定彼兄弟未だ回らざると覺えたり。李俊が云、彼兄弟と云は誰なるぞや。張横が云、揭陽鎭の穆家兄弟兩人のことなり。李俊が云、果して穆家の兄弟ならば、我はやく彼らを呼來つて、宋押司を拜謁さすべし。宋江駭いて賢弟其事大に不可なり。彼兄弟は我を捉へ殺さんと圖るなり。いかんぞよく相見せんや。李俊が云、長兄必ず心を安んじ給へ。彼兄弟斯なせしは、長兄を知らず、凡々一列の人と見たればなり。彼らも原我が輩と一路の者共なれば、必ず長兄を敬まふべし。只宜しく我が所爲に任せ給へとて、李俊頓て手招して、大音聲に呼りければ、彼火把を拿たる一夥の人、一齊に咄と馳來り、遂に李俊等が前に至てこれをみるに、李俊張横恭しく宋江を尊んで左右に侍りしかば、彼兄弟大に驚ろき、長兄ら兩人は、いかんぞ此流人を尊敬し給ふや。李俊大に笑て云、足下兄弟此流人を誰と思ひ給ふぞ。兄弟の者が云、吾輩未誰とは知らざれ共、彼今朝揭陽鎭に在て、彼鎗棒を使ふ膏藥賣に五兩の銀を賞して我揭陽鎭の威風を滅しぬ。我此ゆゑに彼を捉へんと欲す。李俊が云、我常に足下等兄弟に語りて其德を吹噓したる山東の及時雨宋公明とは、乃ち是れ此人のことなり。汝兩人もし天下第一の英雄を見識らんとならば、更にいづれの時を待たん、快く下拜せられよ。那兄弟聞も敢ず、忽ち身を翻して地上に拜伏し、再三頓首して云けるは、某ら兄弟押司の大名を聞こと素より久し。今日幸ひに尊顏を拜謁し、何の悅びかこれにしかん。願はくは押司を犯せし罪速にこれを免し給へ。宋江急に兄弟の者を扶け起して云、何爲かく慇懃の言に及ばんや。願はくは、兄弟の大名を知らしめ給へ。李俊が云、此兄弟兩人は家富隆えて遠近に隱れなき豪傑なり。則ち兄を穆弘と號し、沒遮欄と諢名す。弟を穆春と號して小遮欄と諢名せり。乃ち揭陽鎭を覇て威を諸人の上に振ふ。我此所には三覇と申て三箇所を覇る者あり。押司は未だこれを識り給ふまじ。某今具に語り申さん。揭陽の嶺の上下は某と李立とこれを覇りて一覇とす。潯陽江は張横張順の兄弟これを覇つて一覇とす。揭陽鎭は穆弘と穆春兄弟これを覇つて一覇とす。則ち此三ヶ所を覇る者を名付て、當地の三覇とは申すなり。宋江是を聞て大に悅び、乃ち穆弘兄弟に對して云けるは、果して李俊が云ごとくんば、是皆自家の昆弟なり。此上は只かの薛永を我に還し給へ。穆弘兄弟が云、薛永とはかの膏藥を賣て鎗棒を使ひし漢子がことならん。渠は向に客店より尋ね出し、痛く數十鞭うつて梁の上に吊起置捆つて潯陽江に沈めんとせしが、少刻これを饒し、押司に還し奉らん。先づ宜しく私宅に導て、三盃を進め申さん。願く

は押司尊歩を移し給へ。李俊が云、是大に可なり。我押司を諫めて倶に往べしと已に領掌しければ、穆弘やがて二人の家僕を留て、童威、童猛兄弟に替て船を守らしめ、則ち童威兄弟をも倶に邀へ、諸の豪傑一同に穆弘が館へと急ぎけり。穆弘兄弟は先づ人を家に回し、豫じめ酒宴を美々しく設けしめぬ。已にして宋江等打連て穆家に至りしかば、時はや五更の初めなり。各草堂の上に登りし處に、穆太公も亦草堂に出て、宋江等に對面し、賓主座を分つて兩邊に列座せり。宋江暗かにかの穆弘を見るに、面は銀盆に似て、身は玉頭の如く、眼は圓にして眉は細かなり。相貌は端然威風嚴然なり。宋江此體を見て、獨り自から心中に悅びけり。諸の豪傑談話いまだ久しからざるに、天色已に明て鳥の聲後園に噪がし。此時穆春彼膏賈薛永を延て草堂に至り、同じく一所に參會す。穆弘頓て酒宴を草堂に具へ、慇懃に宋江等を欵待、新たに飲酌を催しければ、其日は衆皆穆弘が家に在つて、各身の上に經たりし事共を說話し、覺えず紅日又西山に沈みければ、其夜は都て穆家に一宿し、其翌日宋江別れを告げて打立んとしけれ共、穆弘兄弟肯て饒さず。再應扯留て逗留させ、諸の豪傑と共に恭しく宋江を導て、揭陽鎭の街に遊行し、名所舊跡一々これを觀せしめ、翌日宋江又辭別に及ばんとするを、穆弘兄弟苦に留め、一連に三日滯留しける處に、宋江深く日限の差あらんことを怕れ、再四別れを告げければ、穆弘兄弟終に留ること能はず。其の日又豐かに酒宴を設け、宋江を饗應半夜に至つて宴罷り、各一間に入て歇みけり。翌日は宋江未明に起て旅粧を調へ、則ち穆太公幷に諸豪傑に別れを告げ、又薛永に示しけるは、賢弟は暫く穆家に數日逗留し、頓て後より江州に來て消息を通じ參會せよ。穆弘兄弟が云、長兄必ず心を安んじ給へ。我ら兄弟肯て薛永を憐れみ、諸事宜しく商議を遂げ、後より江州に遣はすべし。宋江これを聞て顏色殊更悅びけり。穆弘兄弟餞として、一盤の金銀を宋江に送り、又若干の碎銀を兩人の下官に與ふ。張橫は人を賴みて一封を修のへ、宋江に寄せて弟の張順が方へ送りける。宋江穆家父子へ懇情を厚謝し、下官と共に立出ければ、諸の豪傑直に潯陽江の邊に至り、則ち一艘の船を假て、宋江等三人を乘しめ、衆皆別れを惜み、互ひに涙を洒ぎ、遂に海陸に袂と分ちければ、諸の豪傑等は再び穆弘が館に至り、其夜各私宅へぞ歸りけり。宋江配所に到着よりの次第は次の卷を見て明なり。

或人の曰く、此卷中船火兒張橫が船に、宋江と下官兩人を乘せ、遙に漕去歌を唱ふ。五言絶句一章出たり。然て宋江諸豪傑に別れ、江州の配所に赴くに依て、張橫其弟浪裡白跳張順が方へ書簡を送らんに、字を識らざれば自ら書く事能はず、人を賴みて書簡を修ふるとあり。尤も無筆も歌は唱ふべしと云ば、古句なるべし。昨夜華光來趂我と云ふ當意無筆の口より出づべきや、此書の作者の意はいかん。

四編卷之五

宋江神行大保に會す

偖も宋江は揭陽鎭の穆弘其外豪傑の面々に立別れ、潯陽江の船に乘り、順風に帆を拽走せければ、はやくも江州の湊に到着し、下官と倶に江州府の前に至る。此時府尹は廳上に出諸役人と共に、公事を商議して居たりける。江州府の知府姓は蔡、双名は德章と號す。すなはち當朝蔡大師蔡京が第九の子なり。江州の人皆蔡九知府と稱せり。其人となり毒惡にして貪欲無道といひ、奢をなすこと言語に及びがたし。原此江州は錢量洪大にて、人富物饒なる繁昌の地なるゆゑ、蔡大師己が子を此處に遣し知府たらしむとかや。兩人の下官宋江を監押して町下に至り、役人等に就て恭しく公文を呈す。蔡九知府流人を引出させ公文を讀了り、宋江が人物凡からざるを見て、則ち問て云けるは、汝は人品も賤からざる者なるに、いかんぞ罪を犯しぬるや。且汝か頸枷の上に、本國よりの封なきはいかん。兩人の下官が云、道中しば〳〵春雨に打濕され、數日以前遂に廢らしめ候。知府が云、先其罪人を牢城營裡流人を入置所なりには遣さんとて、早速當府の下官兩人を差添、宋江を營裡へ送せければ、下官命を承り、宋江と濟州府の下官とを引て州裡を馳出ける處に、此邊に酒店ありしかば、宋江三兩の銀を出し、江州

の下官に與へ、乃ち酒を買せ飲しめけるに、這兩人の下官大にこれを悅ぬ。已に營裡に至りしかば、先宋江を房間の內に留め置き、己は急に管營差撥が方へ行て、斯と告げ宜しく宋江を憐み給へと擅撥て、遂に江州に回りけり。扨濟州より監押して來れる兩人の下官、包袱裹を宋江に還し、再三謝して云けるは、某ら今次押司に從て當地に至る途中、頗る恐怖數々なりしか共、又多く金銀を得て、想はざる福を蒙りしは、偏に押司の賜なり。押司は猶恙なく凌給ひて、異日歸鄉の時を期し給へとて、哭哭別れを告、江州府に出て返簡を乞ひ、濟州へ歸りけり。宋江は營裡に在つて、且差撥に十兩の銀を送り、管掌には又二十兩の銀を送り、其他營中の軍卒等に、一々銀を與へしかば、宋江を愛せざる者一人もなかりけり。管營は賄賂を得て大に悅び、頓て宋江を廳前に呼入卽ち頸枷を除かしめて云けるは、汝は這遭濟州より來りたる、新參の流人よな。我朝の太祖武德皇帝よりの、聖旨事例有つて、凡新參の流人、始て營中に入者には、殺威棒と云て一百棒を策ことあり。汝すべからく此棒を請よとて、遂に左右に命じ打たしめんとせし處に、宋江謹で訟へけるは、某途中に於て、風寒の病に犯され、今に快よからず、願くはこれを察し給へ。管營が云、汝實に病有ば、殺威棒を受がたからん、我まづ今日は此棒を免すなり。他日病の痊るをまつてこれを行ふべし。汝は又縣吏をもなしたる者なれば、當營の抄事房に遣し、抄事の職をなさしめんとて、則ち抄事房に送らせしかば、宋江深く是を謝し、先はじめの房間に歸り、包袱蘊を取り直に抄事房に至て休し處に、諸の流人共宋江がかく光景

好を見て、盡く酒を携へ來りて、宋江を賀しければ、翌日宋江も亦酒食を具へて、諸〳〵の流人共を邀へ、終日酒を酌で樂みけり。これより宋江は時々彼差撥牌頭を抄事房に邀へて、酒肴を進め、又毎度禮物を送りければ、纔半月ばかりの内に、滿營の人と交りを結び、一人も悅ばざるはなかりけり。宋江一日差撥を抄事房に邀へ酒を酌ける處に、差撥宋江に語て云けるは、我前日押司に約しぬる、節級に送る常例錢は、何故未だ送り給はぬや。若節級明日これを問に及では、頗る光景惡からん。某も又彼に見えん時、云ふべき詞なし。只宜しく早く常例錢を送り給へ。宋江が云、此事少しも妨なし。彼若常例錢を求んと欲せば、我却て一錢も與ふまじ。若差撥長兄自家の入用ならば、何時なりとも我に問てこれを求め給へ、我樂んで足下に送るべし。節級が方へは、半錢も送るまじ。彼若明日我に問て、此錢を求ることあらば、我又是に答ふべき詞有り、必ず我が爲にこれを憂ひ給ふな。差撥が云押司定て彼がことを知り給ふまじ、彼が人となり大いに利害、殊更剛勇なるに仍て、動不動人を打人を羞しむ。若押司彼に常例錢を送り給ずば、彼必定某がいまだ押司に告知せざるかと恨むべし。宋江が云、足下必ずこれを怕れ給ふべからず。彼憤りて如何ともいはゞ、只よく彼にまかせて云しむべし。我常例錢を送て彼に與ふとも、彼却て請ざることあらん。足下後に自ら是を知り給ふべしと、いまだ云も了らざるに、一人の牌頭官來て告けるは、節級今廳上に出給ひて、大に怒り罵りて云給ふは、新參の流人何ゆゑ常例錢を送らざるや、早く彼を拖り來れと命じ給ふ。早々廳前に往給へ。差撥これを聞て、大に驚き、扨こそ事の破れに及べり。今更これを如何せんと、只顧慌て忙きけり。宋江打笑つて差撥長兄何ゆゑ慌給ふや。我先廳前に往て彼と說話せん。他日又光臨を惠み給へとて、彼牌頭官に隨て房門を出し處に、差撥も同じく門外に出、宋江に示して云けるは、押司必ず何事も忍て慇懃に答へ給へとて、遂に別れて歸りしかば、宋江も亦彼牌頭官に引れ廳前に至りけり。節級凳の上に座し廳中にあり。宋江を見て大に怒り、汝賊配軍誰が勢を假て我に常例錢を送らざるや。宋江が云、汝何ぞ妄りに人の寶を貪るや。常例錢と云は、又誰が汝に許したるぞ、其所以を聞ん。此時左右側に座せし者は、此言を聞て手に汗を握りけり。節級ます〳〵罵て汝奸賊いかんぞあへてかく不禮なるや。我今汝を一百鞭打んとて、左右を顧みるに、兩邊に並居し者共心中に想ひけるは、我が輩こゝに在ば、必定節級が命を請て宋江を策うつことあらん。しかじ此を避往んにはとて、盡く走り出しかば、今の間に左右の人散去て一人もあらず。節級自ら短棒搶取て、宋江を再三罵りしかば、宋江が云、汝再三我を罵り打んとするは、我に何の罪ありや。節級が云、汝今我手下にあるからは、高く咳嗽をなすとも是則ち罪なり。宋江が云、汝たとひ我が過を見出し罪せんと欲ふとも、恐くは未だ死罪にはよも至らじ。節級怒り吼ていはく、汝賊配軍甚麼死罪には至らじと云ぞ。我汝を殺さんは、一つの蠅を殺すよりも易し。宋江呵々と大笑し、我常例錢を送らざるに因て、死罪に當らば、梁山泊の軍師吳學究と通同する者の罪は、何等の刑に處せんや。節級此一言を聞き大に驚き、手中の短棒を撇て、急に問ける

は、汝は今何の言を云しぞ。宋江答て、我は梁山泊の軍師吳用と通同する者のことを云に、汝これをいかん。節級甚だ慌恨宋江を扯住て云、汝の姓名はいかん。梁山泊のことは、汝何れの所に在てこれを聞ぬるか。宋江猶笑て云、我はこれ山東鄆城縣の押司宋江と云者なり。節級これを聞て大に驚き、急に拜を行うて云、長兄は乃ち及時雨宋公明にてましますかな。此處は人の耳目多くして說話するに宜からず、同く城下に馳て平日の懷を語るべし。長兄尊步を移し給へ。宋江が云、某あへて貴公の命に從はん。先暫く待給へ、今房門を關して來らんとて、頓て抄事房に回りて彼吳用が書簡を取て、袖の中に收め、又若干の碎銀を懷中に入、遂に節級と俱に營中を離れ城下に來り、一軒の酒店に入座已に定りしかば、節級先宋江に問て云、長兄何れの處にて、吳學究に遭給ひぬるや。宋江が云、先書簡を見給へとて、彼吳用が寄たる書簡を出し與へければ、節級披讀しこれを袖の內に藏し、卽ち身を驀して宋江を拜しぬ。宋江忙はしく禮を還して云けるは、先には言語を以て多く節級を犯したるに、願くはこれを赦し給へ。節級が云、某は只宋氏の流人新たに營中に至れりと計り聞しゆゑ、常例錢を求んとて想はず長兄に遭ひ、大いに渴想の懷ひを安んせり。然れ共、向には未だ長兄を識ざりしゆゑ、多く威風を冒して罪を得たり。伏して望らくは、これを恕り給へ。宋江が云、差撥先達て節級の大名を稱して某に告しゆゑ、某早々尊顏を拜せんと欲しけれ共、未だ節級の住宅も知らず、想はず延引今日に至れり。某彼常例錢を送らざりしは、我熟々慮るに、若これを送らずんば節級必ず自ら營中に出て、これを求め給ふこともあらん。其時宜しく尊顏を拜し、聊か平生の想を慰んと欲し、且梁山泊の書簡も猥りに出しがたく、良に以有て故意常例錢を差控、久しく送らざりしなり。某毛頭吝惜て遲々せしにあらず。願くは明らかに推察し給へ。此節級は江州兩院の押牢節級戴院長戴宗と云ものとて、吳學究と交り厚き知己なり。宋の時は金陵一路の節級を家長と稱し、湖南一路の節級を院長と稱す。よつて戴宗を呼て戴院長と云なり。此戴宗原來奇妙の道術を知れり。若急事有て遠路に赴く時は、二つの甲馬を双の腿に拴つけて、神行の法を行ふに、一日の內に五百里の路を行。若四つの甲馬を用る時は、一日の內八百里を行。此に依て神行太保戴宗と云慣せり。其形面濶く口方にして、眉淸く目秀て威風凜然として相貌儼然たり。此時宋江戴宗互に來情去意を語りて共に悅び、頓て酒店の主を呼で酒食を求め、已に盃を執て相勸め、更に隔意なく說話に及び、宋江道中にて餘多の豪傑に出遇たることを云聞ければ、戴宗も心を傾け膽を吐て、吳學究と通往することを告げ、眞に心腹を述て打解在處に、忽ち樓下に鬧ぐ聲ありて、一人の家僕忙しく樓上に跑上て、則ち戴宗に向ひ云けるは、今我店を鬧しむる人あり。是は院長ならでは靜ること能ず。願くは樓を下て彼人を諫め給へ。戴宗が云、其は誰なれば擅に人家を鬧しむるぞ。家僕が云、彼人は是常々院長に從て我店に來り給ふ、彼鐵牛李大哥なり。今主を尋ね錢を借んとて、斯店を鬧しめ給ふ。戴宗笑て云、我は只何等の人なるにやと思ひしに、渠又來て人家を惱すや。押司暫く此に在て待給へ。我少刻彼を引て來る

べしとて、遂に樓を下り、頓て一人の大漢子を引て、再び樓上に登りぬ。宋江彼漢子が形を見るに、面色は黑き熊のごとくにして、身肉は鐵牛に似たり。怒る頭髮は鐵の刷に似て、睨む眼睛は日の光のごとし。眉の毛は倒に上て、腮鬚は双に分れ、聲は鐘に似て勢は虎の如し、誠に希有の勇士なり。宋江先づ戴宗に巨細を問ふに、戴宗が云、這人は某が手下の小牢子にして、姓は李名は逵と號す。原沂州沂水縣百丈村の產なり。異名を黑旋風李逵と申、又李鐵牛とも云慣せり。彼前年人を打殺して故郷を走出、其後御赦免を蒙りしか共、終に流落て當地に逗留す。彼酒の癖あしき故人皆是を怕る。彼又能二つの斧を使ふ。李逵も亦宋江を見て戴宗に問けるは、彼人は誰なるぞや。戴宗がいはく、汝も今天の引合せを蒙て此押司に見るなり。汝常に此押司を訪んと欲して、毎度其德を稱したるが、いかんぞ拜を行はざるや。李逵が云、我が訪んと思ふ英雄は、普天の下に於て獨山東の及時雨黑宋江のみなり。此者何ぞ黑宋江ならんや。戴宗大に責て云、汝いかんぞ斯、上を犯すの言語を云や。宜しく黑の字を忌べき處に、直に黑宋江と稱するは、甚だ以て非禮也。此長兄則ち及時雨宋公明なり。汝猶下拜をなさずして、何れの時を待んとするや。李逵が云、もし實に宋公明ならば、我肯て拜すべけれ共、恐らくは詐りもや有んずれば我豈容易拜を行んや。宋江が云、某實に山東の黑宋江なれ共、いかんぞ足下の拜を勞すべき。李逵是を聞、忽ち掌を鼓大に欣び躍て云、長兄果して宋押司ならば、など疾某に知らせて悅ばしめ給はざりしぞとて、忙しく身を翻して拜をなしければ、宋江急に禮を還して、豪傑先拜を休て座し給へ。戴宗又李逵に對して云けるは、賢弟宜しく一處に酒を酌んで談話せよ。李逵が云、今日初めて義士に遇、心上大に趣きあり。寧大碗にて酌べしと、遂に戴宗が次に坐しけり。宋江が云、豪傑は何ゆゑ先に樓下に在て、鬧ぎ給ひしぞや。李逵が云、某前日一錠の大銀を一箇の人に預け、先十兩の小銀を借て使ひし故、今日此銀を贖回して、其餘りを使んと欲し、乃ち這店の主に彼原銀十兩を借んとしけれ共、這主我が還まじきを怕たるにや、敢てこれを借さず。この故に我是を憤り、店を微塵に打碎んと欲せし處に、院長哥長兄と云ふごとし來て我を此處に拖上給ひぬ。宋江が云、足下唯十兩の銀を用んに、何の得がたきことかあらんとて、乃ち懷中より十兩の銀を取出して李逵に與へて云、足下宜く此銀を携へ行、那大銀を贖復して使用に備へ給へ。戴宗はこれを見て、心中に却て悅ばざる體なり。李逵銀を得て云けるは、兩人の長兄猶此處に在て待給へ。某少刻銀を贖て再び來らんとて、遂に樓を下て馳出けり。戴宗が云、長兄今李逵に銀を借し給ひしこと大に不可なり。宋江が云、其故はいかんぞや。戴宗が云、李逵は原直實の者なれ共、唯酒を貪り賭を好むの病あり。博焉ぞ一錠の大銀あらんや。今彼十兩の銀を還して大銀を贖ると云しは、乃ち是僞なり。必定賭渠坊に往て博奕をこそなすべし。若贏なば彼十兩の銀を長兄に還すべけれども、輸なば一錢も還すまじ。萬に一つも贏ことはあらじ。然らば某却て何の面目かあらん。宋江咲て云、院長何ぞ斯のごとき、隔心のことを云給ふぞや。豪傑にはま丶酒と博奕の癖あり安し。僅十兩の銀何ぞ英雄に惜むべき。

彼若輸なば又再び借べきに、必ずこれを憂給ふな。某彼が氣質を伺ひみるに、本忠直の豪傑なり。是故に我是を愛す。我が所持の銀の有ん限は、豪傑のことに聊惜む所なし。戴宗が云、李逵は本武藝力量は諸人に勝れたれ共、只意麁く膽太く、若酒に醉し時は、妄りに牢中の罪人を鞭打て內外を鬧しめ、某も幾回か其連累を被りぬ。殊更彼途中に於て不平のことを見る時は、忽ち其强き者を打て其弱き者を助け、動不動人の禍を己が身に干て、猶後悔を知らざる愚直者なり。宋江が云、彼肯て此のごとく弱を扶け强を打は、上に傲て下に忍びざるの豪傑、我益これを感ずること淺からずとて、又盞を執て相勸め、兩人再び飲酌を催しけり。此時戴宗が云、城外に出て江中の風景をも見せしめ進せんに、しらず押司は尊步を移し給ふべきや。宋江が云、某素より江州の風景を遊覽せんことを欲すとて、遂に酒店を出て江邊に遊行す。

黑旋風浪裡白跳と鬪ふ

黑旋風李鐵牛十兩の銀を得て、心中想道、宋押司は原我と交りも厚からず、唯一座の初見のみにて、此銀を借し給ひし其志の懇切なること、義を重んじ財を輕んずる天下の英雄とも聞傳へたるのみなりしに、肇て其實を知りぬ。世界普く名を聞ても尊敬すること宜なり。今偶此の處に至り給ひしかば、我幸ひに酒宴を設けて、宋押司を欵待べきに、頃日は連綿博奕に輸、只半錢の貯もあらざれば、三盃を勸め一點の情を表すに方便なし。しかじ先此十兩の銀を下稍として博奕をなし、宜しく數貫文の錢を贏原て、宋押司を心の儘に欵待べしとて、忽ち飛がごとくに城外に跑出、直ちに小張乙と云ふ者の坊頭をなす博奕店に至り、則ち十兩の銀を投出して云けるは、我に十兩の稠馬を與へよ。小張乙が云く、李公は常に勝を急ぎ給ふに依て、却つて負速に至る。宜しく排を微にして本を堅くし死を避活を俟て贏を取給へとて、十兩の稠馬を與へし處に、李逵原來短氣の者といひ、況や今日は別して心忙はしく、十兩の稠馬を二つに分て前後に排り只一打にこれを打輸て、早くも手を空しうしければ、小張乙幷びに諸の潑漢共一齊に咲つて云けるは、李公は今日却つて勝負を常よりも急ぎ給ふはいかん。盡數の稠馬を二ッに排は、原老賭のなさゃる所なり。先暫く酒を酌で歇み給へ。我が輩は尙自から勝負を新め慰んとて、已に李逵を傍に推開しかば、李逵小張乙に對して云けるは、我が今輸たる銀は、人の銀にして我銀にあらず。小張乙が云く、遮莫已に輸給ふ上は、今更これを如何せん。李逵が云く、汝宜しく察して其銀を先我に借せ。我明日母銀に利を加へ償ふべし。小張乙が云く、博奕の上に於ては親子昆弟をも顧ずしてこれを敵とし、互に贏を爭ひ一錢の借貸をなさざることは、豫て是を知り給ふべし。然るを汝此銀を借んと云は、大丈夫の心に背けり。李逵此言を聞て大いに怒り、忽ち衣の袖を卷り起、雷霆の如く吼つて云けるは、汝いよ〳〵其銀を還すまじきや。小張乙が云く、李公常に若干の銀を輸給へども、曾て悔給ふことなきに、今日は何ゆゑ非道を云給ふや。李逵これを聞て、双眼を睜開き、遂に彼の十兩の銀を奪ひ取て、別に又十四五兩の銀を掠め取、尙聲を厲まして

吼り呼はつて云けるは、我常には一錢も賒ざりしかども、今日は緣故有て且此銀を借るに、汝必ず我を惟むことなかれとて、已に跑出んとせしに、小張乙急に走り寄て、取れし銀を奪ひ復んとしければ、李逵大いに狂ひ、先小張乙を地上に打倒し、猶四面八方に跑りて諸の徒者共を盡く踢倒し、自から門を開いて馳出しかば、彼の一夥の人同じく門外に走り出て呼はり云けるは、李公いかんぞ我輩が銀までも奪ひ取り給ひしぞ。宜しく還し給へとて、遙後に隨ひ來つて、近く前んとする者は一人もなかりける。李逵これを耳にも聞入ずして、直ちに馳せ行所に、後に一人の漢子來つて李逵が肩を捕へて呼はりけるは、汝何ぞ他人の錢財を奪ひ取や。李逵大いに怒り、忙はしく首を回してこれをみるに、乃ち戴宗と宋江にてありしかば、李逵忽ち面を紅にして大いに慚て云けるは、兩人の長兄必ず我を責り給ふこと勿れ。我常にはこれらの非道をなさゞりしかども、今日は想はず宋押司の賜たる十兩の銀を輸しゆゑ、再たび償ふべき銀もなく、殊更押司を邀へ一盃を進め申さんことも能はず。已ことを得ずしてこれらのことを惹出しぬ。宋江大いに笑つて云けるは、賢弟若銀を用ゆべきことあらば、只願我に問て求め給へ。今日明に輸たる銀、あに能これを奪ひ回すの理あらんや。速に其銀を彼輩に還し給へ。李逵が云く、左も右も押司の命に背じとて、即ち懷中より銀を出し、宋江に遞與ければ、宋江頓て小張乙を呼で銀を還しける處に、小張乙が云く、某らが本銀十五兩許を取つて、李公の輸給ひぬる銀は再び李公へ還すべし。宋江が云く、汝等が勝し銀何ぞ再たび回さんや。宜しく是を取て回るべし。小張乙は、心中に李逵が仇を挾まんことを怖れしかば、曾てかの十兩の銀を取ずして再三辭退に及びけり。宋江又問て云く、猶李逵に打れたる者有や。小張乙答へて云く、李公に打倒され苦しむ者數箇人あり。宋江が云く、已にかくあらば、此十兩の銀は藥錢として其打れたる者共に與ふべき間、汝此の銀を取て歸るべしとて、再三强て與へしかば、小張乙遂に銀を收め頓首拜謝して回りけり。宋江又戴宗李逵に對して云く、我輩三人同じく酒店に至つて、三盃を酌ば可ならんか。戴宗が云く、幸ひ前面の江邊に琵琶亭と云ふ酒館あり。是は以前唐朝の白樂天が古迹なり。我が輩彼の亭に上り、三盃を酌、なほ其風景を遊覽せば、方によく鬱悶を散ずべし。宋江が云く、若し果して琵琶亭に至つて酒を酌ば、白樂天が故事を思ひ出して、格別に樂しかるべしとて、三人齊しく彼の亭に望で馳來り、頓て亭上に登つて此處をみるに、一邊は潯陽江に寄、一邊は酒店の主が房屋なり。琵琶亭の上にはまた十四五の客座有て殊さら美麗なり。戴宗一ッの客座に入て宋公明を上座に就しめ、己れは主席につき、李逵は其次に座し、三人座已に定まりければ、戴宗則ち酒店の酒保に命じ酒肴を具へしめ、飲酌を始めけり。宋江戴宗李逵と共に數盃を傾けしが、嚮にも酒肆にて酒を用ひし上なれば、宋江は魚辣湯を用ひて少しく醉を醒さんと思ひ、戴宗に問けるは、此處にて魚を食するに、惜らくは新鮮ならず覺ゆ。此地は鮮魚拂底なりや。戴宗笑つて、長兄は何ぞ見給はずや。江中總て魚船なり。江州は原魚米の地なれば、他所に稀なる鮮魚あり。しかも何魚も此江中にあらずと云ことなし。

宋江が云く、我新魚あらんには、些しの魚辣湯を得て聊醒を索めて又酒を酌んと欲す。戴宗自他とも一旦酔を解も可なるべしとて、則ち酒保を呼で紅白魚湯に辣三分を加へて制り來らしむ。酒保諾ひ、少刻して拿來り、一椀づつを三人の前に具ふ。宋江速に是を用ひんとするに、是れ又魚鮮ならず、醃のごとく思はれ、宋江戴宗ともに等しく其まゝさし置てこれを食せず。李逵は悉く食し畢て、兩長兄は何ゆゑ好んで造へしめ、用ひ給はざるや。宋江が云く、何のゆゑにや、魚鮮新ならず味美ならざればさしおきぬ。李逵是を聞て、忽ち酒樓の小厮を呼で云く、此亭にては鮮ならぬ魚を用ひて客の錢を貪るや、速に鮮魚を以て改て制し來らんや。然らずんば我忽ち此の酒樓を粉のごとく打碎かんとて、大いに怒り罵しりければ、此の體に駭き、酒保多く來り、貴客怒りを止め給へ。此の處原來鮮魚多しといへども、唯今は猶船中に有て、いまだ是を賣ず。我が亭の魚も皆昨日の魚なるが、夏なれば今日へ圍ひがたく、せひなく鹽水を以て洒ぎ洗ひ、或ひは冷水を屢替て浸し、暑腐を防ぎし魚なれば、籠の魚のごとくならず。誤て鹽過る時は醃の魚のごときに至る。明らかにこれを察し給へ。戴宗が云く、汝らが云所のごとくば、其理あり。今ははや鮮魚を求め得らるべきや。酒保が曰く、江中に繫といめし漁船行家の主が來るを待得、諸船一同に價を估して倶にこれを賈ふ。此ゆゑに猶いまだ鮮魚を求めがたし、商賣始りし體を見聞次第、又た來て命を承はらんとて、皆一同に退きければ、李逵は先宋江戴宗が殘し置し、二碗を乞取て皆食ひ、自から一盃を篩でこれを飲て云く、今某自から馳て鮮魚兩尾を求め來らん。兩長兄これを許し給へと云けるを、宋江は笑ひを忍へ見て在しが、戴宗ひたすら李逵をとゞめて、其事に馴たる酒保さへ求めがたきと云へるを、他より卒爾に望むとも何ぞ是を得ん。李逵が云く、長兄の言差へり。我自から漁船に應對せば得ざることあらじ、酒保小厮等何をか做得んとて、はや躍り起つて馳んとするゆゑ、戴宗いよ〳〵制して汝行ば又爭論を起さんこと必然なり。我等汝三人は此亭の客なり。何爲汝自から往んや。宜しく彼の酒保を央て豫じめまづ漁人に賣や賣ざるやと問しめ、若し肯て賣ばこれを求め、果して賣ずんば魚牙の主が來るを待ちてこれを求むとも、未だ晩きことあらじ。李逵が云く、我自から馳て鮮魚を求めんに、漁人等何ぞ賣まじきや。若彼小厮を遣はさば必定魚を得がたしとて、遂に亭を出て江邊に馳せ行けり。戴宗これを見て大いに苦しみ、乃ち宋江に對して云けるは、某不慮に彼を誘引し、後悔已ことを得ず願くば押司彼が無禮を免し給へ。宋江が云く、彼が本性天然かくのごとくんば、我却つて彼が直實なるを敬まふ。院長必ず隔心の言をいひ給ふなとて、兩人樂で琵琶亭の上にあり。閑談轉濃にして一興を催ほしけり。扨李逵は遂に江邊に至つて此處をみるに、八九十の漁船盡く首尾を連ねて、楊柳樹の下に櫳の縁を繩ぎ、若干の漁人等或は船傍を枕として睡るもあり。或ひは船の頭に出て結網もあり、或ひは水中に浮んで沐浴するもあり。此時五月の半にして、紅日はや西山に沈んとすれ共、魚牙の主未だ來つて艙を開かざれば、買ふ者は已に湊りしか共、尚商賣を始めず。李逵直ちに船の

邊に馳倚て呼はり云けるは、汝ら此の船に鮮魚あらば、其の大いなるを我に賣與へよ。漁人等答へて云く、我が輩いまだ魚牙主來らざるゆゑ、艙を開くこと能はず。汝岸の上を見給へ。若干の魚賣人都て魚牙主が來るを待居るなり。李逵が云く、何ぞ一向魚牙主を待ん。先兩尾の鮮魚を我に售れ。漁人等又答へて云く、我が漁船の舊例に、いまだ艙を開かざる前に、豫じめ先酒を供へ、船神を祭ることあり。我が輩只魚牙主が來るを待て、尚未だ船神に酒をも奠らざるに、いかんぞ妄りに艙を開いて魚を取出さんや。李逵是を聞て大いに怒り、忽ち一艘の漁船に跳乘しかば、漁人等李逵が勢ひに恐れてあへて攔らんとする者なかりけり。李逵擅に船中を捜しけれ共、一尾の魚もあらざりけり。大江の内にて魚を取漁船には、都て船の尾に一つの大孔を開て江水を出入させ活魚を養ふゆゑ、今李逵水なき艙の内ばかりを捜しけるに依て、曾て一つの魚も見えざりしなり。李逵又他の船に乘移りて捜しける處に、若干の漁人等都て岸の上に跳り上り、各竹篙を拿て李逵を打んとせしに、宋逵大いに怒り、焦燥て躍り向ひ、漁人等が亂に打かけたる竹篙を五六本奪ひ取り、忽ち扭折て棄ければ、漁人等これを見て大いに驚き、諸船繩を解て都て江中に撑開きたれば、李逵益猛り狂ひ、右の手に竹篙を持て彼の魚商人等を四面八方に追散して、頻りに猛威を振ふ處に、小路の上より一人の漢子進み來る。諸人是を見て、魚牙の主來り給ひぬと悅び、衆皆向ひ進んで云ひけるは、何ゆゑ長兄は晩く至り給ひしぞ。一人の大漢子魚を奪ひ取んとして、諸の魚船共悉く追散しぬ。彼の魚牙主が云く、其無禮をなす大漢子はいづれに在や。諸人李逵を指ざし云く、彼を見給へ。尚岸の邊に有て只顧人を尋ねて騷動す。彼の魚牙主これを見て忙はしく馳來り、大いに罵つて云けるは、汝賊漢豹の胃虎の肝を吃たる大膽者たりと云とも、焉ぞよく我が商賣を妨んや。早くこゝを走り去て禍を免かれよ。李逵此漢子をみるに、身の丈は六尺五六寸ばかりにして、年の頃は三十二三歳と見え面白く鬚黑く頭には萬字巾を戴き、身には白布衫を着し、人物風雅にして威風端嚴なり。李逵敢て詞をも回さず、竹篙を輪して彼の魚牙主に打てかゝる。那の漢子早くも進み入て、李逵が手中の竹篙を奪ひ取りし處に、李逵急に彼の漢子が頭を揪へしかば、彼の漢子已に三次まで李逵を蹋んとしけれども、李逵は原來水牛に等しき大力なれば、彼の漢子を推匾て少しも掙扎せず、恰も鐵鎚のごとき拳を擧て肩骨を一向續けて打ければ、彼の魚牙は、只徒に眼を睜り開く計りなり。斯る處に背後より一箇の人來つて李逵が手を握り、大いに責て云けるは、汝如何ぞかく酒に狂うて人を惱すや。李逵首を回して此の人等をみるに、乃ち宋江戴宗なりしかば、略手を鬆めける處に、彼の漢子忙はしく身を脫れ飛がごとくに馳去けり。戴宗深く李逵を恨みて云けるは、我豫じめ汝此のごとき事を惹出さんと料り知り、再三無用と制しけれども、汝我が言を容ずして江邊に來り、果して諸人を惱しぬるよな。若一拳に人を打殺しなば、必定命を償ふべし。汝すべからく以來を謹愼。李逵答へて云く、長兄かくのごとく云給ふは、連累を被んことを怕れてならん。もし我自から人を殺しなば、我獨り命を償ふのみ。何ぞ

必しも人に干らんや。宋江が云く、賢弟只顧爭論をなして平生の義を壞ふことなかれ、先再び琵琶亭に至り、酒を酌で怒氣を散せしめよ。此時李逵は宋江戴宗に隨て、纔に十歩ばかり往し處に、背後に一人の漢子來つて大いに呼はり罵つて云けるは、賊男子汝いよ〳〵力量あらば、今また雌雄を決せよ。李逵急に首を回らしこれをみれば、則ちかの魚牙主衣を脱去赤條々になり、一身の肉よりも白きを露し、獨り自から一艘の小船に駕して李逵が後の岸邊に撑至り、猶一向惡口せり。李逵これを聞て甚だ怒り、忽ち奔雷のごとく吼て身を回し來る。彼の漢子これを見て、船を岸に撑着、竹篙を撚つて頻りに李逵を罵りしかば、李逵も又罵つて云、汝果して勝負を決せんと思はゞ、早く岸に上つて手脚を交へよ。彼の漢子耳にも聞入ず、頓て竹篙を擧て李逵が腿の上を搠破りしかば、李逵憤然として大いに怒り、身を躍せて船の上に跳り乘し處に、彼の漢子は原李逵を賺して船に乘しめんと圖りしことなれば、今李逵が計に陷て船に乘りたるを見て大いに悅び、頓て篙を岸に着て船を撑開きしかば、船は箭のごとくに江心を望んで出にけり。李逵も頗る水性を識しかども、水中の働は陸路の働にしかざりしゆゑ、自から心大いに駭き、少し猶豫しける處に、彼の漢子篙を撇て呼りて云けるは、汝賊漢早く勝負を決せよとて、頓て李逵を捉へて又罵つて云けるは、我今汝と拳を交へんことを休て、先汝に飽まで水を飲しむべしとて、兩足を擧て枻を力に任せて踏しかば、彼の小船底は天に朝て倒に翻り、兩人の英雄齊しく水中に落ち入りぬ。宋江戴宗は忙しく岸邊に追至りて彼船を見るに、底を上にして倒に翻りければ、宋江戴宗岸の上に在て、這いかにと身を擣て憂へ恨しが、更に益もなかりけり。江岸の上にはや三五百人集まり、盡く柳の樹の下に立並んで見物し、各評議して云けるは、彼の大漢子此度は計に落しかば、縱ひ一命を脱れたりとも、滿腹に水を飲べし。嗚呼笑止やと衆皆手に汗をぞ揑りけり。宋江頸を伸して江面を望み見るに、彼の魚牙主李逵を揪へて一遭は扯上げ、又一遭は扯下げ、兩人の豪傑江中の清波碧浪の内に在り。浮つ沈つ組合ひ、今もや息絶なんと思はれけり。一人は全身雪よりも白く、一人は渾身墨よりも黑し。視る人毎に奇異の兩雄かなと譽ぬ者はなかりけり。宋江戴宗は李逵が水中に在て苦しめらるゝ體を見て、心を驚かしめける處に、彼の漢子又李逵を引上ては息を續せ、又引入れては水を飲しめ、斯すること數十度に至りしかば、宋江餘りに忍び兼、乃ち戴宗と商議して、一個の人を央で救はしめんと欲し、頓て戴宗を馳て先諸人にかの魚牙主が姓名を問ひし處に、諸人答へていはく、彼の白面の漢子は、當地に於て魚店の行家張順と云者なり。宋江忽然として想ひ出して云く、彼の者必定浪裡白跳と云ならん。諸人が云ふ、則ち其人なり。宋江是を聞、戴宗に對して云けるは、彼が兄張横と云ふ者、這回張順に書簡を送らんと欲して則ち其書を某に寄ぬ。某いまだ彼を訪ふ暇あらずして、其書簡尙營中に置り。戴宗が云く、已にかくあらば我宜しく張順を岸邊に呼寄すべしとて、頓て江中を望み大音に呼はりけるは、張豪傑先手を動かし給ふことなかれ。汝の令兄より書簡を寄せられてこゝにあり。今汝に此書簡を屆くべき間、其大漢

子を免して速に岸に上らしめ給へ。張順遙に此言を聞て、何人なるやと頭を擡げて岸の上を望み見るに、戴宗獨り諸人に拔出て在ければ、張順原來戴宗が面を識しゆゑ、則ち李逵を放ち棄、岸の上へ扒上り、戴宗に向ひ恭しく禮をなして云けるは、願はくば院長某が不禮を免し給へ。戴宗が云く、足下我が難儀を顧て宜しく彼者を饒し給へ。然らば我一個の人を汝に見えしめて悅ばすべし。張順已に領承して、再び水中に跳り入りぬ。此時李逵は浮つ沈つ苦しみけり。張順頓て李逵を把て扶け、兩の足にては水瀾踏あだかも平地を行くがごとくにして、江水身を浸すこと只臍より下のみなり。遂に岸の邊に至りければ、張順兩手を以て李逵が大腰を抱き、岸の上に投上げけり。諸の見物人一齊に吐と喝采暫く鳴も止ざりし。宋江岸の上に在、張順が水中の自由なるを見て、誠に張横が云し所差ざりけりと、暗に感心淺からず。已にして張順李逵同じく岸に上りて宋江等が前に至る。戴宗李逵を見るに、多く水を飲しとみえて、只顧口中より白水を吐ぬ。戴宗が云く、汝兩人先琵琶亭に至りて談話せよ。此時張順李逵各衣を着し總て四人、再び琵琶亭の上に來りて坐已に定まりしかば、戴宗則ち張順に問て云く、足下は我を識認給ふや。張順が云く、某素より院長の尊顏を識りしかども、未だ良緣あらずして謁を下風に取ざりけり。戴宗又李逵を指さして云く、足下常に彼をもかつて認識たるや。張順が云く、いかんぞ李長兄を見知らざらん。只未だ席を交へざるのみなり。李逵張順に對して云く、汝我に飽まで水を飲しめて嘸滿足にあるべし。張順答へて、汝も又我を痛く打て益〻喜悅なるべし。戴宗が云く、汝兩人今般却つて交りを結び盟を誓ふの期至れり。古の語にも打ずんば相識を成ずとこそいふなれ。李逵又張順に對して云く、汝必ず陸路に於て我を犯すことなかれ。張順答へて、我は只水中に在て汝を待べきに、汝必ず江邊に至ることなかれとて、四人齊しく一笑を催しけり。戴宗又宋江を指ざし、張順に對して云く、足下は此長兄を識認給ふや。張順つら〳〵宋江が面を見て云けるは、彼長兄は當地の人かはしらね共、某は曾て此江州にては見たることなし。李逵躍り出て云けるは、汝しらずや此長兄は是黑宋江と云人なり。張順が云く、彼山東の及時雨鄆城縣の宋押司にはあらずや。戴宗が云く、乃ち其及時雨宋公明なり。張順是を聞、忽ち地上に拜伏して云けるは、某かつて押司の大名を聞こと久し。今日いかなる吉日なれば、押司を覩奉るや。世上の人皆押司の清德を稱して云けるは、押司は能人の危きを扶け人の困るを救ひ給ふとなり。誠にこれを敬はずんば有るべからず。宋江が云く、某がごとき何ぞいふに足らん。前日我當地に來る時、揭陽嶺の下なる混江龍李俊が家に數日逗留し、其後又潯陽江の上にて足下の兄張横に遇、直に穆弘が家に數日滯留せしに、令兄張横足下に屆け得させよとて、一封の書簡を我に寄ぬ。然れ共我れ此所に至りていまだ日あらず。殊更足下の住所をも知ざるゆゑ、猶足下を訪ふこと延引せり。則ち其書簡を營中に置り。今日は戴院長李逵兩人に誘れ、此琵琶亭に至り、快く酒を酌て江中の風景を遊覽し、某又鮮魚を求めて猶三盃を酌んと欲しける處に、李逵自ら馳て鮮魚を求むべしとて、江邊に往け

るが、少刻有て江邊頻りに鬧ぬるゆゑ、酒保を遣はしこれを看せしめけるに、李逵爭論を做出したると告しによつて、これを勸解んとて忙しく江邊に馳出て、料らず足下に相まみゆ。今日已に三人の豪傑に會すること、是則ち天の賜る幸ひなり。先宜しく座を寛げ三盃を傾け給へとて、再三酒保に命じ酒肴を新たに設けしめ、頓て酒宴を始めける、張順又宋江に對して云けるは、長兄もし鮮魚を用ひんとならば、某自ら數尾の鮮魚を取て來るべし。宋江これを聞て悅び謝しければ、李逵も大いに悅び、則ちかくのごとくは我張順と共に往て魚を求むべし。戴宗これを責ていはく、汝水を飲て滿腹し、何ぞいまだ足ざるや。張順打笑ひて、李逵が手を携へ兩人已に琵琶亭を下つて江邊りに至り、張順諸の魚船を見て一聲呼はりしかば、彼江面の漁船盡く皆岸の邊りに漕着ぬ。張順問て云けるは、汝ら何れの船に大いなる鯉魚ありや。時に此漁船より答へて云く、大なる鯉魚は某が船にあり。又かの漁船より答へて云く、大なる鯉魚は某が船なりとて、暫時の間に十四五尾の鯉魚を携へ出ぬ。張順これを見て其内四尾を擇み取、再び琵琶亭に至りて宋江に送りしかば、宋江大いに悅びこれを謝し、乃ち又座を改めけるに、李逵は張順よりも長年なりければ、第三に座し、張順は第四に座し、彌興を得て酒を酌ける處に、二八ばかりなる一人の女、忽ち宋江が前に至りて恭しく禮を行ひ、頓て清音を開いて曲を唱ひければ、李逵これを聞て大いに怒り罵つて云く、我まさに豪傑の事を語り慰まんとおもふに、汝來つて一座の興を妨ぐるは、莫大の無禮なりとて、忽ち指を以て女が面を彈きけるに、彼女忽然として座上に倒れ、只昏々として半死の體に見えけり。酒樓の主大いに驚き、此の女の生死、分別すべからざれば、客を皆扯留置きて官司へ訴ふべしと騷ぎける。其の決着は次の卷に見るべし。

此卷に、酒保と有るは酒店にて客の前に侍し酒を篩ものなるべし。又造酒家にて酒保と云ふは、日本に俚俗杜氏と呼ぶものなるべし。前々の編、武將蔣門神を苦しめ、施恩が怨を報ふ處に出でたる酒保是ならん。然れば酒保の二字を、酒肆杜氏とのみ譯すべからず。又宋江醉を醒さんとて、魚辣湯を望み鮮魚を欲する、是は日本の潮煮に辛味を和したる食物なるべし。通俗忠義水滸傳には、魚辣湯のことなく、只鮮魚を欲するとあり。又紅魚と書り。日本の鯛赤魚いづれ海魚の名にて、潯陽大江なりとも海魚は有べからず。此江に網する金鱗の大鯉魚を紅魚とは云べからず。舶來の水滸傳には、魚辣湯、辣魚湯二樣にあり。紅白魚湯ともありて、紅魚と云こと見えず。

四編卷之六

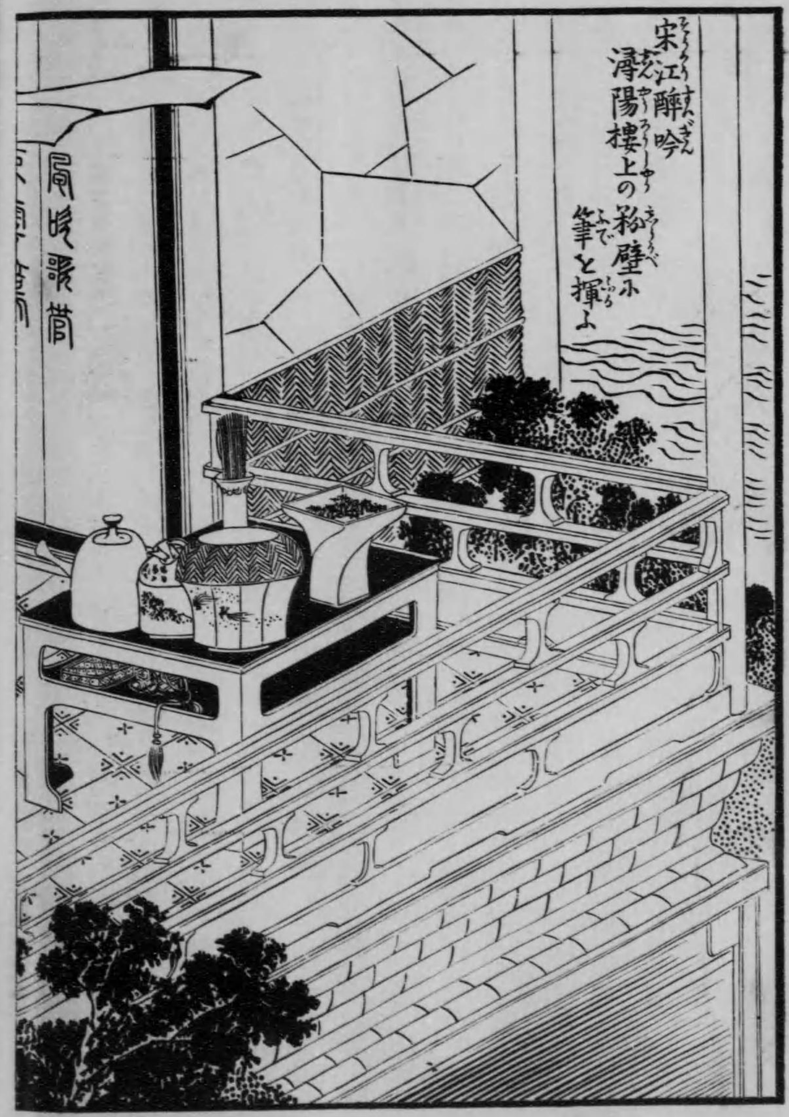
潯陽樓にして宋江反詩を吟ず

琵琶亭にては李逵女性を彈倒しければ、酒樓の主大に駭き、急に家僕に命じ女が口中に水を灌ぎ藥を含せ、漸〳〵甦しめ扶け起しけるに、面の上大に傷ひ破れけり。女が父母は原女が爲に事を動さんと欲しければ共、女を打たる者は黑旋風李逵なりと聞しかば、先自ら大いに怕れ、あへて一言の是非をも云ず、只手巾を把て女が頭を包み、父母同じく女を痛りけり。宋江此體を見て、先女が母を呼で問けるは、汝が夫の姓はいかん。彼老母が云、我が輩姓は宋にて原京師の者なり。女が名は玉蓮と申し、曲を知て唱ふにより、乃ち這琵琶亭に在て客の爲に曲を唱ひ、僅の助けを求め、親子三人これを過活とす。女本短氣者なるゆゑ、客の勢ひを顧ずして一向曲を唱ひ、反て貴客の怒りを惹出し、自ら苦みを取りぬ。我輩貴客を怨ることあらず。宋江彼が辭の老實なるを聞、尙且同姓たることを感じ、又老母に對して、汝宜しく人を我に跟て營中に遣せ。我汝に二十兩の銀を與へ、女が醫療錢に當しむべし。夫婦の者是を聞て忙はしく拜謝して云けるは、我輩豈敢て多くの銀を望んや。若三五兩の銀を得なば、是十分の福ひならん。宋江が云ふ、我が一言汝らを誑くことなし。汝宋老者自ら我

に隨ひ營中に來らば、我速に二十兩の銀を汝に與ふべし。宋老夫婦いよ〳〵拜謝して云ふ、貴客若肯て二十兩の銀を惠み給ひて我が輩を救ひ給はゞ、恩は天地と等うして親子三人身を殘るまで、これを忘るまじ。此時戴宗は大に李逵を恨み云けるは、汝又人を打傷ひ、宋長兄に多くの銀を費さしめ尙白々として悔ざるは、甚だ以て道理なし。李逵が云ふ、我は唯指頭を以て女が面を彈きけるに、彼自ら倒れぬ。我いまだ此のごとき懦弱なる女を見ず。汝親子若猶これを憤らば、我面を三百拳打て恨を雪げ。宋江等これを聞て衆皆一哄を催しけり。酒亭の上下事を表さず濟べきを悅び入ける。張順自ら酒保を呼んで、今日の席は我則ち東人なり、酒錢は我是を償ふべきぞ。宋江是を聞て、我賢弟等を引て酒を勸め、いかんぞ此席の主を張賢弟に讓んや。尤も禮に於て不可なり。張順再應席主たらんと求めて云けるは、宋張兄山東の地に居給ふ時だにも、我が兄弟兩人、何とぞ鄆城縣に赴て長兄を訪ひ奉らんことを願ひたるに、今日天幸を賜つて押司の尊顏を拜し、手を一亭に握る。いかんぞ一點の欵待を盡さゞらん。今日は某先席主をつとめ、聊尊敬の誠を表すべし。戴宗が云ふ、公明長兄すべからく某が言を聞給へ、張賢弟既に尊敬の心を表さんと欲して、再三席主をなさんと望むに、今日は先席主を張賢弟に讓て、其心の信を全からしめ給へ。宋公明が云、今日の席主原來某が當然なれ共、院長かく諫め給ふ上は、某豈敢て敎に違んや。他日に某酒宴を設け今日の席を還すべし。張順大に悅び、乃ち兩尾の鯉魚を携へて、戴宗李逵並に宋老と俱に宋江に隨づて琵琶亭を下り

遂に營中に至て抄事房に入りしかば、宋江取敢ず先兩錠二十兩の銀を宋老に與へけるに、宋老は天に歡び地に欣び再三拜謝して宿所に回りけり。此時天色既に晩けるゆゑ、張順彼兩尾の魚を宋江に送て別を告しかば、宋江頓て張横が書簡を取出して、張順に與へければ、是を請取直に別れて出去り、戴宗李逵も城下に立歸れり。宋江は兩尾の鯉魚を得て一尾は管營へ送り、一尾は自ら賞翫せしに、其味ひ甚だ美なるに依て多く用ひし處、其夜四更の時に至て腹頻りに痛み、曉までに凡二十度ばかり瀉し、只昏々として床の上に臥しけるが、宋江が人となり、常によく人を敬ひ交るゆゑにや、營中の流人ども都て宋江を訪ひ、湯を沸し粥を煮、或は手を按り足を拈り、殊更懇に看病をなせり。翌日張順又兩尾の鯉魚を携へ宋江を候ひける處に、宋江は諸の流人どもに看病せられて床の上に打臥して在ければ、張順これを見て大に驚ぎ、急に醫師を請て療治を加へんと欲する所に、宋江が云、我昨日多く魚肉を食しけるゆゑ、腹を壞ひてこれを苦しむのみ。別に重病にあらざれば、唯瀉を遏るの藥六和湯を求てこれを服さば、忽ち瀉も止り痛も住るべし。張順が云ふ、某今日も兩尾の鯉魚を携へしかども、宜しくこれを棄べし。宋江が云、既に兩尾の鯉魚を携へ給ふとならば、足下我が爲に是を管營と差撥とに分ち送り給へ。張順其言に應じ、乃ち鯉魚を把て管營と差撥とに送り、直に馳て六和湯を求め、再び營中に回り、宋江に用ひしめ、其日は張順暫く看病して遂に私宅に歸りけり。翌日戴宗李逵兩人多く酒食餚果を携へ、宋江を尋しに、病いまだ快からざるゆゑ、床の上に臥して酒肉をも用ひざれば、戴宗李逵大に憂へ、其日は終日看病して黄昏に回りけり。宋江は營中に在て、五七日六和湯を用ひし處に、病全く痊て快く覺えければ、城下に馳て、戴宗を訪んと欲しけれども、此日は若戴宗が來ることもやあらんと、心に待けれども、終に見えざりしかば、次の日宋江朝飯後若干銀を懐にし、城下に至て其邊の人に戴宗ゆゑ、城隍廟の間壁なる觀音庵を借て住給ふ。もし事あらば彼庵に尋往き給へ。宋江こゝに於て直に觀音庵に尋けるに、はや他行せし體にて庵門關しありしゆゑ、宋江立去て李逵が家を尋ける處、一個の人有て告て云ふ、黑旋風は未だ安身を定めず、東方に兩日住し、又西方に兩日歇み、偏に雲遊の如く其止る處しれず。宋江又張順が宅を問けるに、是は原來城外の村中に住し、城下に來ることは極て罕なり。宋江是を聞て大に悅び、再び城外に出て、張順が家を尋けれども、容易尋遇ず、自ら鬱々として數十步ばかり繞り出て、江中の風景を見るに、誠に類ひ少き佳觀なり。宋江すぐに一軒の酒樓に過りて、酒旆を仰ぎみるに、酒旆の上に潯陽江正庫雕と云ふ六つの文字あり。又簷の外に掛たる額には、蘇東坡が書たる潯陽樓といふ、三つの大文字あり。宋江此額を見て思ひけるは、我昔日鄆城縣に在し時、江州には潯陽樓と云ふ名所有と聞けるに、果して此處にありけるよな、我いかんぞ空しくこゝを過んや。宜しく樓に上て、風景をも一見せばやとて、樓前へ至て門の上をみるに、又兩面の額あり。五ツの大字有て世間無比酒と書けり。又一面の額には天下有名樓と云ふ五文字なり。

宋江已に樓に上り座を求め、獨り自ら欄杆に倚て目を縱にし此處をみるに、眞によき一座の酒樓なり。雕簷日に映じ、畫棟雲に飛び、欄杆低くして軒窻を接へ、簾幙高く戶牖に懸り、吹笙品笛總て座毎に設け、其美麗なること言語に盡すべからず。宋江良久しく此景を見て、讚嘆轉頻りなり。時に一人の酒保樓上に來て簾を下し、乃ち宋公に對して云けるは、官人は別に客を待給ふや。又獨り自ら酒を酌給ふや。宋江口に信せて答けるは、我猶兩人の客を待どもいまだみえず。汝先一樽の美酒と幾ばくの佳肴を携へ來れ。酒保謹で言を領し、遂に樓を下りて未だ暫くもせざるに、はや一樽の美酒と六盤の佳肴とを拿て、再び樓に上りしが、宋江これを見て心中想道、此のごとき美麗なる肴饌器皿他の及ぶ所にあらず、誠に富貴の江州かな。我罪を犯して此處に至り、かくのごとき眞山眞水を看て、浮生を慰さしむること又宜ならずや。我故鄕にも幾ばく名山古跡有といへども、曾てこれらの風景に如ず、これを樂しまずんば有べからずとて、只獨欄杆に靠て一盃を乾し、兩盞を酌、覺えず爛醉に及び、猛然として心中想ひけるは、我山東に生れ鄆城に長じ、天下の豪傑と交を結んで、一ッの虛名を世に振ふといへども、今已に三十餘歲に至て、いまだ功成名遂ず。剩へ罪を蒙りて此所に流され、我故鄕の老父舍弟にも再び面を對せず、斯參商の憂に逼ること、是何の應報なるぞやとて、潸然として淚を流し、風に臨み目に觸れ、恨を感じ懷を傷、忽ち一篇の西江月の詞を作て、酒保に筆墨を借、頓て身を起し粉壁の上を見るに、已に多く先輩の題詠ありければ、宋江暗に想ふやう、我も亦宜しく此壁の


宋江醉吟
潯陽樓上の粉壁ホ
筆と揮ふ

上に書べし。若他日身榮えて再び此處を過らば、重ねて此樓に上て我が此一篇の文字を看、今日の艱難を思ひ出すべしとて、自ら酒興に乘じ、即ち粉壁の上に筆を揮ひ、其詞を書して云ふ、

自レ幼曾攻二經史一。長生亦有二權謀一。恰如下猛虎臥二荒丘一。潛二伏爪牙一。忍受上。
不幸刺二文雙頰一。那堪レ配二在江州一。他年若得レ報二寃仇一。血染二潯陽江口一。

宋江書罷て大に悅び大に笑ひ、又數盃の酒を酌で醉益發し手を舞ひ足を踏で、再び又筆を擧げ、同じく四句の詩を吟じ、壁の上に寫していはく、

心在二山東一。身在レ吳　飄二蓬江海一。謾嗟吁
他時若遂二凌雲志一　敢笑二黃巢不二丈夫一

宋江已に詩を書了て、又其傍に鄆城の宋江作と五ッの大文字を書、則ち筆を擲て又自ら良久しく歌ひ、再び數盃の酒を飲んで、覺えず酩酊爛醉し、酒力に勝ずして遂に自ら袖を拂て樓を下り、偏に浪々滄々として忙はしく營中に回り、乃ち房門を開て床の上に打臥し、直ちに五更の時に至て酒醒けるに、昨日潯陽樓に在て詩を吟せしこと全くこれを覺えざりけり。こゝに又江州の岸に對して、無爲軍と云ふ所あり。此所に黃文炳と云て、昔日通判の職を做し者在けるが、經書を讀といへども、巧言令色の輩にて、心大きに容く、原來賢を嫉み能を妬み、己に勝れる者は是を害し、己にしかざる者を弄し、專ら鄉里に在て人を傷ふ。此黃文炳かつて江州の蔡九知府は、當朝の蔡太師が男たるを聞、